

オタクはなぜ貢ぐのか
- 「推し」にかかわる消費行動の
合理化に着目して -

筑波大学
図書館情報メディア研究科
2020 年 03 月
宮崎 恵実

目次

第1章 序論	4
1.1 研究背景.....	4
1.1.1 「推し」とは	4
1.1.2 「推し」とされる対象	4
1.1.3 「推し」についての意識（程度と方向性）	6
1.2 先行研究.....	7
1.2.1 「推し」について	7
1.2.2 ファンによる消費行動	7
1.2.3 G・バタイユの消尽概念と至高性	8
1.3 研究目的.....	9
1.4 用語の定義・説明.....	9
1.4.1 消費行動	9
1.4.2 合理化	9
1.4.3 ガチャと課金	10
1.4.4 アプリゲーム	10
第2章 調査概要.....	11
2.1 調査方法.....	11
2.2 調査内容・項目.....	11
2.2.1 「推し」について	11

2.2.2 「推し」にかかわる消費行動について	12
2.2.3 他ファンへの意識について	12
2.2.4 ライフストーリー	13
2.3 調査対象者.....	13
2.4 調査倫理.....	13
第3章 調査結果	14
3.1 調査対象者概要.....	14
3.2 調査対象者各々の回答と分析	15
3.2.1 A さん	16
3.2.2 B さん	25
3.2.3 C さん	32
3.2.4 D さん	43
3.2.5 E さん	52
3.2.6 F さん	63
3.2.7 G さん	68
3.2.8 H さん	76
3.2.9 I さん	80
3.2.10 J さん	87
3.2.11 K さん	97
3.3 「推し」の共通語としての面についての追加調査	100

第4章 考察.....	104
4.1 「推し」への多様な意識.....	104
4.1.1 「推し」への恋愛的な意識.....	104
4.1.2 「推し」への宗教的な意識.....	105
4.1.3 「推し」に対する消費者としての意識.....	105
4.2 合理化装置としての「推し」.....	106
4.2.1 共通語としての「推し」.....	106
4.2.2 合理化装置としての「推し」.....	107
4.3 「推し」にかかわる消費行動の合理化.....	108
4.3.1 「推し」にかかわる消費行動の動機の分類.....	108
4.3.2 「推し」にかかわる消費行動の動機のマトリクス.....	116
第5章 結論.....	120
5.1 結論.....	120
5.2 今後の課題.....	121
5.3 展望.....	121
引用・参考文献リスト.....	123

※協力者の意向により論文を一部修正し、付録を削除しています

第1章 序論

1.1 研究背景

現代の社会において、アイドルや、俳優、アニメやゲームのキャラクターなど「推し」と呼ばれる存在に熱狂的な関心を持ち、その「推し」に対し、同じCDを大量に買ったり、高価なプレゼントや差し入れを贈ったりなど、貢ぎにも思えるような消費行動を行う人が見られる。

1.1.1 「推し」とは

「推し」とは、「イチオシメンバー」の略であり、AKB48など大人数の女性アイドルグループのファン中心に、自分が一番応援している・好きなアイドルを示す言葉として浸透した。一般的な辞書による定義はまだ存在しないが、『実用日本語表現辞典』では「人やモノを薦めること、最も評価したい・応援したい対象として挙げること、または、そうした評価の対象となる人やモノなどを意味する表現」とされている。

原義である「推す」という言葉が、「適当な人・物を推薦する（大辞林¹）」という意味であるように、「推し」には、単に好きというよりも、対象の価値を認め、他の人に勧めるほどに強く好きであるというニュアンスが含まれることもある。²

1.1.2 「推し」とされる対象

もともとはアイドル文化として浸透した「推し」だが、近年ではアイドルや俳優、アーティスト、選手、アニメやゲームのキャラクターなど、「推し」とされる対象のジャンルは多岐にわたるようになってきた。対象をどこまでに定めるのかという明確な定義はなく、広がり続ける選択肢の中で、どの相手を「推し」とするのかは個々人それぞれである。

以下に、「推し」とされた対象がわかるツイートを掲載する。なお、画像は著作権や肖像権保護のために、ぼかし加工を施している。

¹ 三省堂. 1998. 大辞林, 初版, 第7刷, p. 333.

² “推し（おし）”. numan. 2019-03-07. <https://numan.tokyo/words/eGfUZ>, (参照 2020-01-03).

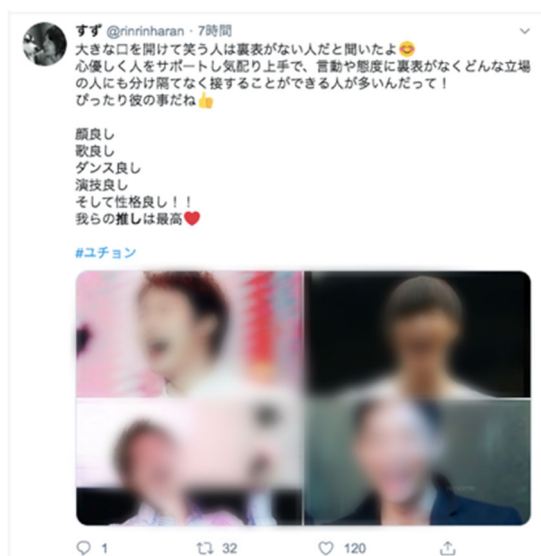


図 1 男性アイドルを推しとする人のツイート³



図 2 女性アイドルを推しとする人のツイート⁴



図 3 ゲームキャラクターを推しとする人のツイート⁵



図 4 アニメキャラクターを推しとする人のツイート⁶

³ すず. [@rinrinharan] . (2019、12.12) . Retrieved from
<https://twitter.com/rinrinharan/status/1204890710081589248?s=20>.

⁴ かっちゃん兵庫いりこ糸目推し・ふみちや推し. [@kobo34110] . (2019、12.12) . Retrieved from
<https://twitter.com/kobo34110/status/1204996910622183424?s=20>.

⁵ りりな 新垢の為お友達募集中。°☆. [@GcuxcAGHJmGWsF6] . (2019、12.10) . Retrieved from
<https://twitter.com/GcuxcAGHJmGWsF6/status/1204180368946892800?s=20>.

⁶ 空. [@KSbgj6pDgmpsPua] . (2019、12.05) . Retrieved from
<https://twitter.com/KSbgj6pDgmpsPua/status/1202242177218179072?s=20>.



図 5 虫を推しとする人のツイート⁷



図 6 マスコットキャラクターを推しとする人のツイート⁸

1.1.3 「推し」についての意識（程度と方向性）

個々人がその「推し」対象にどのような意味づけをし、どの程度の気持ちを向けているのか、という「推し」に対する意識は、程度・方向性ともに多様性がある。

程度の面として、「推し」という言葉には、その人の人生にかかわるほど大きな感情を向けている対象であるという意味が含まれている場合もあれば、「複数の同種のものの中からこれが一番好き」というようなライトな意味として使われている場合もある。

方向性については、「推し」をコンテンツ、自分をその消費者と捉えるだけでなく、恋愛・宗教的な眼差しを向けている可能性があることが、「推し」への感情として使用される言葉から示唆される。例えば、恋愛的文脈で使われる用語として、「ガチ恋・リア恋（恋愛的文脈的な気持ちを向けていること）」、宗教的な文脈で使われる用語として、「お布施（「推し」へ使うお金のこと）」「布教（他の人に「推し」を広めること）」「尊い（感情の高まりを示す）」などである。

⁷ 鶏驢馬. [@40koshow] . (2018, 10.07) . Retrieved from
<<https://twitter.com/40koshow/status/1048849224505290753?s=20>>.

⁸ まお ぽ・わ・る. [@electric__usagi] . (2019, 12.03) . Retrieved from
<https://twitter.com/electric__usagi/status/1201689851088666624?s=20>.

1.2 先行研究

1.2.1 「推し」について

現在、「推し」に焦点をあてた研究は少ない。植田（2019）⁹は、「推す」とは「アイドルとファンの間の関係性を表す言葉」としていて、単に「好きになる」「ファンになる」「応援する」だけではなく、感情移入することを意味し、楽曲などの作品が好きであるというよりも、（アイドルやアーティストなど）対象（人）自体に興味があると説明している。さらに、「単に「モノ」を売る仕組みは限界となり、応援し続けたいくなる関係性（ファンダム）をいかに構築できるかがファン獲得の鍵」だと述べ、「ファンと「仲間」のような関係を構築すること、感動できる「体験」の機会を増やす」ことがアイドル・エンタテインメントにおいての推しの機能であるとした。つまり、推しとはアイドルの直接コミュニケーションやヴァーチャル・コミュニケーションを強化し、「推し」としてファンダムを構築するマーケティング戦略の一つだと捉えている。

「萌え」について考察してきた斎藤（2019）¹⁰は、「萌え」よりも「推し」のほうが若者の間で使われるようになってきており、さらに「萌え」と「推し」の間には何かしらの共通点があると述べている。「萌え」は、性的興奮や恋愛感情と容易に結びつき、多くの場合「萌え」の体験は性的興奮や恋愛感情を伴う。そして「萌え」は性的興奮や恋愛感情を増強する。しかし「萌え」はそれらには還元できない「なにか」を含んでいる。また、それらを含まない「萌え」は、頻度としては少なくとも明らかに存在している」というように「萌え」と恋愛感情との関連を述べている。斎藤は、「萌えの対象」として「推し」をあげており、「推し」にもこの感情についての分析は適用され则认为られる。加えて、オタクと称されている人たちが「尊い」や「布教」という言葉を使うことに対し、「このような表現は、「推し」や「萌え」の対象に対する強い敬意を含意していると思われ、まるで宗教の神や仏などの超越的なものへの帰依の態度に共通するものが感じられる」というように、宗教との関連性を述べている。

1.2.2 ファンによる消費行動

ファンによる消費行動について、大野（2007）¹¹は、「彼らにとってチームは自分自身で

⁹ 植田 康孝. アイドル・エンタテインメント概説(3)アイドルを「推す」「担」行為に見る「ファンダム」. 江戸川大学紀要. 2019, vol. 29 p. 133-153.
https://edo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=850&item_no=1&attribute_id=18&file_no=1, (参照 2019-12-17).

¹⁰ 斎藤 清二. 「あ！萌え」の構造 (10) - 「萌え」から「推し」へ. 対人援助学マガジン. 2019, vol. 29 p. 163-168. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol38/27.pdf>, (参照 2019-12-17).

¹¹ 大野 貴司. ファン・コミュニティ：性格と機能. 体育・スポーツ経営学研究. 2007, vol. 21, no. 1, p. 47-55.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsmpes/21/1/21_KJ00008439659/_pdf/-char/ja, (参照 2019-12-17).

あり、そこにアイデンティティを見出しているのである。熱狂的なファンにとっては、特定のチームの試合のチケットを購入し、グッズを購入し、そのチームを応援をするという行為は、自分が何者か、すなわちアイデンティティを規定することなのである」と述べ、スポーツファンにとって、応援するチームについての消費行動（本文では消費行為）は、自己のアイデンティティを高める手段であると指摘している。さらに、ファンは同じチームへともに消費行動を行うファン・コミュニティに属し、他ファンへの理解と解釈を深め、そして他ファンとの差別化を通してアイデンティティを高めていると考察している。

和田（2011）¹²は、製品を中心に行われていた従来の消費者行動研究では陽の目の当たらなかった、絵画や演劇などのアート財を「消費者行動研究のわすれ物」と称し、それらがどのような特徴を持つのか検討している。その中で、宝塚のファンには、歌劇自体を消費する「作品消費」に対して、歌劇の演目がなんであれ特定のスターを応援し続ける「パーソン消費」があることを指摘した。特に宝塚ファンクラブでは、作品消費よりもこのパーソン消費が優先しており、自分の応援する劇団の生徒を、ファン自らの時間と体を使って長期継続的支援していると述べている。そして、「ここに宝塚歌劇ファンの消費行動が「関係性」によって成り立っていることになる。スターの成長プロセスを応援し、ファン・コミュニティの中で活動することによって自らも成長するという図式である」と述べ、「関係性」こそがこの「パーソン消費」を成り立たせていると考察している。

1.2.3 G・バタイユの消尽概念と至高性

消尽とは、「その活動自体のうちにのみ目的性を見出すということ」「生産された富や財を<費やす>ことが、そのこと自体において価値を持つ仕方を使い尽くすこと」という意味である。

フランスの思想家 G・バタイユ（1897-1962）は消尽の例として、古代アステカ族の王が祝祭のとき民のために財を浪費したことをあげた。また、自分の財力を誇示するために、高価なものを人に贈り、贈られた方はさらに高価なものを返礼し、贈り物の応酬を繰り返すポトラッチという儀式も例に挙げている。かつて、「利害の原理」とは全く違う原理が働いていて、消尽が行われていた。それは現代的には非生産的で無駄なように見えるが、バタイユは有用性というものによって正当化されないものを享受することこそに至高性があると評価し、常に有用性に隷属している人間は、非生産的な消尽を行うことで至高性を回復するとした。

人間から有用性を切り離すことは難しいが、例えば発作的な笑いや度を越した涙のような瞬間的な情動の中に至高性は見られる。それらは、突き詰めてみれば、理性によって想像しうる期待がリアンくなにもものでもないもの（rien）>に変わる瞬間、「不可能性が、突如として現実へと変わった」瞬間、である。ゲーテが「死とは、ありえないことなのだが、

¹² 和田 充夫. 消費者行動研究の忘れもの—アート財消費の視点から. 商学論究. 2011, vol.58, no.4, p.217-230.
https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=20375&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1, (参照 2019-12-17).

突如として現実へと変わる不可能なのだ」というように、死は、バタイユに言わせれば至高な存在である。バタイユは、死、聖なるもの、エロティシズム、芸術、破壊などにこの至高性があるとした。

1.3 研究目的

これまで、「推し」を推す主体であるファンや、「推し」へ向ける情動と近いと言われる「萌え」という感情についての研究はされてきた。しかし、「推し」という客体の言葉が登場し、ファンや「萌え」に代わって使用され始めたが、容易に「推し」とはファン（主体）に「萌え」に近い感情を向けられる対象（客体）のことであるとは言い切れない。これまでファンや「萌え」を使用していた人が、「推し」という言葉を好んで使い始めたならば、「推し」にはファンや「萌え」には表すことのない意識やニュアンスがあると考えることができるからである。従来のファン研究や「萌え」研究の文脈を汲みつつも、「推し」として独自に研究する意義がある。

また、「推し」について消費行動を行う人々を焦点に当てて、その意味について調査した研究はまだない。和田（2011）¹²が「パーソン消費」と呼ぶような、本人たち以外からは一見非合理的にも見える消費行動について研究することは、文化的にも経済的にも意義があると考えられる。

したがって、「推し」という言葉を使う個々人それぞれの「推し」に対する意識の違いや、その意識から派生する、「推し」にかかわる消費行動の合理化の仕組みについて明らかにすることが本研究の目的である。

1.4 用語の定義・説明

本研究において用いられる用語や、調査対象者がインタビューの際に語った独特な用語を定義・説明する。

1.4.1 消費行動

本研究において、消費行動とは個人が商品・サービスを購入する行動のみを指す。購入前の検討や購入にかかわる思考などは含まない。

1.4.2 合理化

本研究において、合理化とは「行為の正当化のための意味づけ」を意味する。これは、

M・ヴェーバー（1864-1920）の文脈を汲んでおり、例えば、野村（1992）¹³は著書『社会学感覚』の中で、「現実には体験するさまざまな苦難をどう意味づけるか、またそこから救済されるにはどうしたらいいのか、救済された状態とはどういう状態なのか——これらを合理的に説明するのが宗教の世界像なのである」と述べ、ヴェーバーの宗教社会学的視点から見れば宗教とは「知の合理化」であり、自身の幸福や不幸を合理的に説明（カオスや天変地異に意味づけ）してくれる宗教を信じることで、自身の幸福や不幸を正当化することができる、とまとめている。すなわち、宗教を信じるということ（行為）は、宗教が自身の幸福や不幸を一定のロジックで意味づけしてくれるという点で合理化（正当化）されているのである。

本研究では、これらの文脈を踏まえ、「推し」への消費行動という行為が、個々人の中でどのように意味づけや正当化されているのか、という意味で、「合理化」という語を利用している。

1.4.3 ガチャと課金

本研究においては、「ガチャ」は主にスマートフォンやタブレット端末で遊べるアプリゲームに導入されている電子くじのことを指す。語源は、カプセルトイの俗称である「ガチャ」であり、カプセルトイのように、ゲーム内で使用するキャラクターや装備品を確立で排出する仕組みである。ガチャを行うことを、カプセルトイのレバーを回すことにたとえて「ガチャを回す」と表現することが多い。

最近のアプリゲームの傾向として、アプリのインストールは無料でその後も基本は無料で楽しむことができるが、無料で獲得できる以上のガチャを回す権利がほしい場合は購入する必要がある（フリーミアムモデル¹⁴）。この購入行動は俗に「課金」と呼ばれている。本稿でもこの行為を「課金」とする。

1.4.4 アプリゲーム

ガチャが実装されていない、スマートフォンやタブレット端末で遊べるアプリゲームも多数存在する。しかし、本研究の調査対象者の語るアプリゲームはすべてガチャが実装されていることや、このガチャについても「推し」にかかわる消費行動として考察したいため、本項では「アプリゲーム」の語を使用する際は「ガチャ」が実装されたスマートフォンやタブレット端末で遊べるアプリゲームのことを指す。

¹³ 野村一夫．「宗教文化論」．社会学感覚．文化書房博文社，1992，p. 338－390.

¹⁴新井 範子．ソーシャルゲームにおけるユーザーの心理特性と課金行動の関連性について．上智経済論集．2013 年，58，1・2，p. 277-287，
<http://dept.sophia.ac.jp/econ/data/58-21.pdf>，（2019-12-03）.

第2章 調査概要

2.1 調査方法

調査においては、インタビューによる質的調査を行った。本研究では、「推し」という言葉を使う個々人それぞれの「推し」に対する意識の違いや、その意識から派生する、「推し」にかかわる消費行動の合理化の仕組みについて明らかにすることを目的とする。これらの回答には一定の形が存在せず、個々人によって異なる考え方をもつことが予想される。そのため、調査協力者の考えを柔軟かつ仔細に聞くことのできる質的調査を採用した。

インタビューは、大まかな質問項目を事前に決めておくが、回答者の答えによっては事前に考えておいた質問項目を臨機応変に変化させていく半構造化インタビューを採用し、一人に対し1時間半～2時間半のインタビューを1～2回行った。これは時間経過による意識の変化の聞き取りと、ラポール¹⁵の形成によるより深いライフストーリーの聞き取りを目的としたものである。必要な場合は、メールやLINE、TwitterのDMなどのテキストメッセージを用いて追加調査を行った。

2.2 調査内容・項目

半構造化インタビューの実施にあたり、事前に大まかな調査項目を設定した。調査項目は大きく分けて、以下の4つである。その他、その場の状況にあわせ、話題を限定せずにインタビューを行った。

2.2.1 「推し」について

背景でも述べたとおり、「推し」とされる対象は、アイドルや俳優、ゲームやアニメのキャラクターなど多岐にわたる。そのほぼ無限と言っても良い選択肢の中から、調査対象者がどの対象を「推し」としているのかを尋ねた。具体的には、「推し」の属性、「推し」が活躍する場所、「推し」にかかわる文脈などである。さらに、その「推し」の選択をするにあたって、その「推し」のどの点が調査対象者の琴線に触れたのか、これまでどのような「推し」を推してきたのか、「推し」をどのような存在だと意味付けているか、他の存在で代替できるか、他の人は「推し」をどのように意味付けているか、など、調査対象者自身の現在の「推し」についての意識を聞き取った上で、「推し」という大きな概念への意識についても様々な聞き方で幅広く尋ねた。

¹⁵ 心理学で、人と人との間がなごやかな心の通い合った状態であること。親密な信頼関係にあること。心理療法や調査・検査などで、面接者と被面接者との関係についていう。（三省堂、1998、大辞林、初版、第7刷、p. 2520.）

質問例

- 「推し」はどんな人か（性別、年齢、職業など）
- これまでの「推し」はどんな人か（性別、年齢、職業など）
- 「推し」のどこが好きか
- 「推し」に恋愛感情はあるか
- 「ガチ恋」「リア恋」などの言葉を使うか、なぜか
- 「推し」に信仰心を持っているか
- 「尊い」「お布施」などの言葉を使うか、なぜか

2.2.2 「推し」にかかわる消費行動について

「推し」にかかわる消費行動の合理化を明らかにするため、具体的に調査対象者が「推し」に関係するどのような物・コンテンツ・その他サービスなどにお金を実際に払ったのか、また、それが自分の収入との兼ね合いでどの程度の重さを持つのかを聞き取った。さらに、その消費行動をとるに至った理由、動機、調査対象者にとっての意味などを尋ねた。

また、実際の行為だけではなく、「推し」にかかわる消費行動について、調査対象者個々人がどのように思っているのか、どのようにあるべきだと考えているのか、どのようにはなっていけないと思うかなど、「推し」にかかわる消費行動全般についての意識も尋ねた。

質問例

- 「推し」にかかわることや物にどの程度お金をかけているか
- 「推し」にかかわるどんなことや物にお金をかけているか
- 買ったグッズなどは大切にしているか
- 「推し」へ使ったお金は貢ぎだと思っているか

2.2.3 他ファンへの意識について

「推し」にかかわる意識や消費行動の動機には、「推し」対自分だけではなく、自分対他ファンや、「推し」対他ファンの影響がある可能性がある。他ファンに対して仲間意識があるか敵対心があるか、それとも無関心か、をまず聞き取った上で、なぜそのような感情が生まれるのかを深く尋ねた。

質問例

- 同じ「推し」を推す他ファンと交流はあるか
- 仲の良い他ファンはいるか、どんな人か
- 同担拒否¹⁶（推し被り敵視¹⁷）を感じるか
- 他ファンに勝ちたいという気持ちはあるか

¹⁶ 「担当」（ジャニーズのファン用語で「推し」とほぼ同じ意味）を同じくする他ファンに対して拒否感を感じることを指す。

¹⁷ 同担拒否と同じ意味。調査対象者のインタビューで知った言葉であるため、質問の際は同担拒否を利用した。

2.2.4 ライフストーリー

「推し」という存在は、程度の差はあれど、調査対象者の琴線に触れる存在である。そのような感情は、調査対象者が価値あると（無意識・意識的関わらず）考えるものに触れた際に起こりうると考えられる。この「推し」の意識にかかわる価値観は、調査対象者個人のライフストーリーに基づいて形成されてきた可能性がある。さらに、「推し」や他ファンなど自分以外の人間へ関わり方には、友人や両親、家族、恋人など、「推し」とは別の文脈に基づく、これまで関わってきた人々からの影響があると考えられる。以上のことより、調査対象者一人ひとりのライフストーリーについての質問も行った。具体的には、両親や家族との関係、家の宗教や宗教観、これまでの恋愛や持っている恋愛観、学校について、友人関係などである。

質問例

- 家族（両親、兄弟姉妹）はどのような人か
- 小中高はどのような学生だったか
- どのような友人がいるか
- 宗教は身近だったか
- これまでどのような恋愛をしてきたか

2.3 調査対象者

「推し」という言葉を知っており、自分の持っている「推し」という概念に当てはまる対象が存在する人を条件として調査対象者を選定した。

調査対象者の選定には、スノーボールサンプリングを用いた。

2.4 調査倫理

本研究の調査は、筑波大学図書館情報メディア系研究倫理審査委員会に承認を得て行った。倫理審査の際には、調査協力者に配布する本研究の協力依頼について書かれた依頼書、同意書に関しても同時に申請し、承認後、調査協力者に配布している。

調査依頼は、メールや LINE、Twitter の DM など依頼メッセージを送信し、協力が得られた方々に調査を行う形をとった。この際、研究目的・調査概要について記載し、初回の調査を行う直前には、詳細な内容を記載した依頼書を読んでもらい、本人の了承を得た後、インタビュー調査を実施した。またインタビューに入る際には、IC レコーダーやスマートフォンでインタビュー内容を記録することを伝え、承諾を得た後にセッティングをし、インタビューを記録した。

第3章 調査結果

3.1 調査対象者概要

以下の表1に本稿における調査対象者を表すアルファベット記号、性別、年齢、職業、インタビュー年月日(*はその期間内でメール、LINE、TwitterのDMによる複数回のテキストメッセージによる聞き取りを行ったことを示している)、「推し」とする対象(敬称略)、をまとめた。年齢および職業は調査初回時点でのものである。

表 1 調査対象者一覧

	性別	年齢	職業	インタビュー 年月日	「推し」とする対象 (敬称略)
A	女性	23	パチンコ店の店員	2018/09/02 2019/08/21 *2019/10-12	<ul style="list-style-type: none"> • ラッパーO(ラッパー、男性) • 松永天馬(ミュージシャン、男性) 2回目インタビューより <ul style="list-style-type: none"> • 成河(俳優、男性)
B	女性	32	医療事務	2018/09/28	<ul style="list-style-type: none"> • ラッパーO(ラッパー、男性) • 愛わなび(アイドル、女性)
C	女性	26	みなし公務員	2018/09/28 2019/08/30 *2019/10-12	<ul style="list-style-type: none"> • 俳優P(俳優、男性) 2回目インタビューより <ul style="list-style-type: none"> • 俳優Q(俳優、男性)
D	女性	27	福祉系職員	2018/10/09 2019/08/19 *2019/10-12	<ul style="list-style-type: none"> • 俳優R(俳優、男性) • 俳優S(俳優、男性) • 俳優T(俳優、男性) • 俳優U(俳優、男性) • 俳優V(俳優、男性) • 俳優W(俳優、男性) • 俳優X(俳優、男性) • アイドルY(アイドル、男性)
E	女性	26	宝石店の販売員	2018/10/21 2019/09/20 *2019/10-12	<ul style="list-style-type: none"> • アイドルZ(アイドル、女性) 2回目インタビューより <ul style="list-style-type: none"> • 東海オンエア (YouTuberグループ、男性)
F	女性	30	医療事務	2018/11/21	<ul style="list-style-type: none"> • 一条シン(アニメキャラ、男性) • 瀬名泉(ゲームキャラ、男性)
G	女性	24	なし	2018/10/21 2019/08/19 *2019/10-12	<ul style="list-style-type: none"> • フィロソフィーのダンス (アイドルグループ、女性)

H	女性	22	スーパー の総合職	2018/09/10 2019/08/21 *2019/10-12	<ul style="list-style-type: none"> 菜森まな（ゲームキャラ、女性） 双葉杏（ゲームキャラ、女性） 二宮飛鳥（ゲームキャラ、女性） 2回目インタビューより <ul style="list-style-type: none"> スツルム（ゲームキャラ、女性）
I	男性	20	大学生	2019/03/08 2019/12/11	<ul style="list-style-type: none"> 作家L（作家、男性） ゲームキャラM （ゲームキャラ、女性） XAI（歌手、女性）
J	男性	27	鉄道会社 の車掌	2019/10/14 *2019/10-12	<ul style="list-style-type: none"> チルノ（ゲームキャラ、女性）
K	女性	24	ご本人の 希望により 記載なし	2019/11/24 2019/12/01 *2019/11-12	<ul style="list-style-type: none"> 上司N（男性） 上司複数名（男女）

以降、調査対象者は表1で定めたアルファベット記号で表すものとする。

Aさんについては、ご本人の希望により「推し」のラッパーを匿名表記とし、ラッパー0とする。また、Iさんについては、ご本人の希望により「推し」の作家とゲームキャラを匿名表記とし、作家の「推し」を作家L、「推し」のゲームキャラをゲームキャラMとする。

3.2 調査対象者各々の回答と分析

以下では、調査対象者各々へ行ったインタビュー調査の回答及び分析をまとめる。なお、本文における語りの引用は、いずれも読みやすいよう、言いよどみや吃りをある程度削除している。また、語りの引用内の（）は質問者による質問を表す。

3.2.1 Aさん

Aさんは、第一回インタビュー時 23 才で、パチンコ店にて店員をしている女性である。Bさん、Cさん、Dさんと友人関係にある。

3.2.1.1 「推し」について

Aさんは、第一回インタビュー当時は、男性ラッパーであるラッパー0 と、男性ミュージシャンである松永天馬を「推し」として挙げていたが、その約一年後となる二回目のインタビューでは、さらに最近の「推し」として男性舞台俳優である成河を挙げた。

一回目のインタビューの時点では、ラッパー0 に今一番熱意があり、2年3ヶ月推していると言っており、松永天馬はコンスタントに現場¹⁸に6年通っているという点で、一番長続きしている「推し」だと語っていた。二回目のインタビューの時点では、成河に一番熱意があるが、成河が舞台俳優だという性質上、成河の現場は公演であり内容は（演技に差はあれど）毎回同じなので、現場が被ればラッパー0 や松永天馬を優先するという。

複数人「推し」を挙げているが、

なんか、全部、熱量（の差）はあれど、均等に全部推してはいる。二次元¹⁹だとわたしなんかすぐに違うのが、推しになって、他のやつどうでもよくなっちゃうんだけど。飽きちゃうのが多い。私もう、学生時代好きだったジャンルとか覚えてないもん。でもなんか三次元²⁰だと、好きになってから、違うもの好きになっても、興味がなくなるから。どんどん私の場合は増えてく。推し変じゃなくて推し増しなんだよ。（第一回インタビューより）

と、「推し変（「推し」を変えること）」ではなく「推し増し（「推し」が増えること）」であると語っている。

（1）「推し」への恋愛の意識

Aさんは「推しに恋愛感情はない」という。しかし、基本スタンスは「推し増し」でありながら、唯一飽きたというミュージカル俳優の佐々木崇を挙げ、「不思議な感覚だった」とその結婚報告に衝撃を受けた話を以下のようにしている。

佐々木崇のプロマイド燃やしたことある。あれは、急に結婚発表されて、動揺しちゃって、意

¹⁸ ライブ、握手会、公演、トークショーなど、「推し」がかかわるイベント全般のこと。

¹⁹ アニメやテレビゲームなどのキャラクター。印刷物やディスプレイなどの平面に表示されることから。（小学館, 2019. デジタル大辞泉.）

²⁰ 二次元と対比し、現実空間（三次元）に存在する人やコンテンツのこと

味がわかんなくて、燃やして、そのまま近くのファミレスに行って、ずっと日本酒飲んで、わーってずっと飲んで、麦と日本酒をずっとちゃんぽんして、ポテト食って帰った。(第一回インタビューより)

このように、佐々木崇の結婚について動揺しながらも、以下のように、「付き合いたいわけではない」という気持ちは確かなものでありながら、「推し」は必ず異性であることや、「知ってほしい気持ち」は存在するという。

普通に好きの感情はあるけどさ、もちろん、それが付き合いたいとかじゃないわけよ。私ぶっちゃけ女の子あんまり推せないから、男性だからって推してるのもあるかもしれないけど、別に付き合いたいから推してるわけじゃなくて。でもなんか見てもらいたいはあるかも。もしかしたら。知ってほしい？自分が推してる人間だっけの知ってほしい、認知がほしいってのは正直ある。(第一回インタビューより)

このあと、これらの気持ちは「推し」を「公共物」として捉えていることから起因するのでは、という自らの考察を以下のように語った。

私、(推しを)公共物だと思ってる。なんか、なんだろう、公園があって、みんなで楽しく遊んでるじゃん。みんなで楽しく遊んでるところにさ、急に嫁が管理人一って出てきたらキレルじゃん。好きにできなくなっちゃった悲しみ。だから、あの、私、公共施設だと思ってるつつけど、最初から管理人がいるって分かれば、あ、管理人いるんすねってなるから、最初に好きになる段階で、彼女いたりとか結婚相手いるのは別にいいんだよ。急に現れると本当に私動揺しちゃう。びっくりしちゃう、どうしても。(第一回インタビューより)

2回目のインタビューでは、結婚している成河に対して「14、15年前(結婚する前)から好きだったら、ショックだったろうと思う」と言いつつ、特に気になってない旨を語った。しかし、「推し」の嫁が「家族アピールや嫁アピールされたら、クソ雌って思っちゃうかもしれない」と語ったとおり、独占欲や嫉妬に近い感情は持っていると推測できる。

恋愛と「推し」の違いについて、「好意が返ってくる」ことだと語った。恋愛がうまくいかないことについて「推しへの好意って絶対返ってこないのがわかってるけど、恋人は返ってくるから、わからなくなっちゃう」と語ることや、「私ぶっちゃけ女の子あんまり推せないから、男性だからって推してるのもあるかもしれないけど」という語りで、少なくとも恋愛対象の性別であることは意識していることから、恋愛感情から派生した大きな感情を安心して表現できる先として「推し」を捉えている可能性がある。

(2)「推し」への信仰の意識

一回目のインタビューでの「「推し」に対して「尊い」という言葉を使うか？」という問いに対しては、当時一番推していたラッパー0に関して「使わない」と答え、「だっておっさんだし、尊くないし」と答え、二回目のインタビューでは「言葉の力の強さ」という意味で、作詞を行う松永天馬には、昔は宗教的な気持ちを持っていたと語った。一方で、松永天馬の他ファンに見られた「やることなすこと全部好き、お金全部持ってってみたい」「盲目的な信者」ではない、「そこまでいかなかったかも」と、他ファンの強い信仰心と比べて自分の信仰心は弱かったと語っている。

Aさんは、日常的に宗教を信仰する両親（特に母親）による、家での強い宗教の押し付けに強い反感とストレスを感じている。もしも実家を出たら、そのストレスから開放され、「オタクやんなくても別に大丈夫になるのかもしれない」と話しており、オタクをすること、「推し」を推すことはストレス発散の面があることを肯定している。加えて、佐々木崇を推していた時期は、仕事の忙しさや両親からのストレスで、「それだけ（佐々木崇を推すこと）だけが生きがいになっていた時期があった」という話をしている。「（Aさんの）両親にとっての宗教みたいなものだね」という相槌を打ったところ、以下のように語った。

結構そう思ってたかも。親が宗教に必死になってるのと同じような感覚で、私は推しのこと好きなんだよっていう、感覚ではいるんだけど、まあ親はそれに対して「そうだね」とは思わないから。でも私はそういう感覚でいる、感じではある。（中略）

縋っているというよりは、私が推してるのが、なんかオタクやってるのが生活の一部のように、向こう（親）も起きたら勤行して、夜になったら会合に行ってみたいなのがルーティンになるように、私は推してるんだよって言うてはいる。（第二回インタビューより）

両親の宗教の信仰というライフストーリーを持つAさんは、「盲目的に信じる」ということへの拒否感を感じつつも、「生きがい」や「ストレスからの開放」という文脈で「推し」を推すことに宗教性に似たものを感じていることが伺える。

3.2.1.2 「推し」にかかわる消費行動について

初回のインタビューでは、給料はおよそ年収200万円で、その三分の一以上をコンスタントに「推し」に使っていると語った。家計簿などをつけていないため、正確な出費は把握していないという。

「現場至上主義」と語る、「現場にたくさん行くオタクが一番偉い」という主義が自分の中にあると言い、どの「推し」に対しても現場に数多く通うことを信条として捉えていることが伺える。「アーバン²¹のころに、全部現場行く人を見てすごいと思った」と、松永天馬の他ファンの影響から生まれた信条であると推測できる。インタビュー後のLINEでの

²¹ アーバンギャルドのこと。松永天馬によって結成されたポップロックバンド。

追加調査では、「その信条だけではなく、多く現場に通うことで「推し」に顔を覚えてもらったり、認知²²という面の動機があるか？」という旨の質問に対して、以下のように肯定している。

頻繁に行く事で認知されたいという思いはどの現場においてもバリバリにあります！！現場に行く事が自分にとっての正義なので相手にとって現場にいつもいる人～という認知の仕方をされるの一番嬉しいしなんなら認知されたいので最初の頃意識的に多めに通ったりする👩♀あと認知されると気持ち的にも通いやすくなる…（LINEでの追加調査の語りより）

このように、「推し」にいつも現場にいる人（Aさんにとっての正義）」という形で認知されることが嬉しいと、現場に通う（＝チケットを買う、交通費など）という消費行動について、「現場至上主義」と「認知」という動機を複合的に肯定している。

また、プレゼントは「消費者と生産者の関係が好き」と語り、プレゼントをあげたり、現場にたくさん通うことで認知され、「そこ（消費者と生産者の関係）から外された行為をされると嬉しい」と語っている。

（１）ラッパー0について

シャツやネクタイなどの身につけるものや、「推し」のイベントの際に飾るフラワースタンドなどを贈ったと語ってくれた。

洋服などの身につけるものについては、以下のように動機を語った。

その人の生活の潤いになればいいかなって。生活の足しになればみたいな感じではある。生活の水準をあげていただきたい、わたしは。よれよれのシャツを着てほしくないから、シャツを渡すみたいな。（第一回インタビューより）

「生活の水準を挙げてほしい」「生活の潤いにしてほしい」など、「推し」本人の生活を気遣う旨の動機があるという。また、ラッパー0が実際にAさんがプレゼントしたネクタイをつけていることについて、「面白かった」と語っている。この発言についてさらに尋ねると、「どうでもいいプレゼントじゃないってこと」「開けてくれたという事実が嬉しい」と、プレゼントする動機とまでは言えないが、自分からのプレゼントが推しに与える影響についても言及している。

35,000円のフラワースタンドについて、自分が「推し」にあげた中では一番高価なプレゼントであると語った。どうしてフラワースタンドをあげるのか、貢ぎだと思っているか？という質問に対しては、貢ぎではなく、誕生日祝いや、大きなイベントへのお祝いだとし

²² ファンとして「推し」に顔や名前を覚えてもらうこと

たあと、

花って一番高価っていうかさ、あの、なんだろう、割りに合わないっちゃあ割に合わないプレゼントだと思って。すぐなくなって消えものだけど、まあまあ高いし、持って帰れるほどじゃないし。でもそこにあるだけで華やかになるじゃん。なんかまあ、その推しのワンマンとかでさ、やっぱ、多分自分自身もすごい不安だったりプレッシャーだったりどうしようって思ってるかもしれないけどさ、ファンから花が届くだけでもう少しは不安が薄れるかなっていう感覚はある。頑張ってくれて。(中略)

フラスタってなんか人のマウントに使われたりするんだけど、私がいる現場はぶっちゃけそういうのあんまないから。(第一回インタビューより)


と、フラワースタンドの持つ華やかさや高価な割に物質的な有用性が低いイメージと、「推し」の不安への寄り添い、他ファンへのマウントではないことを詳細に語った。

(2) 佐々木崇について

現在は推すのをやめたという佐々木崇だが、今までに一番貢いた「推し」は佐々木崇だという。彼に対しては毎回公演欠かさず通い、毎公演なにか買って渡していたと以下のように語った。

一番貢²³が酷かったのは、佐々木崇っていうミュージカル俳優なんだけど、その人は、毎公演行く時必ず買って渡してた。(中略) 私多分佐々木崇でオタクのやり方が変わった。なんか社会人になってから初めてハマった現場があった人で、その人の現場全部行ってたのね。気持ち悪い話だ。通算すると、今一番金だしてたかな。(第一回インタビューより)

あげていたのは、主にブランド物の高価なものばかりであったという。この動機について、「認知がほしいという理由か？」という質問については、以下のような回答があった。

毎回現場ごとにもらったものをツイッターに投稿する人でそれを見て他の知らんオタクの高額ブレ写ったりするとめっちゃくちゃ対抗心燃やしてしまい最終的に高額ブレばっか渡すようになってた…♀ (LINEでの追加調査の語りより)

²³ 「みつ」と発音している。



図 7 佐々木崇によるファンからのプレゼント紹介ツイート²⁴

このように、認知がほしいという動機もあるが、「たかしちゃんのおタクやってた頃が一番金で殴り合ってたから(見えない敵と)」というように、他ファンへの対抗心という動機が強かったという回答を得られた。

第二回のインタビューでは、「当時は本人のためって思ってたけど、あれは他オタクへのマウントだった」と、振り返って語っている。

また、佐々木崇を推していた時期は、前職で受けていたストレスが高かった時期であり、「ストレス発散」「自傷行為」という動機もあったという。

昔は正直今より金あったし仕事忙しくてそれくらいしか楽しみなかったからプレで金使って発散してたところもあるな…☺️笑

正直たかしちゃん推してた頃仕事と上司のセクハラで多分一番病んでて多分自傷に近い形だったと思う～！（LINE での追加調査の語りより）

この後、前述の通り佐々木崇は結婚し、そのことにショックを受けた A さんは、同時期に知ったラッパー O へ熱量を移して、佐々木崇を推すことをやめるのと同時にプレゼントをやめている。「(「推し」) 本人のためにやってるのに、横流しされたら嫌だ」と、結婚へのショックを自分があげたプレゼントと絡めて語った。

²⁴ 佐々木 崇. [@takashi__0128] . (2019, 07. 03) . Retrieved from <
https://twitter.com/takashi__0128/status/1146428676474429440?s=20>.

貢いでたものを彼女に横流しとか、私すごい嫌な人間だから、あったらやだなって思っちゃうから。本人のためにやってるのに、第三者にわたってたらすごいやなの、私。可能性として一番近いのが配偶者とかそういうのだから、そういうのがあるって分かった瞬間に、渡されてたらやだなって思う。(第一回インタビューより)

(3) 成河について

追加調査では、佐々木崇を推していた当時やラッパー0 への消費行動を振り返って、「見えない敵と戦うのに推しを利用してためちやくちゃダメなオタクだった」と反省し、それ以来「推し」へのプレゼントなどを控えているということを以下のように語った。

その後まあ結婚してプロマイド燃やしたりしたが即ドタマに推し変して同じようにプレとか手紙渡してるうちにふとあれは見えない敵と戦うのに推しを利用してためちやくちゃダメなオタクだったから考え改めるべきではと反省して以来あんまり物あげたり手紙書いたりしなくなった☹️
(LINE での追加調査の語りより)

二回目のインタビューでは新しい「推し」としてあげた成河に対しては、「貢するか迷ってる」という話をしている。この理由については、二回目のインタビューでは、「プレゼントボックスの中に箱みかん置いてあって衝撃を受けた。ファンに引いた」「何が喜ぶかわからないから」などを述べている。

そんはは多分認知してもらえる機会無いと思うのであんまり認知されたいから頑張ろうという気持ちはない!!! 純粋に現場至上主義で自分が行きたいから行ってる!!! (LINE での追加調査の語りより)

追加調査でこのように語るとおり、過去の反省から、佐々木崇のころやラッパー0 に比べて「推し」に物をあげることは少なくなり、接触²⁵が少ない成河が「推し」となって「認知」という動機で現場に通うことが少なくなった結果、現在は「現場至上主義」という動機で現場に通うという消費行動をしていることが伺える。

3.2.1.3 他ファンへの意識

自身を「身内以外の同担拒否」と表現するように、A さんは基本的に「身内」と称する友

²⁵ 握手会やサイン会、チェキ会などの交流イベントのこと

人以外の他のファンへはネガティブな感情を持っていることが伺える。

私は結構前からよく言ってるんだけど、身内以外の同担拒否なんだよね。同じものの好きでも、そのなんだろう、なんかね、私の知らないところで推しになんかしてるの嫌なのね。(中略) 抜け駆けってか、迷惑だろうが、良からうが、なんかすっごいもやもやしてしまうんだよね。すごいこれはなんか独占欲的でなんか嫌なんだけど。(身内なら) その場で「どういう話したの？」って聞けんじゃん。なんとなくは教えてもらえるから。で、知らんやつだとわかんないし、特になんか、こっちが言わないように気をつけてることとかを、言っちゃう人とかいるじゃん、やっぱ。(第一回インタビューより)

と、気安く話しかけられる人以外だと、「推し」へ何を言っているのか分からないという状況について、「独占欲的」と言いながら嫌悪感を示していた。

第一回インタビューでは、「身内」と称される人は、Aさんがラッパー0を推し始めた時期にラッパー0やヒップホップのファンとなってTwitter内で繋がった、かつ「思想を持った」他ファンのことを示すと語った。「思想ってあれね、腐ってるか腐ってないか」と語るように、「思想」とはBL²⁶的文脈を好む腐女子²⁷であることを指す。この「身内」のグループのことをAさんは「集落」と呼んでいる。

ちっちゃい(自分たちの)集落があるから、見つかりにくいわけ。普通の人から見て、Twitterとか検索しても見つからないし、鍵もかけてるし。だから、その一定期間に目覚めた人はそこに集まるけど、多分だけど、自分がいない鍵垢の集落もあるんだよ。

現場にぜって一腐女子だなんて分かるやつもいるんだけど、でも、私たちの鍵垢の集落にはいないから、こいつら独自の集落があるのが分かって、それはでもね、相容れないなって。(中略)(話したことも)ない。なんなら私のこと敵対視してる。(第一回インタビューより)

他にも同じような特性を持つ「集落」をAさんは認知しているが、その「集落」とは相容れないし、相手方からは敵対視されていると感じている。敵対視されていることの根拠として、Aさんは以下のように語った。

まあ、なんか、多分、私のこと嫌いだって思ってるのかわかんないけど、ラッパー0のファンの人が、急に、なんか、誰だかわかんないけど、「ラッパー0のファンが〇〇」みたいなつぶやきをたまにする人がいるんだよ。それが、私のこと知ってるけど、名前出したら現場にいるやつだってバレちゃうから言わないのかわかんないんだけど、すごいなんか私に対して苦言を呈するツ

²⁶ ボーイズラブのこと。男性同士の恋愛を描くコンテンツを指す。

²⁷ ボーイズラブを好む女性のこと。

イートっていうのはたまにされる。(第一回インタビューより)

確実に自分のことかどうかは分からないと言いながらも、自分への悪口を Twitter に言われているということや、実際に現場で A さんが行ったことに対して責めるような話をする他ファンのことを語った。これらを「言いがかり」だと語り、以下のように憤りを表現した。

そういうの言われるのべつに良いんだけど、見てないってことになってるから。それを、公開垢ですんのがほんとにムカつくんだよ。私のこと何言われても別にぶっちゃけいいんだ。別にどうでもいいし、匿名でしか言えねーやつの集まりだなんて思うんだけど。なんか、自分の推しのファンがそういうやつだって思われんのすごい嫌で。(第一回インタビューより)

特徴的なのは、「見てないってことになってるから」と語るとおり、A さんは、自分の悪口を言っていると思われる他ファンのことを Twitter でフォローしているわけではなく、「自分の心のリスト」と称して、フォローはせず定期的に見ている嫌いな他ファンの存在があるということである。これに対して、A さんは

ブロックした人もホームさかのぼって、別垢で見る。なんか、深夜に虫の画像を検索してウワってなる感じ。シダ植物の裏とか見る感じ。(第一回インタビューより)

と自傷気味に語った。

この隠れて生きてる意識はたぶんね、ラッパー0 現場で結構私がウォチられてた²⁸ってのがあるんだけど。(中略)

私基本的に日替わりネタとかはもちろん私楽しみたいから、(仲間がいれば) そういうのシェアできるかもしれないけど、人がいたほうが面白いかもしれないけど、一人だと個人戦になるけど。(中略) 自分の中で我慢するものが多すぎるから、私が、めんどくさくなっちゃったから。だから別に一人で気楽にやったほうがいいのかもなって思ってきた。(第二回インタビューより)

第二回インタビューでは、前述ようなラッパー0 関連の他ファンへのネガティブな経験に基づいて、「自分は仮想敵が多い」という語りをしている。基本的な他ファンへのネガティブな感情があり、成河の現場では新しくファン仲間を作ることはやめているという。

²⁸「監視(ウォッチ)されていた」という意味。「ウォチる」とは、基本的に嫌いな対象の SNS 投稿を追うことで、ネガティブな文脈で使われる。

3.2.2 Bさん

Bさんは、32才で、医療事務として勤めている女性である。Aさんと友人関係にある。

3.2.2.1 「推し」について

Bさんは、「推し」として地下アイドルの愛わなびと、ラッパーのラッパー0を挙げている。「推し」が複数人いることに対しては、以下のように述べている。

ちょっとアイドルとアイドルがパッティングすると、悩ましいですね。今はラッパー、ラッパー0は推しつつても普通にラッパーなんで、正直そこは別物として好きなんで。アイドルがパッティングしたりすると、ちょっと悩みどころで、どっちが一番好きなのかなって、ありますね。

(中略)

(一番が)決まっちゃったら、そこに対して、一番好きじゃなくなったものに対して、一番好きとか、一番可愛いとか、そういう順序を突きつけることは言わないようにしてますね。それは普通に誠実な、でいたいのであって。Twitterのプロフィールとかに名前とか書かないんですよ。推しの名前とかばーんと羅列する人(がいるけど)、わたしあんまりやなくて、そういうの。なんでかって言うと、そこに書いてんのにお前今日いなかったやん、違うところ行ってたやんって思うし、そのくらいの気持ちで書けないというか。アピールだけしてるけど、そうでもないじゃんみたいな、月なんぼ行ってる?みたいな。月に5本くらい行ってるものだったら、全部羅列してもまあありかなくらいの感じはありますけど。本当に好きじゃないと(わたしは)書かないですね。

アイドルを複数人「推し」とするのは抵抗感があること、「推し」は一人であるのが誠実であるということ、複数人「推し」がいるとしながら(Twitterのプロフィールに書きながら)も現場に頻繁には来ない人に対しては「アピールだけしている」と憤りを感じることを語った。

(1)「推し」への恋愛の意識

「推し」全般に関しての恋愛感情は「まあ、まず女性ですし。推してるのが」と恋愛対象の性別ではないという点でまず完全に否定している。男性の「推し」であるラッパー0への恋愛感情も「そういう対象としてはマジで無理だわ、ないわ」と否定している。

まず女性ですし、ほとんど。推してるのが。いまラッパー0くらいかな。もともと最初何も知る前は、ビジュアルだけは結構好みだなって思ったんですよ。最初知ったときだけは。知れば知るほどそういう対象としてはマジで無理だわ、ないわ。全部含めて面白いというか、好きではあ

りますけど、それはないですね、絶対。A さんともガチ恋してるやつの気がしれねーわって、みたいな話をしてるんですよ。

また、ガチ恋文脈の「押し被り敵視」や「押し被り殺す」、「同担拒否」については、全くしないと否定したあと、使っている人はほとんど冗談、ネタとして言ってるという感覚を持っていることを以下のように語った。

むしろ、押し被り敵視とか同担拒否ってガチ恋だからこそなのかなって思うんですね。きっと、ガチ恋に近いみたいな。単純に、同担だからとかじゃなくて、同担というか、アイドル用語だと押し被り敵視って、押し被り殺すとかって言うんですけど。押し被り全然わたしはオッケーですけど、押し被りだからといってみんなが好きじゃなくて、まあ、仲いい押し被りもいるし。それは人ですし。(中略)

(みんな) 押し被り殺すってネタで言ってる気がするんですね、わりと、ギャグで。本気の同担拒否的なやつって、あんまり見ないですね、あるかもしれないけど、もちろん。押し被り敵視とか、ギャグで言ったりとかはしますけどね。「押し被り全員殺してこ」みたいな。本気で思ってることはないですね。

ガチ恋はネタだと思っているという一方で、「わたしも音楽が好きですみたいな顔してるけど、こいつ、やってること、ガチ恋だよ」というように、ガチ恋であることを隠して、純粋に「音楽が好きです」という顔をするファンがいることも以下のように指摘した。

ガチ恋っていう人もいますね。わたしも音楽が好きですみたいな顔してるけど、こいつ、やってること、ガチ恋だよみたいな子います、全然います。

ふざけて「ガチ恋」ということはあるという。さらに、以下のように、気軽にガチ恋という言葉で推しを表現する女性を「寒い」と批判する旨を語った。

ギャグでガチ恋、ふざけてガチ恋だわみたいなことを、ネタとして言うことはあっても、本気でガチ恋みたいなのではないかな。なんか、わたしは、異性が普通に恋愛対象が異性なのにも関わらず、～ちゃんガチ恋とか、なんかそんな目で見てるっていう女オタクが好きじゃなくて。寒いみたいな。本当に、あの、同性が恋愛対象で、で、本当に思ってるんだったら全然いいんですけど、ガチ恋とか。本気でなんか、や、ほんとになんか、わたし、ガチ恋で、かわいい子好き好きみたいなノリが本当に好きじゃなくて。～ガチ恋で、一生誰々ぐらいのノリ好きじゃなくて。ええ、いや、お前好きめっちゃ多いだろみたいな、なんか寒いって思っちゃいますね。

Bさん自身は「推し」について恋愛感情を向けていない。しかし、恋愛とは直接に関係はないが、ファンに誠実さを求めていることがうかがえる。例えば、現場にあまり行かず熱量が十分でないのに「推し」と言ったり、本当に恋愛対象ではないのに気軽に「ガチ恋」と言ったりすることが許せないということなどである。Bさんは自分の中に「推し」への誠実さの基準があり、その基準を満たさないように見える他者へのネガティブな感情を抱くことが推測できる。

（２）「推し」への信仰の意識

「尊い」という言葉は使わないと否定し、「二次元の方が多い」という「尊い」のイメージについて以下のように語った。

わたしは尊いはあんまり使わないかな。尊い、ただ、その、尊いと単語、文化、どちらかというと二次元のほうが多いなと思っていて。(中略)二次元とかのTwitterとかの流れてくるネタとかで、尊いとかよく見るけど。

また、「尊い」を使わない理由として、「推し」との距離が近いところが好きで、神のように上の存在ではないということあげた。

そこまで三次元で尊いつてのは見ないかもしれないですね。そこにいるみたいな。何て言うんですかね、あ、これはわたしは距離が近いアイドルを一番最後推してたからというのはあるんですけど、すごく上のものだと思ってないんですね。これはすごく、あれなんですけど、どの人のこともすごく上の存在だとは思ってなくて、例えば何ていうんですか、欅坂とか乃木坂とか、のアイドルのレベルになってくると、規模だと、相手から自分の姿を見られたくないみたいなオタクの人って結構多い。意外にいるみたいで。自分の存在を相手に認識されたくない、こちらが一方的にただ崇めていたいみたいな。そうなってくると尊いとかって言うんですけど、わたしは結構それがなくて。距離がどちらかというとい近い人を好きになりがち、ですかね。距離が近いっていうと、それぞれありますけど、でも、すぐそこですし、ラッパー0もそうですし、推しになるかなんないかって話した結果推しになってます。うん、それもあるかもしれない。Perfumeも話すことなかったから、推しって感覚じゃなかったんですけど、やっぱり。例えば握手会とかでお話をして、その対応とかそういうのを見て、あ、この子が好きだなんて思うと推しになる。

神聖視をしているか？という質問を否定したあと、「尊い」という言葉を使わないBさんが、「推しを信仰している」という自身の解釈を以下のように語った。

(神聖視について) 思っていないですね。あの、もっと、生活に根付いたものとして、自分がこう、生活とか考え方とかに、自分はそこを信じる？信じるってことですけど、信仰って、それがいいと思って、それがすごく良いつて思って生きていくっていう形なので。そう言う意味ではすごく信仰だと思ふんですけど、決してすごく距離が上のものだとは思っていない、神だみたいな、神みたいなことは言わないですね。だから尊いみたいなことも言わないですね、わたしは。

3.2.2.2 「推し」にかかわる消費行動について

年収は300万円ほどで、「推し」に使うお金については多いときで収入の平均4割ほどを費やしている。ピーク時は「お金の管理ができていない」と語っており、貯金をつぎ込むときもあれば、現場がなくあまり使わないときもあるという。

現場は極力通うようにしていると語っており、Aさんと同じく「現場至上主義」が伺える。

Bさんが使うお金によって、「推し」を支えている意識があるか、という問いについて、ラッパー0にはないが、ファンが少なく現場に通わないと活動を続けられなくなるかもしれない地下アイドルにはそう感じる旨を以下のように語った。通うことに「使命感」さえ出てきてしまう状況は、Bさんにとって好ましい状況ではないという。

例えばラッパー0さんとかだとアーティストの方なので、自分のやりたいようにやってもらって、それが好きだからついていくし、じゃ好きじゃなくなったら多分ついていけないといううか。方向性とかがあつてるというか、と思ふですよ。まわりのファンとかの意見に、変に迎合しないでほしいので。ただ単に私たちは支えるっていうか、お金をただ出さだけなんですね。買い支えてるといふほどのアレではない。

アイドルになってくるとちょっと微妙で。地下アイドルとかだと、やっぱり、リアルにファンが少なかったりする。やっぱりここ行かないとみたいな使命感みたいなのも出てきちゃうんですけど。なんかでもそうなってくると、ちょっと、本当は違うなというところがあつて。自分が好きだから行く、楽しいから行くっていうのが多分私は、美しいというか、正しいというか、と思つて

また、Bさんは愛わなびのアイドルグループからの脱退イベントで、「脱退してもメンバーみんなで同じものを持っていてほしくて」とメンバー全員に練り香水をあげたり、バレンタインにチョコレートをプレゼントしたりなどしている。「推し」にあげるプレゼントに対しては、お祝いやイベントのプレゼントなので、「貢ぎ」だという気持ちはないという。

数千円くらいのもので。貢ぐって言うほどそんなに良いものあげてないかなって。あげ

れば良いんだけどねって感じです。貢ぐって言うほど、そこまでおこがましくは、経済力そこまであるわけじゃないし

というように程度が小さいという話と、「貢ぎ」だと言えるのは、イベントでもなんでもない日にあげるものだという定義について語った。

わたしも誕生日プレゼントとかをあげてるのとかは、あれも貢ぐってうちに入ると思わないんですよ、プレゼントだから。なんでもない日常のときに、いろいろあげてる人は、貢ぐっていう感じがするんですけど。誕生日プレゼントとか、要所要所でバレンタインデーとか、なんかそういうポイントで物をあげてるのはわたしはあんまり貢ぐっていう意識ないかな。別に知り合いにプレゼントあげてるのと変わらないつーか。お祝いなんで、ただの。それは貢ぎには入らないかな。Aさんのネクタイあげるとかも、お祝いにあげるとかだったから、貢いでるうちに入らないかな。や、それは多分そういうジャンルにいるから使ってますけど、でも、うん、わたしの感覚では、貢ぐっていうのとはちょっと違う。プレゼントするのを「貢する」みたいな言うような文化だから、舞台俳優系って

また、現場に通うことも貢ぎではなく、「ライブに行くことは、自分が楽しみたいくで行ってるわけなんで、基本は」と、「自分が楽しみたいから」という気持ちが動機の根本である旨を語った。

グッズも、自分が本当に欲しい物だけを買って、ライブTシャツなども「推し」本人がデザインしたものでなければ、デザインが気に入らないと買わないという。グッズを買うメリットをあまり感じておらず、「あくまでも本人に興味がある」ということと、自分の中でお金や時間をかける上で大事になってるのは「本人が喜ぶかどうか」であるということを経験を以下のように語った。

あくまでも興味があるのは本人なんで。例えば生誕とかだったら、生誕のTシャツ着るし、できればみんなで着たいなとも思うんですよ。合っていると良いなと思うときはありますね。あの、合わせようって言ってみんなで合せるわけじゃないし。合ったら喜ぶだろうなって思うところがありますね。やっぱり、まあ、結局本人がどう、本人に喜んでほしいから時間とかお金とか割くみたいところで。

3.2.2.3 他ファンへの意識について

他ファンと仲良くしたいか、という問いには、「特にない」と否定している。ただ、地下アイドルであった「推し」のイベントを開催するにあたっては、「顔は広いほうが後々便利」と他ファンと仲良くするメリットを経験を以下のように語った。

特にないですよ、うん。規模によりますけど、ただ、地下アイドルだとある程度把握しておきたいかなというのはありますね。ファンが絶対的に少ないので、生誕イベントとかをやるときに、どうしてもお金のなところでみんなでカンパしてもらったりしてやるんで。やっぱり知り合いは増やしておいたほうが、顔は広いほうが後々便利

ファン同士への対立があるか？という質問に対し、「全然ある」と語っており、その大きな理由はBさんが「いつも一番前にいた」からだと言っている。

や、でも、なんだろうな、私はそこまで、なんか、単純に例えば対立とかっていうか、もう、目立つファンが普通に嫌われるとか。やっぱりあいつら一番前にいるとか。なんか、それは、強い、ある程度規模が大きいところだと、ちっちゃいと一番前にいたからどうとかないんですよ、地下アイドルだと。でもある程度規模が大きいと、なんでいつも前にいつもいるんだみたいなことを、2ちゃんとか、今5ちゃんねるとかに書かれたりとか、全然あって。わたし、清竜人²⁹のときとかは、わたしたちの仲いい仲間内は、めちゃくちゃ叩かれまくってて。そういうこともあったりしましたし。特に何をしたかっていうと、いつも一番前にいたって。とか、や、ま、だけじゃないっすけど。

Bさん自身は、目立つことについては「目立ってなんぼ」だと思っているという。加えて、Bさんは、Aさんが「集落」と称したグループに所属しているが、Aさんが語ったように、ラッパー0の現場で他ファンに敵対心を向けられていた話を以下のように語った。

目立ってなんぼっていうか。目立って、目立つわけじゃないけど、前ってやっぱり目立つというか、いつもいるファンとして、他の外野はどうでもよくて、彼女たちにかに認識してもらえるかなので、交流できるかなので。どっちかというと、こっちを、わたしは知ってもらいたい側のオタクなので、むしろ、もう、一番前とかに全然いたいし。物理的にそこが全部が見えるから楽しいってのがあるんですけど。

あとは、ラッパー0の現場とかだと、わたしとAさんが普通に一方的に、いつも来てる、私たちも良く来てて、他のよく来てる人に、T0³⁰気取り、トップオタク気取りみたいな感じで、叩かれたり、というか、陰口を叩かれてて。知らんがな、はあ、みたいな。そもそもアイドルの現場じゃないんだよT0じゃないんだよ、みたいな感じで。単純にそういう対立もあって、対立したくない、なんていうか、別に相手が勝手に水面下でみたいな。

²⁹ 「清 竜人 25」アイドルユニットのこと。Bさんの「推し」が所属していた。2017 年解散。

³⁰ トップオタクの略。ファンの中で、その応援が抜きん出てる人を指す。

敵対心を持たれたり、叩いてくる他ファンよりも、上に行きたいみたいな気持ちはあるか？という B さん自身の対抗心を尋ねる質問には、

うーん、よりっていうよりは、自分がやれる限り、結構、やれる限りで MAX やっていききたいみたいな感じが。自分が、友だちとかと、相手（＝推し）の関係なので。嫌いなオタクよりも上に行こうとかはないかな。でも、上に行くためにやってるわけじゃない、上に行こうとは思わないけど、なんていうんだろう、でももう、やっぱ、わたしが一番、わたしたちが一番、想いを強く伝えたいみたいなことはありますよね。こいつらよりもというのはないけど、一番強く愛を表現したいみたいなのはありますね。単純に喜んでほしいので、できる限りのことをやりたいみたいなことはありますね。

と、他ファンよりも上に行きたいという気持ちについては否定しながらも、「やれる限りで MAX やっていききたい」「わたしが一番、わたしたちが一番、想いを強く伝えたい」という気持ちはあると語った。

3.2.3 Cさん

Cさんは、第一回インタビュー時 26 才で、公的な団体でみなし公務員として勤めている女性である。Aさん、Dさんと友人関係にある。

3.2.3.1 「推し」について

Cさんは、「推し」として第一回インタビュー時には劇団 a という劇団に所属する俳優である俳優 P を、第二回インタビュー時には劇団 b という劇団に所属する俳優である俳優 Q を挙げている。

第一回インタビューのとき、いつも「推し」は一人か？という質問に対して、「軽い感じに摂取できる人」は多いが、「推し」は一人であるという旨を以下のように語っている。

なんだろう、好きだなんて思う人は確かにいっぱいいるし、この人が出演してるんだったら観に行くなんていう人とかも結構いるんですけど、そういう人は推しではなくって、ただ単に軽い感じで摂取できるっていうか。その、推しはって言われたら、やっぱ俳優 P くん以外にはいないなって思って。まあ、以前のときも、その人（前の「推し」）一人しかいなかったのかなっていう感じはあります。（第一回インタビューより）

俳優 P 以前の「推し」から「推し」を俳優 P とする、いわゆる「推し変」をしたときは、以前の「推し」は愛想の良いタイプでなかったのが罪悪感はない旨を語ったが、2014 年から数年推していた俳優 P から俳優 Q に「推し変」している。

俳優 P の現場数が減ったことの原因は、彼が所属していた劇団 a が第一回インタビュー後に活動を休止してしまったことが大きい。Cさんは、俳優 P に会う以前も、この劇団 a を中学一年生のころから 15 年という長い年月追い続けていた、劇団自体の熱心なファンである。劇団 a がなくなってしまうことへの危機感から、劇団の社長がクラウドファンディングと称する寄付に 14 万寄付しているという第一回インタビュー時の話からも、劇団 a へかける強い想いがうかがえる。劇団 a の存続と新しい「推し」について、以下のようにも語っている。

劇団 a がいつ死ぬかわからない、いつ死ぬかわからないっていう状況がずっと続いていて、多分心のどっかで、もう劇団 a こんだけ一生懸命応援してきて、本当に劇団 a がなくなったら、もう何を糧に生きていけばいいのかって気持ちがずっと心のなかに会った状態で。というところで、多分出会ってしまったので、もうこれは、お前を頼りに生きていくしかないみたいな、感じの状態になってしまってる。（第二回インタビューより）

劇団 a 休止後の第二回インタビュー時では、

やっぱり、劇団 a で、活動している俳優 P くんが、本当に劇団 a がこれからも続いていったら、俳優 P くんはもっとバンバンと主役をはるようになる、その道はすごく見えていて。劇団員の中でもすごいいいポジションにつけてきているから、本当に劇団 a がこのまま元気ですっといけさえすれば、もう絶対看板俳優になるっていう確信があつて。ただでも、劇団 a が元気がないから、それだけが心配だなんていう感じの状態だったのが、やっぱり劇団 a がなくなってしまって、今後復活するかどうかはわからないっていう状態の中で、もう劇団 a の舞台を出るところ見られないかもしれないと思うと、これはちょっとやっぱり悲しいなって。やっぱ、私はもともと劇団がすごい好きで、その中でもっと私により良い形の劇団を見せてくれる存在として好きというところがあったので、やっぱ劇団というものは、こう、今だと、ちょっと、そうですね。

小劇場でも面白い舞台にいっぱい出てくれればいいんでしょうけど、最近出た舞台が出来が悪いのが続いていて。基本的になんか、つままない舞台って見たくないの。けどなんか、推しを見に行ったら結果、つままない舞台を見ちゃったのが続いちゃって、ちょっとなんかしんどいなっていうのが続いて。で、俳優 P くん本人も劇団 a がなくなって、彼が果たして役者としてやっていけるのかって考えると、ちょっと厳しいんじゃないかなってところもあつて。(第二回インタビューより)

と休止へのショックと俳優 P への想いの変化を語った。劇団 a が活動休止となったあと、未来のある推しを見つけないかと思った」「未来のある推しにすがりたい」などの想いがあつたという。

劇団 a が活動休止したときの俳優 Q への想いについては、以下のように語っている。

劇団 a がなんか、活動休止ってなった瞬間も、新しい推しの子(俳優 Q)の舞台を見ていて。(中略)このとき本当に、ああ、この子見つけといてよかったなってすごい思っ。っていうような、そういう感じで、支えに、拠り所になってくれた感じの子ですね。(第二回インタビューより)

一方で、以下の語りのように、実際に舞台に頻度が減ったことや、Twitter で俳優 Q についての話ばかりすることに対して、俳優 P には罪悪感を覚えているという。

今までは、俳優 P くんは舞台でつままないなって思っても、昼夜両方見られた。だって俳優 P くん出てるんだから、俳優 P くんさえ見れば、どんなにつらくとも昼夜見られるっていう気持ちだったのが、やっぱ昼夜これは見れないなってなっちゃったりするのがあつて。頻度的に目に見えて。まあそれでも半分以上は行ってると思いますけど、ちょっと下がってるなとは思いますが。

(罪悪感がありますか?)

覚えますね、覚えます覚えます。本人も Twitter を見てるので、彼は私の、なんか新しい推し

が増えたんだなって分かってるって思いますし、最近ずっと、ずっとなんか俺じゃねえやつの話してんっていうのも思ってんじゃないかなって、多分思ってる。それで彼がどう思ってるかは、どういう気持ちになってるのかはわかりませんが、事実として、ってことは把握してるだろうとは思ってるので。ちょっと罪悪感的なものはあります（第二回インタビューより）

俳優Pは小劇場の公演に出るようになり、面会の数自体は増えたという。しかし、「つまらない」と思う公演を観に行くのは苦痛であり、この苦痛を感じている状態で「推し」とするのは自分の向き合い方と違うと以下のように語った。

キツイと思ったらキャンセルして帰ります。罪悪感は感じますが、そこで罪悪感を感じるからって、無理して昼夜見たら、本当に無理して俳優Pくんを追ってるってというのが決定的になってしまう。それは、推しへの接し方、向き合い方として絶対にやってはいけないことで。本当に無理してるなって思ったら、降りるべきなんです、そこで。だから、昼の回見て、面会して、で夜いますよねって言われて、いやいやないからって言って、帰るからって。帰りたいなことは普通にしていますので。本当に無理だなって思ったら行かない。（第二回インタビューより）

Cさんは、「マイナーだから好きだという気持ちがあるか？」という質問に肯定しており、

あると思います、それは。（メジャーに）なっていくのが楽しみっていう気持ちは、本当なんですけど。本当だと思うんですけど、今この、なんだろうな、俳優Qくんとかそうですけど、仮に彼がメジャーになって売れて行ったら嬉しいと思うし、今の気持ちとしては、メジャーになっても推していけると思ってるんですけど。多分それ、元からメジャーの人って推そうと思わないんですよ、多分。そうそうそう、なんでこんなにかわいいし素敵なのに、なんでなんでみんな気づかないんだろうみたいなどころから、気づいていくところが見たいので、もともとメジャーだと、この人推し始めようって私は思わないタイプだと、思う。（第二回インタビューより）

と語っている。「なんでなんでみんな気づかないんだろうみたいなどころから、気づいていくところが見たい」というCさんにとって、劇団aという輝ける場所と出世街道を失った俳優Pは、段々魅力が感じられなくなっていったと推測できる。

（１）「推し」への恋愛の意識について

恋愛対象として好きなタイプは「いい人」であり、それは、これまでの「推し」と一貫しているということや、「推し」とできるなら恋愛したいか？という質問に対して、以下のように、「できるんだったらまあ」という消極的な肯定を以下のように語り、少なくとも「推し」を恋愛対象としては見るのが可能であると言える。

あー、(恋愛)できる、できるなら、とは思います。できるって考えたことがほぼないので、あれですけど、できるんだったらまあ(第一回インタビューより)

しかし、「できるって考えたことがほぼないので」と語ったり、Cさんが「私が凄い好きな、同期の可愛い女の子」と呼ぶ俳優Pと同じ劇団内の女性団員と、「その子と結婚してくれたなら嬉しい」と語るように、「推し」を推すことに恋愛面での動機が強いようにはうかがえなかった。

Cさんはそもそも、恋愛について「自分とは全然関係ないっていう意識で」と語っている。したがって、「推し」へも恋愛的感情を向ける前提がなく、「推し」と他の劇団員との恋愛関係を想像することを楽しんでいるのだと推測できる。

(恋愛の憧れみたいなのはありますか?)

んー、なんか、恋愛経験ってなくて。

(女子校だからみたいなの?)

そうですね、自分とは全然関係ないっていう意識で。うん、結婚するって思ったこともあんまりなくて。(第一回インタビューより)

(2)「推し」への信仰の意識について

「尊い」という言葉は、「推し」単体ではなく、「推し」と他の劇団員が仲良くしているところ、というような「関係性」に対して使うと語った。

なんか、単体、推し単体に対しては使わなくて、なんか劇団内の関係性っていうときに使います。俳優Pくんの同期の人で、可愛い女の子、俳優さんがいるんですけど、同期っていう概念がすごい好きなので、同期同士ですごい仲のいいエピソードとか仲のいい写真をあげたりとか、同期の子じゃなくても、なんか仲良し二人、他の役者と仲良くしてる様子がわかったときに、尊いなあって思うのと。単体というよりは、周りとの関係性。(第一回インタビューより)

また、この「尊い」は「尊いはかけがえのない、大切にしたいもの。信仰ではない」という意味であるとし、信仰のニュアンスは含まれていないという。「推し」への信仰はAさんが持っていると考えており、Aさんと比較して、自分は「とにかくかわいい。孫、子供のような」という感情を語った。

このことから、Cさんは「推し」と自分の間に壁を持っており、「推し」に対しての恋愛感情はほぼなく、「推し」や他劇団員との恋愛模様を楽しんだりしているということがわ

かる。

3.2.3.2 「推し」にかかわる消費行動について

年収は 350 万円ほどで、「推し」に使うお金は「全然ちゃんと考えたことがない」と前置きし、「推し」以外の演劇を含めて 100 万、「推し」だけなら 50、60 万だという。

プレゼントや舞台に行くことについて、「貢ぎ」という言葉は「私が私の気持ちを満足させるため」のものであるため、ピンとこないと以下のように語った。

そうですね、舞台は自分のために行く。プレゼントとかも貢いでるという感覚はなくて、自分があげたいものを、あげたいからあげる。(中略) なんだろう、私が私の気持ちをこう満足させるためにあげてるものなので、貢いでるっていう感覚は(ない)(第一回インタビューより)

第二回インタビューでは、「貢ぎ」とは「自分を削る行為」とし、若手俳優を「推し」とする人がプレゼントを「貢」という文化には「マイナスなイメージ」とあると以下のように語った。

使わないです。どっちかっていうと、なんか、マイナスなイメージ。なんか、差し入れとかプレゼントとかでいいのに、貢ぎって言うってことは、貢ぐっていうのは自分を削る行為じゃないですか。なんか、そんなふうには私は言わないなあ。そういう言葉があるって、はびこってる文化ってあるんだと思うので、貢ぐっていう言葉を使っている人に対してどうこうっていうわけじゃないんですけど、自分は別にそう言う感覚ではないなあって(第二回インタビューより)

(1) 俳優 P について

第一回インタビュー時、俳優 P に関しての消費行動は、毎回のチケット代や劇場までの交通費、遠征費³¹、プレゼント(演劇の DVD、お菓子、お花、手持ち扇風機など)などが挙げられる。

舞台については、1 年で 4 本の舞台に立ち、約 15 ステージある全公演の 8 割ほど行っているという。地方を回る舞台もあり、「推し」を追っていろいろな土地を回っている様子が見ええる。

プレゼントの DVD については以下のように語っている。

最近は、演劇の DVD とかが多い。芝居を観るのが本当に好きなので、ミュージカルも好きなの

³¹ 現場が遠い場合に必要になる費用のこと。交通費、ホテル代など。

で、ミュージカルの DVD とか。なんか、わりと、本人の観て面白かったって普段言ってるものをみると、わりとなんか観る芝居の種類としては近いのかなと。私が面白いと思うものは、向こうも面白いかなって、そういうのは結構嬉しいので。自分が観て面白いと思った舞台の DVD がやっぱり面白かったですって、あげたりとか。(第一回インタビューより)

また、プレゼントとしてお肉のカatalogギフトをあげたら、俳優 P から Twitter に DM が来たという。

なんかあの、お肉のカatalogギフトをあげたことがあります。すごい食べるのが俳優 P くん好きなもんで、もう、肉とかラーメンとかそういう男の子が好きそうなものを本当に好きな子なので。肉のカatalogギフトっていうのがあるのを知ったので、あこれいいじゃんって思って。それはもう、初めて、差し入れをあげたことで、向こうから DM が来たってくらい、喜んでくれて。なんか、DM が来ることは稀にあったんですけど、差し入れをして、それに対する返事として DM はなかったんですけど、初めて肉のカatalogギフトをあげたときに、「いやお肉食べました」みたいに。ああ、これはよっぽど嬉しかったんだなって、よかったなあって。(第一回インタビューより)

「本人の、観て面白かったって普段言ってるものをみると、わりとなんか観る芝居の種類としては近いのかな」や「肉とかラーメンとかそういう男の子が好きそうなものを本当に好きな子なので」、DM に対しての「これはよっぽど嬉しかったんだなって、よかったなあって」など、「推し」本人の好みに合わせプレゼントを渡し、喜んでもらいたいという気持ちがうかがえる。

プレゼントすることや多くの現場に通うことで、「推し」から認知をもらうことがお金をだすことへの動機となっているか？という旨の質問には、後述の俳優 Q には肯定しているが、俳優 P に関しては「俳優 P くんの場合は、デビューと同時に認知されたみたいなものなので、認知目的で通うみたいな感覚は薄い」と否定している。

グッズについては、以下の語りの通り、ブロマイドを「めちゃくちゃ買ってる」「同じものを行くたびに買ってる」と語ったが、「大切にはしない」「見返したりとかはあんまりない」「良いと思って買っているわけじゃない」とも語っており、物としてほしいというわけではないことがうかがえる。この動機として、「ブロマイドは何割かは本人に行くらしい」「ブロマイドこんだけ売れたっていうのは指標」というものをあげて、「買うこと自体とにかく意味があるみたいな感じです」と続けている。また、「応援を態度で示したぞという達成感」もあるという。

ブロマイドとか、俳優 P くんなんかちっちゃい小劇場に出ると、ブロマイドがたまに売られるので、そういうのはめちゃくちゃ買ってましたね。すごい買ってた。何個も何個も行くとくにいくつも。

(どういう感じで買ってるんですか？)

ブロマイドって単純に、何割か本人に行くらしいんですよ。そうそう、本人に行くらしいし、で、ブロマイドこだけ売れたっていうのは指標になりますから。制作側にとっても。っていう感じですね。

（大切にっていますか？）

大切にはいいです。なんか乱雑にっています。適当に棚の奥にプチ込んであるんで。買うこと自体にとにかく意味があるみたいな感じです。（中略）

今日も推しは頑張ってたな。今日も頑張っていたから、ブロマイドを買おう、よし、買ったぞみたいな。自分の考えを行動で示したぞっていう、みたいな、達成感があります。お前のこと応援してるからな、応援してるから態度で示すんだぞ、っていうのを示せたっていう達成感（第二回インタビューより）

前述の通り、俳優 P が属する劇団 a は第一回インタビュー後に休止している。休止前の第一回インタビューでは、ファンクラブ宛に劇団 a の社長から「財政的に公演が危ない」という旨の一口 2 万円でファンから寄付を募るメールが届き、劇団 a の存続を憂いた C さんは 14 万円寄付している。それについて、以下のように語った。

なんか寄付を毎年募ってて、寄付してくれたら、劇団の社長自ら週に 1 回メールを送りますって。劇団の現状を事細かに記したメールを送りますってのがあって、それに一応入って、お金を落としているの。そうですね、私がなんとかしなくちゃ、というか、なんとかならしたいなあって思いますね。（第一回インタビューより）

一口でなく、14 万円お金を寄付した動機には、10 万円以上払えばゲネプロ³²を観る権利が得られることや、追加 4 万で過去上演された映像を DVD でレンタルできるということもあげているが、全体としては「奴（社長）はすごい嫌いで、でも劇団は好きで、推しはもっと好きで。で、我慢してやってる」「なくなるまでは、やれることは全部やろうって」とも語っており、劇団 a を支えることへの使命感が強く感じられる。

やばいんですよ、本当にもう、2 年くらいで本当になくなるんじゃないかなっていう覚悟をすごいしてて。だったらまあ、なくなるまでは、やれることは全部やろうって。なんか推しのため、ですね。

（社長とか、劇団のためとかじゃなくて、一番は推し？）

そうですね、今はそうですね。奴（社長）はすごい嫌いで、でも劇団は好きで、推しはもっと好きで。で、我慢してやってる（第一回インタビューより）

³² 通し稽古のこと。本番前に、本番通りに行うリハーサル。

第二回のインタビューでは、「押し変」した俳優 P の公演に、俳優 Q のためのフラワースタンドと同額の 2 万 5000 円のフラワースタンドを出している。

俳優 P くんにも花出してるんで。俳優 Q くんは 5 月に 2 万 5 千円出して、翌月に 6 月の俳優 P くんは 2 万 5 千円の花を出したので、平等。すごく平等。そう、やっぱ、建前は、建前というか、まだ押し、ふたりとも押しだから、どっちかだけにできないなって思ってる。

値段に差をつけてはいけないうのになんとか自分の中であって、同額の花を、出すっていう。多分同額だっていうのは本人気づいてないと思いますけど、花屋が違うので。なんとなか自分の中でのけじめみたいな感じで、同額の花を。(第二回インタビューより)

この消費行動の動機に対して、C さんは俳優 Q と平等になるように「建前は、建前というか、まだ押し、ふたりとも押しだから」「自分の中でのけじめみたいな感じ」と語っており、「押し変」したことの罪悪感や俳優 P に対する義理感など複雑な心情が見られた。

(2) 俳優 Q について

俳優 Q に関しての消費行動は、毎回のチケット代や交通費、プレゼント（キャップやお菓子）、フラワースタンド、グッズ（ブロマイドなど）の購入が挙げられる。

長年通っており、「王様みたいな。みんな私のこと知ってるし」「劇団 a の現場で好き勝手やってたんですよ」と語るように慣れた現場だった劇団 a から、劇団 b に現場が変化した。以下の語りのように、新規のファンとなった途端、「何も持たずに面会に行くのが不安になった」と語り、差し入れやプレゼントの動機に「これを渡したいから私は（面会を）待ってるんですよ」というのができたという。

終演後の面会で、すごくその、不安であることに気づいて。っていうのも、私劇団 a に通った時期が長すぎて、劇団 a の現場でも本当に好き勝手やってたんですよ。王様みたいな。みんな私のこと知ってるしみたいな。劇団員向こうから私に来るし。知らんやついないしみたいな。だから当然面会なんか当然手ぶらでみたいな。劇団 a には面会ないですけど、あの、劇団 a の劇団員の現場では、もう当然手ぶらで。

でも、劇団 b も箱としても新規だし、俳優 Q くんも新規だし、っていうのになった瞬間、何も持たずに面会を待ってるのってすごい不安なんだって言うことに気がついて。これを渡したいから私は待ってるんですよっていうのが、あるってすごい心強いことなんだなってことに初めて気づいて。っていうことに現場始まってから気づいて。(第二回インタビューより)

また、2019 年の公演に 2 万 5000 円のフラワースタンドを出している。この動機に、以下の語りのように、俳優 Q のことを知らない人が、「やっぱ花が贈られるくらいの子なんだって思ってくれる」というものと、「〇〇役やるんだからすごい」という気持ちや「お祝い」

というものを挙げた。

〇〇役やるんだからすごいじゃないですか。すごいねっていう気持ちを込めて、でやっぱその、俳優Qくんのこと知らない人も見て、〇〇役の彼ちょっと気になるなってなる人いるだろうし、そういうときに花が来てるってなると、やっぱ花が贈られるくらいの子なんだって思ってくれると、興味も持ってもらえるだろうっていう気持ちもあって。あとは単純におめでたいねっていうお祝いしたいねっていう気持ちもあって花を出しましたね。(中略)

花ってなんのために出すかって、この人には花を出すくらいファンが付いているっていう、そういう力のある役者なんだなってことを、いろんな人に知ってもらう。それがなんか偉い人の目に止まったら、あ、この子じゃあ花出すようなお金落とすファンがついてるんだったら、お仕事あげようってなるかもしれないし、見に来たお客さんにも、やっぱ素敵な俳優さんにはお金を出すファンがいるのねっていう思ってもらえるって。お花が出てるってことは、すごい役者さんなんだって言う思ってもらいたいから、それ以外に理由ってないと思ってるんです本当に。あ、それと、単純にその本人へのおめでとうっていう気持ちしかないと思ってるんで。(第二回インタビューより)

舞台にたくさん通うことについて、認知されたいという動機があるかという質問には、肯定した後、以下のように語った。俳優Pにはなかったが、俳優Qには認知という動機があるという。

俳優Pくんの場合は、デビューと同時に認知されたみたいなものなので、認知目的で通うみたいな感覚は薄いのですか、俳優Qくんは自分が後発のオタクだっていう自覚があるし、応援してる濃いオタクの中で、新規けどちゃんと応援してるんだよ〜っていうのをアピールするためにはとにかく通わなきゃ……！って気持ちはあります(LINEでの追加調査の語りより)

「PS4 欲しいって言ってて、全然あげるよって思うんですけど、あげたら引かれるんだろうなって」「(現金をあげることが許される文化があれば)10万くらいいれちゃう」と語っており、高いプレゼントが引かれてしまうことを嘆いていた。

悩ましいですね、差し入れとかで。本当に、オタク活動って気持ち悪いじゃないですか。その、オタクって気持ち悪いから、気持ち悪がらせてごめんなさいっていう気持ちで、お金を出したいのに、お金を出せば出すほど気持ち悪い。迷惑料として、お金を払いたいの、払えば払うほど気持ち悪いみたいな。どうすればいいんだろうっていう感じでずっと考えてますね(第二回インタビューより)

このように、「オタクって気持ち悪いから、気持ち悪がらせてごめんなさいっていう気持ちで、お金を出したいのに、お金を出せば出すほど気持ち悪い」と語っており、「推し」に価値のあるものをあげたい気持ちと、価値の高すぎるものをあげると「推しに引かれてしまう」というところに葛藤があるという。

3.2.3.3 他ファンへの意識について

Cさんは同担拒否や推し被り敵視をするという。第一回インタビュー時は、自分が同担拒否なのか調べるために、初めてできた俳優 P の同担³³に実験的に仲良くしようとしたと以下のように語った。

私も、はじめての同担ってということで。すごいいい人なんですけど、同担の方は。私もなんていうか、どういう動向なのかって、相手のことがすごい気になるので。気になるから仲良くなろうと思って、動向把握できれば、こっちのほうで安心だなと思って。こっちから接触をして、仲良くなったとこなんですけど。私は同担と仲良くやっていけるのかなっていうのを実験している最中だったんですけど、その実験の結果、どうもうまくやっていけないんだなってことが最近ちょっとわかり始めた、みたいな、ところですね（第一回インタビューより）

「恩を売ってなんか頭が上がらないようにしようみたいな気持ちがあったので、私の方からいろんなことしてあげた」と語るように、同担の分もチケットをとったり、DVD を貸したりなど世話を焼いたが、結局は「どうもうまくやっていけないんだな」という結論にいたったという。

いい人、いい人なのは間違いないんですけど。その人はなんだろう、やっぱ解釈が違うんですよ、推しに対する。そこで、その推しを見て、そういうこと思うんだみたいなのが合わなくて、ていうのが。（中略）

俳優 P くんもまあすごい可愛い子ではあるんですけど、もう 27 歳の割といい年の、若いとはいえ、結構いい年の一人の、男なんだから、いろいろ考えてると思うんですけど、なんだろう、何やってもかわいいーみたいな、天然でかわいいー、みたいな、すごいぽけっとしててかわいいーみたいな。そういうじゃないんだけどなーみたいな（笑い）（第一回インタビューより）

このように、仲良くできなかった一番の原因に「解釈が違う」ということをあげた。俳優 Q の同担についても、「どっちかという嫌い、嫌いとまでは行かないが」「仲良く

³³ 同じ「推し」を推すファンのこと

なりたいとは思わない」と語り、その理由として「スタンスが違う」ということをあげている。

俳優Qくんのこういうところが好きっていう部分も、私とは合わないんですよ。いや、そんな子じゃないんだろうって思ったりもするんで。ちょっとスタンスが合わないなって強く感じているので、仲良くなりたいとは。劇団aも好きらしいけど、仲良くなりたいとは思わない感じですね。(第二回インタビューより)

Cさんはこの俳優Qの同担をTwitterでフォローせずにウォチっている²⁸という。決して好きではない相手の動向を確認する動機として「私の方が真面目に追ってるというのを確認したい」と語った。関連することとして、「ついツイッターでも、細かいことを書きたくなっちゃう。こんなところまで自分は見てるんだぜ、みたいな」「(面会で推しと) どういう気持ちで動いた(演技した)のか、答え合わせみたいなのをするのも好き」と語っている。それらの行動には「たくさん芝居を観てきた自負」があり、「にわかとは違うことを誇示したい」という動機があるという。

実際、Cさんは数多くの舞台を観ており、AさんやDさんにも「すごいオタク」と尊敬されているように、客観的な評価としても、自負の通りに演劇に関して造詣が深いのだと推測できる。アイデンティティや自尊心とも強く関連する演劇関連の解釈やスタンスについて、「推し」本人や他者との比較によって確かめたいという意識がうかがえる。また、「劇場には、その子(同担)よりもたくさん行きたいなとかは思いますね」という語りのように、消費行動の動機にも多かれ少なかれ影響があると考えられる。

3.2.4 Dさん

Dさんは、第一回インタビュー時 27 才で、福祉系施設の職員をしている女性である。Aさん、Cさん、Eさんと友人関係にある。

3.2.4.1 「推し」について

第一回インタビュー時、Dさんは、劇団 a 所属の俳優である俳優 R と事務所 g 所属のミュージカル俳優である俳優 S を「二大巨頭」と呼びつつも、舞台俳優の俳優 T、俳優 U、俳優 V、俳優 W、俳優 X、アイドルのアイドル Y を「推し」としているという。Dさん自身や Cさんはこの沢山「推し」がいる状態を「誰でも大好き」という意味の「DD」と呼び、さらに Dさんは「クソ DD」と「クソ」をつけて自虐のように自称している。「いっぱい推しがいることは責められることなのか」という質問については、「熱心にその人を応援している人からしたら、邪魔なのかな」と客観的に熱心なファンからはネガティブに捉えられることだと認識しつつも、「賑やかしだから許して」「かっこいいから見たいじゃん」と以下のように語っている。

熱心にその人を応援している人からしたら、邪魔なのかなと。でも、賑やかしだから許して、みたい。でもかっこいいから見たいじゃん、みたい、っていう理論で。(第一回インタビューより)

一方で、第二回インタビューでは、劇団 a の休止で、俳優 R に注いできた熱量が行き場がなくなり、その結果、劇団 j 所属の舞台俳優である俳優 X への想いが強くなりすぎて、他の「推し」について、「他を推しと呼ぶのか揺らいでいる」旨を以下のように語っており、DD というスタンスが大きく変化していることがうかがえる。

劇団 a の俳優 R さんがっていうのは、信頼があったから。でもそれがなくなってくると、私はその情熱をどこにっていう。やっぱ一番好きなのは劇団 a の俳優 R さんだから。っていう気持ちを、全部俳優 X さんに今、剛速球にぶつけているんです。(中略)

もうなんか揺らいできましたもん。なんか俳優 X さんに入れ込み過ぎて、他を推しと呼ぶのかなんなのかを。(第二回インタビューより)

第一回インタビュー時に二大巨頭であった一人の俳優 R に関しては、「推しとする気持ちは揺るがない」という旨を、結婚にショックを受けた(後述)俳優 S については「推しとして、ま、とりあえずキープだなんて思って。やっぱりかっこいいじゃん」と語っている。

(俳優 R さんは推し?)

そうですね、推しなんですよ、きつとね。まあ十年も推してますもんね。なんかもう、俳優 S さんとかもう俳優 R さんとかは、もうなんかもう腐れ縁みたいな感じ。腐れ縁って言うのも変ですけどね。

(缶バッジ全部買うのに?)

そう。でも、やっぱりなんかもう、なんかもう十年間その人のオタクとして生きてきちゃったから、はい、そんな簡単に、(中略)大丈夫です。

(なるほど、ここは揺らがないと)

揺らがないでしょう。(第二回インタビューより)

以上のように、ふたりともまとめて「腐れ縁」だと称しており、現在の熱意だけではなく「10 年間その人のオタクやってきた」ことも、「推し」としている理由に多少なりともあるように感じられた。

俳優 U については、第二回インタビューでは、所属していた劇団 e をやめており、「俳優 U くんとは会う機会はないんじゃないかなって思って」と語っている。その理由として、実際に会える機会がなくなってしまったこと、作品が面白くなくなったことなどをあげている。これに対して、「推すのをやめたことに対して罪悪感はあるか」という質問には「あんまないです。マジ顔が好きでただだったんで」と否定している。

(1)「推し」への恋愛の意識

第一回インタビューでは、俳優 S にあげるプレゼントは俳優 R とは違い、恋心に近いという話を以下のように語った。

こういうものあげたら喜ぶかなあ、ってすごい考える。だからなんか、いわゆる、リア恋みたいな気持ちが少しくらいは、あった。俳優 R さんにあげるビールとは、ちょっと違う (第一回インタビューより)

また、俳優 S がモデル●●と結婚したということに対して大きな衝撃を受け、「嫌だ」「ファンレターに「結婚おめでとうございます」って書くのに、あんなに勇気がいるとは思わなかった」とネガティブな感情を持ったことを以下のように語った。

なんかちょっと、体からすっと力が抜けるみたい。私があげたワインはモデル●●が飲んだのか、みたいな。そういう、ことを感じました。

(それはやっぱ、嫌なんですね?) 嫌ですね、やっぱり。ちょっと恋心みたいな、優しいし。そ

れ以降、手紙を書いても、貢物をあげる気が起きなくなっただけですね。ファンレターに「結婚おめでとうございます」って書くのに、あんなに勇気がいるとは思わなかった。(第一回インタビューより)

結婚後は、実際に行く舞台の回数が減ったり、「なんか、これから、推すスピードは緩めていくのかなあって思って」と、結婚を機に「二大巨頭」とまで言っていた「推し」への熱意が落ちていることから、恋愛観的な視点があることがうかがえる。しかし、第二回インタビューでは、俳優 S が出演している劇場 h の『レ・ミゼラブル』に 8 回通ったことと、「(『レ・ミゼラブル』を) 見ちゃって、結局見ちゃって。推しとして、ま、とりあえずキープだなんて思って。やっぱりかっこいいじゃん」と推すことをやめたわけではないことを語った。

また、第二回インタビューでは、第一回インタビュー以降急激に熱意が上がった俳優 X は「リア恋・ガチ恋枠」であるということを以下のように語った。

俳優 X っていう男がいるんですよ。その、リア恋、ガチ恋枠として、ここ一年くらいいるんですけど。まじでガチ恋枠なので。あのいやなんか、俳優 R さんとは別に結婚したいとは思わないわけなんです。結婚してあげるよって言われたら、ま、結婚したいですって言いますけど。(中略)

これで結婚 (俳優 R が) したって言われたら、まあ、はいって、じゃあさようならっていうぐらいには、私は今俳優 X っていう男に入れあげていますね。(第二回インタビューより)

と、10 年間「推し」としている俳優 R がもし結婚したら「推し」をやめられるくらいの気持ちになってしまうほど、俳優 X への「ガチ恋」の気持ちが含まれる想いが強いという。C さんは、この気持ちを表現する際に、「結婚したいという気持ち」ということを第一回インタビューと第二回インタビューで繰り返している。

あ、俳優 X さんに関しては、なんか、最近 27 になって、好きって気持ちがこじれてきて、結婚して一になって思って。マジ養うし、全然、って気持ちがあつて。全然本人には伝わらないんですけど。(第一回インタビューより)

俳優 X の芝居について、「人生を変えるレベルで面白かった」というほど衝撃を受けたが、金持ちである俳優 R や俳優 S と比べて、「所詮小劇場の俳優って、感じが」と語るような小劇場の劇団員である俳優 X が今後演劇を続けられるのかを憂いている。

基本的に養いたいという感情を持って、彼のことを推しているところが若干、若干あるので。

結婚したいイコール養いたいぐらいの感じなんです

(養いたってというのは、金銭に養いたいですか？それとも精神的に支えたい？)

あ、でも私なんか精神的に養えるとは思えないので、金銭的に養いたいぐらいの気持ちはある。なんか私が支えて、彼が演劇を続けて、彼がすごく売れて、あの一何ですか、遠藤憲一みたいなちょっと、遅咲き売れだす役者みたいな。ああいうのになりたいなっていう、私のただの夢、と妄想です。(第二回インタビューより)

「普通に結婚したいって気持ちと、俳優 X さんが好きって気持ちが合わさると、ちょうどいいじゃないかと思ってる」「養えば劇を続けてくれる」「結婚して養いたい」などから、自身の結婚願望と、素晴らしい芝居をする俳優 X を支援したいという気持ち、俳優 X への恋愛気持ちなどの複数の想いが絡まっている様子が見えてくる。

また、第二回インタビューでは、俳優 X への恋の気持ちのために 10 キロものダイエットに励んだり、脱毛に通ったりしたと語った。この奥には、「恋に仕立て上げてるところもあります」と語るとおり、恋愛の気持ちだけがあるわけではなく、婚活や痩せるためとしての理由としているというところも分かる。

いやなんか、まじで結婚したいんですよ。ガチ恋枠なんで。あ、ダイエットしよって思って。十キロくらい痩せたんですよ。

(まじで？恋じゃないですか？)

恋なんです。いやでも、恋に仕立て上げてるところもあります、若干。なんか痩せなきゃっていう。

(なんか、いろんなものに理由をつけるための？)

そうです。そう、年齢的にも、やっぱりガチで婚活をしなくちゃいけないという気持ちもあるし。あと、脱毛に行きましたね。(笑い) 何がそうさせるのか分からないですけど。(第二回インタビューより)

この仮想恋愛側面を、D さんは「楽しく生きるための言い訳を探している」「健康になりたいから推してる」と表現している。これらのスタンスは、後述する他ファンの意識にも現れている。

また、D さんは、俳優 X の好きな部分について第一回インタビューでは「そうそう、舞台終わりにすごい疲れてると、ときめいちゃうみたい」「哀愁漂うおじさんみたいなのが、なんかすごい心をくすぐる」と語っており、ライフストーリーとしても、小学生のとき「くたびれた」「哀愁漂うおじさん」であった担任の先生が好きで「多分、過去にも、今、一番担任の先生の中で、好きだったのはあの先生なんです」と語っている。

車椅子とかすっぱーかっこいいみたいな思っちゃうんですよ。なんだろう、いわゆる欠損萌えに近い。手話とかもかっこいいって思っちゃう

(へえ、あの、前回言ってた疲れたとか、くたびれたのが好きみたいな感じもそれに近いですか?)
ああ、それに近いです、マジ。どっちだろう。でも根底には多分そっちが流れてる気がします。
欠損のほうが。なんでそうなったかわからないんですけど、なんか幼い頃からそんな感じがあつて。(第二回インタビューより)

上記は、D さんが自身の仕事に関しての語りである。この語りの通り、第二回インタビューで「哀愁漂う」「くたびれた」の根本的な部分には、「欠損萌え」のような性癖があると語った。このように、性癖ともつながる「推し」への意識は、恋愛に近いと考えられる。

(2)「推し」への信仰の意識

D さんは、「推し」への信仰の意識については一貫して否定している。「尊い」という言葉については、「推し」単体ではなく関係性について使うと以下のように語った。

崇め奉る系。それは、ないかもしれないですね。私、尊さを感じるのって、なんかその、二人がセットになったとき。〇〇くと〇〇くんの関係性が、尊いとかは思います(第一回インタビューより)

3.2.4.2 「推し」にかかわる消費行動について

年収はおおよそ 200 万円であり、「計算しないタイプの人なんですね」というように、「推し」にかかる出費はいくらか分からないという。実家に毎月 5 万円入れている以外は舞台代と語った。

私これ、計算しないタイプの人なんですね。計算すると怖くなるって思ってた。自分が怖くなる。これで、多分。(中略)

何ヶ月も先のやつ(チケット)とかとっちゃうので、その月の収支がわからないんです。だからそのチケット代として、1ヶ月で換算すべきなのか、それとも1ヶ月の支払いとして換算すべきなのかわからないし、それ考えてたら絶対やべえって思っちゃうから。(第一回インタビューより)

D さんは、「推し」にかかわる消費行動として、毎回のチケット代や劇場までの交通費、遠征費、プレゼント(お酒、食べ物、DVD、服など)、グッズ(ブロマイド、缶バッジなど)、脱毛などが挙げられる。

「推し」への消費行動を「貢ぎ」だと思っているか、については、チケット代などは「私

が楽しむためのお金なので」と否定、プレゼントについては以下のように肯定している。

あんまないですね。私が楽しむためのお金なので。プレゼントに関しては、貢ぐって感覚はありますね。(第一回インタビューより)

LINE での追加調査では、プレゼントや現場に行くことについての動機に「認知」があるかどうかについて聞いたところ、それは否定している。まずは「推しのパフォーマンスを何度も観たい」というのが動機の一番であると、以下のように語った。

基本的には認知うんぬんよりもその演技がお芝居が好きだからチケットを買い足しているのだと思います。ただ、小劇場の推しには「終演後に会える」からという気持ちが無きにしもあらずなのところもあります。それでも観ていてしんどい（作品がくそつまらないとか、上演時間がすごく長いとか）ものに関しては買い足さないこともあるので、認知よりもパフォーマンスなのかなって思います。なので一応、推しのパフォーマンスが何度も観たくてチケットを買い足していた結果認知された、というところではあると思います。(第二回インタビューより)

舞台に対しては「観れるだけ観ようみたいな気持ち」があると言い、第一回インタビューのときは、俳優 S の『レ・ミゼラブル』は、公演を合計 10 回ほど観たと語った。できるだけ 13,500 円の S 席で、数回ランクを下げたりはしたという。

公演中に。なんか、10 回も観て楽しいの？って言われるんですけど、楽しいんですよ、こっちは。ただ眠いときもある。(第一回インタビューより)

と、何回も通ううちに、楽しさは感じているが、劇中に寝てしまう事実も語った。

俳優 S の結婚にショックを受け「今後推すスピードを緩めていく」と語っていたが、第二回インタビューでは、再演された『レ・ミゼラブル』に 8 回通っている。このときは、寝ないように、回数を稼ぐために仕事終わりに行くのをやめ、土日だけにしたという。これについて、「人間としての分別がつくようになった」と以下のように語っている。

あ、今回は起きてました。回数を減らして、もう土日だけにしたんですよ。仕事終わりに行くっていうのをやめて、回数を稼ぐんじゃなくて、一回一回ちゃんと見ようと思って、うん。そう、人間としての分別がつくようになったんですよ。(第二回インタビューより)

また、第二回インタビューで熱量が大きくなった俳優 X の公演にも 9 日間すべて通った

と語っており、「推し」が関係する現場にできるだけ行きたいという意欲が感じられる。

プレゼントについては、自らを「プレゼントの鬼」と称し、お祝いなどでなくとも、高頻度で差し入れやプレゼントをしているという。

その人が出る公演は観に行きたいな、なんて思って、客演なんてするよって言われたら行って、お疲れ様ですーって言って、でビールを渡す。もう社会人になってから、プレゼントの鬼と化している私なんです。(中略) 毎回はちょっと、あれなんですけど、でも、まあ3回しか観なかったら、3回あげちゃいますね。これが5回とかになっちゃうと、3回くらい。(第一回インタビューより)

また、誰に対しても「喜ばせたい」という動機が強いことを語っている。それは、過去あげたもので一番高いプレゼントは、俳優 R に対する 1 万円の DVD であり、その DVD は俳優 R の役者のきっかけであった『モーツァルト』だったことや、俳優 X が服を多く持っていないことを憂いて T シャツを差し入れるなどからもうかがえる。「あと欲しいもの言ってくれば買うんだけど、みんな教えてくれないから」と欲しい物を教えてくれさえしたらそれを買いたい気持ちも語った。

ほかの人と違うものをあげたいというのはわりと常にあります。それは推しに対して自分を印象付けたいという意味では根底では認知を求めているのかもしれませんが。かといってすごい高価な物をあげたりみたいなことは今までしたことないので(できない、とも言える)、とりあえず喜んでもらえるものをあげたいなあと思って物を選んでいるんだと思います。(LINE での追加調査の語りより)

「ほかの人と違うものをあげたい」という気持ちは「認知されたい」という動機に若干近いかもしれないという考察をしつつ、それでもとりあえず「喜んでもらえるものをあげたい」と結論づけている。

一方で、通常は禁止されている出待ち行為が暗黙のうちに行われている劇場 h では、罪悪感のために差し入れをしている、という動機を以下のように語った。

俳優 S さんの出待ちをするときは、なんか、犯罪じゃないんですけど、悪いことをした気分になるから、絶対に貢物を持っていかないと出待ちしちゃいけないっていうのを、勝手にマイルールにしている。で、彼はワインが好きだったので、だいたいワインで。時折、どうしても我慢ができなくて、ふんどし³⁴をあげました。(第一回インタビューより)

また、俳優 X の公演に全通した際は、「面会のときに手ぶらで行くのが申し訳ないんです

³⁴ 俳優 S はふんどしを好むという話がインタビュー前半にあった

よ」と毎回差し入れを持っていったそうだが、差し入れを毎回あげるのは気持ち悪がられることに気づき、途中からプレゼントではなく友人を公演につれていく形で「手ぶらで行く申し訳なさ」を解消していると語った。

6日間あたりから気づいちゃって。なんかキモいじゃんって思っちゃって。でもあげるのもあげるの、底をつきたし。なんか貰ってもなんか申し訳ないって思われ始めるんじゃないかっていう。(第二回インタビューより)

この根本には、「なんせ結婚したいもんだから。引かれたくないんですよ」と、「ガチ恋」の想いがあるという。

結構なんか、ブロマイド系はバックが行くみたいなの、噂というか。(中略) 噂というか、そんな感じが。なんか明言はされてないですけど、やっぱり、個人グッズだったら、バックが行くんじゃないかなあ。ま、自分の劇団だったら意味ないですけど、他の客演とかだったら、うん、ああこの人こんなに客呼べるんだ、じゃ次も使うっていう風に。(第二回インタビューより)

グッズについては、売っている俳優Rの缶バッジを全部買ったり、客演でブロマイドを買ったりなど、個人グッズは多く買うという語りがあった。この動機として、本人に何割かバッグがあることや、客演ならばグッズの売上で次回も使ってもらえるかもしれないということがあるという。そのため、買ったグッズなどは「大切じゃないです。なんかタンスの中にバーンって入ってますよ」と大事にしていなくて語った。これらを踏まえて、「やっぱりブロマイドとかは、やっぱりもう買うことだけに意義がある」と発言している。

また、「ガチ恋」ということで、「「推し」への恋愛の意識」で前述のように、俳優Xに好かれるためにダイエットや脱毛をし、髪を染めることも検討しているという。「推し」に恋愛しているのだと自分を高め、魅力をあげるためにお金を投じている面もうかがえる。

3.2.4.3 他ファンへの意識について

第一回インタビューでは、「同担拒否はない」と否定していたが、第二回インタビューでは、「(以前は)姿が見えなかったもので」と、俳優Xの同担について拒否感を感じていることを語った。俳優Xは本当に「良い」と思ったものしかTwitterの投稿を「いいね」しないらしく、同担が「劇団kは夏の季語だね」というツイートで俳優Xの「いいね」をもらったことに対して、Dさんは羨ましい気持ちを抱いたという。

同じ土俵に立てる、なんかそういう感覚的なものが合う人じゃないと、好いてもらえないじゃないかな?基本的にいいねとかしてこないんですよ。リップとかしても。だから、何か、でもなんか

ファンの人のツイートをちょっといいねしてるのとか、たまに見ちゃって。私もこの土俵に立ちたいって思って

(その、いいねされてるツイートっていうのはちょっとポエミーだったりとかするんですか?)

そうですね。劇団 j っていう劇団なんですけど、「劇団 k は夏の季語だよね」。うめーな。私もこれでいいねされてえな。(第二回インタビューより)

Dさんは、ポエムなどが堪能である俳優 X の「わからないんですよ、内面が」「同じ土俵に立てる、なんかそういう感覚的なものが合う人じゃないと、好いてもらえないじゃないかな?」と語るように、「感覚的なものが合う人」となれるように自身のツイートもポエミーにしてみるなどの努力をしている。その一方で、俳優 X の琴線に触れることができた同担に嫉妬心を抱いたことがうかがえる。

また、この同担について、

何かその人が、本当に俳優 X さんのことだけをつぶやいてて、日常のこととか俳優 X さんだけだったら、ちょっと怖いなって思って、私は多分ここまでのめり込むのを、二の足を踏んでしまうかもしれないところは、あるんですけど。その人が、俳優 X さんだけでなく、ま、なんか他作品が好きみたいで結構なんか幅が広く。趣味が広いんですよ。(第二回インタビューより)

と、俳優 X だけが好きなだけではなく、もっと多くのものが好きな人であると認識している。この同担が俳優 X だけを好きなような人だったら、Dさんは「ガチ恋」まで俳優 X を好きになったかどうかは分からないという。「あ、好きだなと思ったら、やっぱり、どんな人がファンなのかなっていうのを調べちゃうかもしれませんね」というように、どういう他ファンがいるかどうかということによって、「推し」へ「ガチ恋」まで入れ込むかどうかのコントロールをしていることがうかがえる。

3.2.5 E さん

E さんは、第一回インタビュー時 26 才で、宝石店にて販売員をしている女性である。D さん、F さんと友人関係にある。

3.2.5.1 「推し」について

E さんは、第一回インタビュー当時は、ハロー！プロジェクトに所属していた女性アイドルのアイドル Z を挙げ、第二回インタビューでは、加えて男性 YouTuber グループである東海オンエアを挙げた。

複数人「推し」がいることについては「絶対的な推しが一人いて、二推しみたいなぐらいなレベルだったら、アリ」と語っており、E さんの中ではアイドル Z が絶対的な「推し」、東海オンエアは二推しなのだと推測できる。

絶対的な推しが一人いて、二推しみたいなぐらいなレベルだったら、アリっていうか。

（許せる？）

許せ、ます。結構推しが複数いるのはそんなに気にならないかな。（第一回インタビューより）

アイドル Z は 2016 年にアイドルを卒業している。アイドル Z を推していた当時、コンサートで彼女に歌割り³⁵がなかったり、DVD でカットが少ないなど、アイドルの本業である歌やダンスで輝く場所が与えられないことに対して、憤りや悔しさなどを感じていたというのを以下のように語った。

新曲がでるよっていう告知があると、その度にもしかしたらアイドル Z ちゃんが美味しい見せ場があるんじゃないかって思って、一度もそんなことなかったんですね。その度に、DVD 見ながら、あの、みんながこの子のここが可愛ってスクリーンショットをあげてる中、私はもうはらわたが煮えくり返ってるわけです。もう、えっこれだけ？みたいな。アイドル Z ちゃんのカット数数えたりとか、そういうことをしちゃうんです。てか、本当に、事務所に対してムカついたりとか。すごいこうイライラしたり。（第一回インタビューより）

アイドル Z の卒業後も変わらず彼女を「推し」としていたが、「推し」がいないのは「感情の振りが少ないってやっぱ、生きてるときにちょっとつまらなくなりますよね。」と語っている。

なにか他に追うものがほしいと、第二回インタビューでは、歌や踊りなどの活動の基盤とするものがない、「所詮素人上がりだから」「なるべく傷つかずに、期待せずに見られる」

³⁵ 複数人で歌を歌う際、誰がどの部分を歌うかのパートを割り振ること

YouTuber である東海オンエアを「推し」としているということを以下のように語った。

期待するのが辛いっていうのがあって、どんどん素人に近いところが好きになってるんだなっていうのを自己分析してるんですね。なんか、推し、アイドルを真剣に推すとか、やめちゃうとか、歌割りが少ないとか、そういうことで、一喜一憂して本当に人生が、こう、それが楽しかったんですけど、めちゃくちゃ毎日疲れたんですよ、精神的に疲弊して。なんですけど、だけど何かを見てないとつまらないんですね。漫画とかも見るのがめんどくさいし最近。アニメとか漫画とか、結構面白くするために、感情の起伏を出すじゃないですか。ストーリーの中で。それも年とともに、疲れるようになったんですよ。悲しい話とか辛い話とかを見たくなくなってきた。ていうのもあったんで、なるべく傷つかなくて、なるべく期待せずにすんでっていうところを、にたどり着いたのかなって思います。YouTuber に対して、期待がないんですね。所詮素人上がりだからっていうのがあるんですよ、私の中に。だから、いつやめたってしょうがないとか、いつ諦めたってそんなもんだよねって。アイドルが夢を諦めたときにすごいがっかりしちゃうんですけど、それがあんまりないと。(第二回インタビューより)

アイドル Z に関しては、「ほぼ全ての感情を彼女に向けてるので。本当に、今までで一番強い気持ち」「この人が一番好きかもしれないって思った人よりも好きですね」と語るほど強い気持ちを向けているという。また、アイドル Z に、アイドルになりたいと感じていた E さん自身を重ねていたり、「推し」の嫌いなところは自分の嫌いなところと似ていると語っているという通り、自分と重ねて「推し」を見ている様子がうかがえる。「推し」という意味について、好きなアーティストである浜崎あゆみと、「推し」であるアイドル Z を比較して、アイドル Z のほうが「私たちに近い」と語っている。

なんか好きなアーティストは憧れに近いです。なんだろうなー、そこまで感情を揺さぶられないって言うか。浜崎あゆみなんですけど。なんかもう、私が一喜一憂したところで、この人の人生になんの不安も感じないんです。なんだろう、浜崎さんの好きなように生きてくれっていう感じなので。こうしてほしいなとかあんまり思わない。むしろ、浜崎さんのしていることが全て私には正しいので。なんかこう、もうちょっとアイドル Z ちゃんのほうが私たちに近いなって思っちゃうんですよ。なんか、私の、私が、憧れた姿に近かったな、うーん、もう一人、もう一回人生ができるなら、私はアイドル Z ちゃんみたいなアイドルになりたかったなって思うから。(第一回インタビューより)

「自分に近いから」こそ、共感して感情を揺さぶられることを語っている。「感情の振幅が少ないってやっぱ、生きてるときにちょっとつまらなくなりますよね」というように、感情の振幅のようなものを生きがいのように感じていると推測できる。

「推し」の意味に「自分に近い」「共感できる」という意味があるのに関連して、E さんは、「推し」や「推し」の周りの人物への共感の語りが多いのが特徴的である。

なんか、アイドルZちゃんの立場になって考えることもあるし、逆に言うと、努力して、アイドルZちゃんの後輩なんですけど、最初の方は叩かれてたのに、今は化粧も上手くなって自分の見せ方も上手になって、人気もすごく上がった子もいて。そういう子になると、逃げだなんて思っちゃうんですね、早い段階にやめるのって。(中略)

何回もオーディションを受けて、落ちたりもしてた子もいて、オーディション落ちた子の立場になると、私が死に物狂いで必死に手に入れたかったところに立ったくせに、そんなにすぐに投げ出すんだったら、最初から応募するなよ、とか。そういう気持ちにもなるんですよ、そういう気持ちもわかる。(第一回インタビューより)

この語りでアイドルZ自身やオーディションに落ちた人の両方の立場に立ってアイドルZの引退について想像しているように、Eさんは誰かに自分を重ねたり感情移入することが多い。これは、アイドルだけにかかわらず、お客さんやニュースの中の人など日常生活でも行っているという。幼い頃から共感性が高かったことや根本は「自分が優しくされたい」「好かれた方がいいかなって思う」ことからであると語った。これらが、アイドルの行動から感情を想像して、自分も共感して楽しむという「遊び」に発展したと考えられる。Eさんはこの「遊び」を「もしも私だったらシリーズ」と呼んでいる。

なんか、なんかこう、この発言をするっていうことは、こういう思考回路だったんじゃないかなとか、こういう発言をしたことに対して、こういうことを考えちゃうんじゃないかなっていうのを、こう、考えるんですね。それもそれで楽しいです。それが楽しくてやってるっていうのもあるんですけど。もちろん、創作のものも好きなんですけど、そこまで感情が揺さぶられることはない。なんかもう本当に、工作中泣き出したりとかしたりするくらい情緒が不安定だったんですね、その当時。(第一回インタビューより)

このように、「もしも私だったらシリーズ」の楽しさについて語っている。

二次元だと、演出上のものだと感じてしまうセリフや行動も、三次元ならばリアルに感情の想像の余地があることを以下のように語った。

アイドルZちゃんが言ったことですごく悲しいなって思ったのが、その、私のことを推しても良いことないですよ、みたいなことを言ったことがあったんですね、イベントでね。そういうことも、二次元だったら言わないし、言ったとしても、演出上のものだけと思えるじゃないですか。もちろん悲しいけど、その後につながる何かがあると思えるんですけど。なんかやっぱり、本当の、実際の人間だと思うと、そのときどういう気持ちで言ったのかなってその先をこう想像したときに、現実味がもっと帯びるといいますか。もともとオタクしてたときに、創作するのが好きだったので。漫画描いたりとか、小説書いたりとか、動画作ったりとかしてたので。なんか、すごいこう、そういうほう、なんかこう、この発言をするっていうことは、こういう思考回路だっ

たんじゃないかなとか、こういう発言をしたことに対して、こういうことを考えちゃうんじゃないかなっていうのを、こう、考える、んですね。それもそれで楽しいです。それが楽しくてやってるっていうのもあるんですけど。

「本当の、実際の人間だと思うと、そのときどういう気持ちで言ったのかなってその先をこう想像したときに、現実味がもっと帯びる」というところに楽しさを感じているという。Eさんはもともと「漫画家になりたい」と漠然と考えていたり、「漫画描いたりとか、小説書いたりとか、動画作ったり」などのライフストーリーがあったりなど、好きな対象の感情を想像したり描いたりしていくことに、一貫した楽しさややりがいを感じていることが推測できる。

(1)「推し」への恋愛の意識

Eさんは、「「推し」へ全ての感情を向けている」と語っており、「推し」に恋愛感情があるかどうか難しく判別不可だという。

全ての感情をぶつけてる感じです。母性から、恋愛感情から、ほぼ全ての感情を、ぶつけている対象になっちゃってるので。生きててこんな風に人に思われることってないだろうから、そういうの、たくさん受けてると思ったら、アイドルZちゃんもいろいろ生きづらいのではないんだろうかとも思うんですけど。(中略)

あの、ガチ恋と、いやもう複雑すぎるので。難しいんですけど、今もこじらせて、今もいまだに一番好きな子なんですね。今もこじらせてるんですけど。当時は、ガチ恋のオタクが嫌いだったんですね。アイドルZちゃんに対して、そのような気持ちを抱くことが失礼だと思わないのか、みたいな。私も恋みたいな気持ちではあるけど、だから付き合っしてほしいとか、だから男の子と付き合わないでっていうわけじゃなくて。アイドルという仕事を全うする上で、アイドルをしてほしいから、男の子と付き合っ欲しくないとか。男の子と付き合ったことが露見したら、アイドルやめなきゃいけなくなっちゃうから³⁶、そこはやめてほしいなって思ってたんですけど。隠れてうまく付き合ったりするなら、それはそれでオッケーって思ってたんですけど。それは、なんかそれはちょっと、私自身をこう操作、納得させてる感じはあったのかなって(第一回インタビューより)

本当にアイドルZに恋愛感情があるのか確かめるため、レズ風俗に行ったが、全く楽しくなかったという。これを踏まえて、「男とか女とかじゃなくて、アイドルZさんだから好き」という結論に至ったと以下のように語った。

³⁶ ハロー!プロジェクトに所属するアイドルは恋愛禁止なため

アイドルZちゃんのことが好きすぎて、レズ風俗に行ったことがあるんですね。そのときは全然楽しくなくて。

(別に女の人が好きなんじゃないんだって、確かめに行ったんですね?)

それは、癒されたいなって思って。もしかしたら女の人かなあって思って行ったんですけど。単純に女の人じゃなくて、男とか女とかじゃなくて、アイドルZさんだから好きだったのかなーみたいな。(第一回インタビューより)

今までのうまく行かなかった恋愛について、自身が「重すぎる」ことや「メンヘラ」などと表現するように、自分の感情が大きすぎたことを語った。その反省として、好きな男性のタイプについて「私に興味がない人」「自分のこと好きじゃない人が好きなんだと思います」と語り、「ある意味アイドルが好きなのも、一生自分のこと向かないから好きで居続けられるのかもしれないですね」「見返りがいらないんですよ、感情に対して」と以下のように考察している。

興味がない人、あ、私に興味がない人。あ、なんか私の話、私がなにかこう話しても、それに対して、そこまであんまり真剣に、真剣に話は聞いて欲しいんですが。適当な人、私に対して適当な人。うん、自分のこと好きじゃない人が好きなんだと思います。ある意味アイドルが好きなのも、一生自分のこと向かないから好きでい続けられるのかもしれないですね。(第一回インタビューより)

第二回インタビューでは、「結婚報告があったら嬉しい」と語っている。Eさん自身がアイドルZと結婚することはあまり希望してはなく、「私生活を共にすることがそんなに希望じゃないから」というのが理由だという。

Eさん本人の結婚願望がなく、かつ、アイドルとしてのアイドルZが好きであることから、恋愛感情の有無に疑問はあれど、アイドルZと結婚する願望ははっきりと否定できると考えられる。

アイドルZに対しては恋愛感情を否定しきれない部分がある一方で、通常の恋愛対象になりうるはずの異性である東海オンエアについては恋愛感情はないという。自分との恋愛ではなく、グループ同士の恋愛模様などをBL小説にしていると語り、このことについて「邪な目で見ている」と語っている。

(2)「推し」への信仰の意識

「私の宗教はもうハロー!プロジェクト」と、「推し」のことを信仰していると語る。信仰の根拠として、推しじゃなかったら「こいつマジで叩きのめしてえって思う」ことも、「やっぱそういうところも含めて愛しい」「なんでもオッケーみたいな」と妄信的に全て好意的に捉えられることだという。

(どのへんが信仰的だと思います?)

クソうぜえって思ったときでも、すげーかわいい。なんでもオッケーみたいな。なんか、推し以外が言ったら、こいつマジで叩きのめしてえって思うことでも、推しが言っていると、一旦、相変わらずクソ面白いこと言ってるなって思うんですけど、でもやっぱそういうところも含めて愛しいよねみたいな。(第二回インタビューより)

以下のように、その根拠となるエピソードを語った。

その現場にいたわけじゃないんですけど、イベントで、そのとき一番病んでる時期だとオタクは認識してる時期があるんですけど、その時期にイベントに行ったときに、自分のファンの人も結構いるんですけど、その状況で「私のことなんて推しててもいいことないですよ」みたいなことを言ってたんですね。(中略)なんか悲しかったですね。普通に推しじゃなかったとしても、悲しいし、あ、なんかそんなにオタクの存在、見えないもんなんだなって。ファンの人をついてるようなことを言えちゃうっていうことが、まあ子供だからっていうのもあるんですけど、すごい傷つくなあっていう感じでしたね。推しじゃなかったらすごい失礼なことというんだなって思うんですけど、普通に。自分に対してお金を使ってくれてる人に対して、私のこと応援しても意味ないですよって言うのすごい失礼なことだなって思うんですけど、そういう風な精神状態にさせちゃったというか、病んじゃうんだって思ったらかわいそうでなんともって。そういうことを言っちゃう面倒くささもまたいいなって感じです。人間って感じみたいな。どういう気持ちで言ってるなんて手にとるように分かるわけじゃないですか。それをあえて言葉にしようっていうその行動をしちゃう面倒くささ。それは案に「そんなことないよ」とか、次の握手会ではきっと慰めてもらえると思うんですけど、そういうのも引き出したんじゃないかなとか。色々考えて、めんどくさかわいいなって。(第二回インタビューより)

3.2.5.2 「推し」にかかわる消費行動について

現在は宝石店の販売員のEさんだが、アイドルZがアイドルを卒業するまでは、土日に休めて現場に行きやすい調剤薬局の事務として勤めていた。「推し」の引退を期に、つまらなかったが「推し」のために勤め続けていた調剤薬局をやめ、自分により向いていると感じていた接客業である宝石店の販売員に転職したと語った。

「貢ぎ」に関しては、「はっきり貢いでるとは言えない」が「私が今まで生きてきた中で、使ったお金では一番大きいと思います」と以下のように語っている。

ま、貢いでる、貢いでる？本当に貢いでる人はもっと貢いでると思うので、あんまりはっきり貢いでるとは言えないんですけど、でも、私が今まで生きてきた中で、使ったお金では一番大き

と思います。でも別になんか、それがもったいないとも思わないですし、使いたいときに使うために稼いでるお金なので。仕事も、土日とかが休める仕事じゃいけなかったから、給料が安くても、そっちを優先して働いて

（ええ、ええ。結構こう、彼女を中心に人生が回ってたんですね？）

ええ（第一回インタビューより）

また、「貢ぎ」という言葉について、「見返りを求めないという意味ならピンとくる」や「お金払えるなら払いたい」と買った。「払いたい」については、コンサートのチケット代は本当は直接「推し」に渡したいが、それはできないので、もし払えるならチケット代以上は払いたいという気持ちを語った。この気持ちの根本は、「推し」のためというよりは、「私のあげたものつというのがプラスになってるんだっていうことが嬉しい」だという。

「推し」活動最盛期の調剤薬局の事務は年収 200 万円ほどであったという。「推し」にかかわる消費行動には、コンサート代、イベント代、プレゼント、生写真、グッズ、DVD などがあげられる。「推し」にかけるお金は「全然数えてなかった」と語っている。

全然、数えてないです。コンサートとかに、同じ日に三公演とかあったら、行ける日だったら全部行くんですね。で、8,000 円とかのコンサートで。1 日で 24,000 円じゃないですか。それを、例えば一番、一番マックスだと、卒業前とかだと、毎週、とかだと、それだけで 10 万くらいとかで。そうですね、10 万円から。そのただ、出費が重なるわけじゃなくて、コンサート代って以前に振り込んでたんですね。それから、そのときに必要なお金ってなるので、コンサートに行ったときはそこまでお金を払わないので。T シャツも持ってますし。10 万とか 15 万とかですね。（中略）

（そのころは、全くお金をセーブしようとかは思わなかったんですね？）思わなかったです。追加であれば行くし、歌割りが変わったとか曲が変わったとかあればすぐ行くし。（第一回インタビューより）

「行ける日だったら全部行くんです」「追加であれば行くし、歌割りが変わったとか曲が変わったとかあればすぐ行くし」と語るように、熱心に何度でもコンサートに通っていたという。

また、グッズに関してはメンバーカラーグッズや生写真など、「アイドル Z ちゃんにとって、プラスになるグッズは買ってました」と語った。

グッズは、アイドル Z ちゃんにとって、プラスになるグッズは買ってました。買うことで、評価が上がるようなグッズ。生写真とか、カラーの、アイドル Z ちゃんのメンバーカラーの。そんなに、コレクションするってほどではないので。とりあえず一個は必ず、買うようにしてた。（第一回インタビューより）

また、これらのグッズは見返したり大切に扱っておらず、「欲しくて買った感じではない」という。

そうですね、なんか、実際アイドルZのグッズですら結構別にポイッて感じでしてたので。あんまりグッズには執着がなくて、でも買った方がいいかなって、売り切れてる方がいいかなって、少しでもって。欲しくて買った感じではない、欲しくて買ったものもなかにはありますけど、なんとなく（第一回インタビューより）

「推し」の評価を上げることや、「売り切れてる方がいいかな」というように、大切にしない、欲しい思っていないグッズを買うことについて、「推し」のためになることであるという認識があることが推測される。

本当に、いうと、別に推しと握手しなくてもいいんですけど、推しの握手のレーンがガラガラだったら悲しいなって思ったりもするので、行ける日は行こうかなって。チェキも、全然並ばなかったらどうしようとか、本当に推しの人气がそんなになかったんで、他の同期に比べて並んでる量が少なかったら悲しいので。行ったりとか。

（並んでなかったら悲しいっていうのは、自分が悲しいわけじゃなくて、彼女が悲しいと思うのが悲しいんですね？）

そうです。（第一回インタビューより）

また、Eさんは、この語りのように、握手会でも別に「握手したいわけじゃない」が、「推しの握手のレーンがガラガラだったら悲しいな」、彼女が悲しいと思うのが悲しいと、自分が本音ではお金をかけたいわけではない場面でも、「推し」のために消費行動を行っている場面があるという。

はい。キャバクラとかで働いたときとか、指名なくて待ってるときってすごい悲しいんですね。なんか、あ、暇だなー、みんな忙しそうなのにな、私だけ暇だな、って気持ちを味わってほしくない、みたいな、できる限り。すごい悲しい、虚無感に襲われるというか。私してきたこと、私してることで何してるんだろみたいな、気持ちになったりしてね。（第一回インタビューより）

この「悲しさ」について、「キャバクラで働いたときとか、指名なくて待ってるときってすごい悲しいんですね」と自分の経験に基づいて想像している。前述の「もしも私だったらシリーズ」に関連する、Eさん自身の共感度の高さが伺える。この共感が、消費行動の動機にも見られた。

3.2.5.3 他ファンへの意識について

Eさんは、同担拒否は感じず、むしろアイドルZのことを応援してくれる人の存在は嬉しいと語る。しかし、「基本的にオタクが嫌い」だと語るとおり、「許せない行動をとる男性オタク」についての語りが多い傾向があった。例えば、「根本的にオタクってすごい自分勝手」であるという語りや、

基本は、男性オタクの方が。なんかオタクは基本的に好きじゃなかったの。なんか同担がそんな嫌っていうわけじゃなくて。なんなら、アイドルZちゃんを応援してくれてる人とかは好きだったんですよ。アイドルZちゃんを応援してくれる人がいっぱいいてくれたらいいのになって思うんですけど、思ったんですけど、根本的にオタクってすごい自分勝手に、認知されたいとか、アイドルZに俺を見てほしいとか、アイドルZちゃんはこうこうこういうこと言ってたからみたいなことを言われるのがムカついて。(第一回インタビューより)

「握手会の対応が良かった」から「推し」にするという他ファンも許せないという。

なんとなく、私のなかで、アイドルの価値を決めるときに、握手会での対応がよかったから推しにするっていうのが許せなかったタイプなので。認知されてるから推してるとかだと嫌なんですよね。や、まあ、認知されたら推しとけよって感じなんですけど。でも、推しが好きだから接触したいのであって、接触したいから推しに会いに行くっていうのじゃ嫌なんです。(第一回インタビューより)

「マウントをとってくるオタク」や「推し変するオタク」なども許せないという語りもあった。

その、マウントをとってくるオタクは好きじゃないです。あと推し変したオタクのことも好きじゃないです。はい。アイドルZちゃんに認知されてるのにも関わらず、推し変したオタクが気に入らないです。許せない。じゃあ、気づかれないようにしろって(アカウント消したりってことですよ?) そうそうそう。もともと公言してるんで、アイドルZさん Twitter 見たりしてるよ、みたいな。結構ネットパトロールですみたいなこと言ってるの。アイドルZちゃんの目に触れる可能性があるのにそういうことをするってことが許せなかったんですね。(第一回インタビューより)

このように、Eさんには多数の許せないことがあるが、これらの根本はおおよそ「推し」が傷つく(とEさんが想像した)ことである。

推しが傷つくじゃん。お前そんなに好きでお金積んでた女の子と、傷つけても女の子応援したいんって、すごいありえないなって思っちゃうんです。じゃあそんななんか推しですみたいな顔すんな。(中略)

いなくなるなら、パツといなくなって、悟らせるなって。自分以外の人に、応援してるっていうのを悟らせるなど。じゃなかったら、踏み込むなっていう気持ちですね、そこまで。

(第一は人を傷つけてはいけない?)

そうですね、そうですね。そこまで踏み込んだからには責任を取れ。(第二回インタビューより)

Eさんは自身を「過激派」だと称し、許せない男性オタクを非難するツイートを定期的にしていたという。そのツイートは他ファンにたまに叩かれていたと語った。

本当に過激派なので、たまに叩かれたりしたんですけど。Twitterで、オタクに対しての文句は結構言っていました。アイドルZちゃん太ってたので、直接「痩せた方がいいよ」って言った」っていうレポとかも回ってきたり。そう言うのに対して、え、何を言ってらっしゃるのって。え、なに、なに、え?みたいな。たかが千円で、目の前にして、握手してもらえるだけでありがたいのに、なにをお前は上から目線だっていう気持ちだったんですね。100万円払ってから言えみたいな。黙れ、みたいな。アイドルZちゃんにとってお前らなんのプラスにもなってねーんだよ。ってというようなのは結構伝えておりました。(第一回インタビューより)

このように、許せない他ファンが多いEさんは、他ファンとは「価値観が違いすぎるので」と仲良くしたくないと語っている。一方で、とても仲がよい女性の他ファンもいるという。彼女のことをEさんは、「クラウドで共有してるのかなって思うくらい」言ってることや思ってることが自分と近いと評価している。

同じような気持ちでアイドルZちゃんのことを愛してるのと、同じような目線でモーニング娘。を見てる。一番、わかる、言ってることが。あの、クラウドで共有してるのかなって思うくらい、だいたい同じなので。言ってること。えっ、私?そんな話したっけ?みたいな(第一回インタビューより)

この友人に関して、「推し」への思いや発言が自分と近いことを好ましいと思っていることや、憤りを覚える他ファンは「自分と価値観が違う」とまとめていること、「推し」を「推し」とする部分に「自分と近い」という側面をあげていることから、Eさんにとって共感できることや価値観が一致することは、一貫してポジティブな強い感情を与えるものであると推測できる。

また、「握手会での対応がよかったから推しにする」ことや、「アイドルZに俺を見てほ

しい」という他ファンが嫌いなこと、嫌いなオタクについて「男性オタクの方が」というように、恋愛的にアイドルZを見ている男オタクを基本的に嫌っている。これは、アイドルZに恋愛という生産性を求めることを嫌うこと、ひいては、歌や踊りが生業であるアイドルという生産性を超えた存在としてのアイドルZを良しとしていることが伺える。Eさんは、有用性ではなく至高性を求めたバタイユの文脈に近い意味でアイドルZを見ている可能性が示唆される。

3.2.6 Fさん

Fさんは、インタビュー時30才で、医療事務として勤めている女性である。

3.2.6.1 「推し」について

アプリゲーム『あんさんぶるスターズ（以下：あんスタ）』に登場する瀬名泉と、アニメ『KING OF PRISM（以下：キンプリ）』に登場する一条シンを「推し」として挙げた。瀬名泉は「ライトに推している」と語り、「お金を落としたと言え、キンプリが一番短期的に落とした」「あんスタは飽きるかなというのはありますね。キンプリはちょっとわかんない」というように、「推し」の性質や想いの大きさに差があると語った。

また、「コンテンツ全体の中のひとりである推しが好き」とであると語り、「推し」を包含するコンテンツやストーリーとそれを生み出す公式³⁷への尊敬が見られた。

推しというよりも、私は作品の中の推しなんですよね。推し単体というよりも、もし、もっとキャラクター性の強い、ストーリーがあんまりなくて、キャラだけみたいのゲームだったら、多分その推しのことそんなに好きになってない。本当に、だから、コンテンツなんですよね。

（二次創作³⁸じゃなくて、公式のストーリー第一？）

そうですね、公式第一ですね。

（文脈があって、そこでがんばっている推しが好き）

あーそうですそうです。

（1）「推し」への恋愛の意識

同担拒否を感じることの動機として、恋愛的に「推し」を見ている人というものを挙げており、「あんスタのファンには多い」旨を語っているが、「自分は同担拒否じゃない」と否定している。

一条シンについては「ガチ恋め」と称したが、「ガチ恋より神様のほうが（想いが）強い」「作品の中で彼女ができたなら、めっちゃ応援する」と語っており、Fさんの語る一条シンへの「ガチ恋」という言葉は、向ける気持ちが大きいことを指していると推測できる。

ガチ恋だけど、作品の中で彼女が出来たら、マジでめっちゃ泣くと思うけど、応援します。

³⁷ 脚注31の二次創作と対比させて、オリジナルの作品を作り出した会社や作者などのこと。

³⁸ 既存の作品のストーリーやキャラを利用して、二次的に生み出された派生作品のこと。

(推しと恋愛したい、できるならしたいみたいな？)

あ、できるなら全然したいですね、めちゃめちゃしたいですね。

(作品の中で恋人ができれば応援する？)

はい、それはしょうがない。推しを選んだ人なのではない。

(どのジャンルでもそうですか？この人は許せないとか)

その、キャラが好きだから付き合うのがやだとかじゃなくて、作風的に、私が好きになったタイミングに、キャラ的にこう絶対彼女なんか作らないぜみたいなときのキャラが好きだったのに、後半になるにつれて性格が穏やかになり、彼女を作るとかは嫌です。解釈違いだわみたいな。そういう意味では、嫌だって思うけど、最初から推しが彼女がほしいみたいな言ってる推しだったら、彼女出来てよかったねみたいな。

(2)「推し」への信仰の意識

一条シンについては「信仰」「神様みたいな感じ」と表現している。「素直ないい子、面白みもなく、好きなタイプとは違う」と「ずっと推してる一条シンくんは好きになる要素が一個もない」と、一条シンは根本的な自分の趣味とは離れた位置にあると語っている。しかし、「ステージに立っているときに感覚的に好き、きらめき。宗教なんでちょっと怖い発言なんですけど」と、根本的に好きなタイプではないのに、感覚的に好きやきらめきを感じることに宗教性を感じてることがうかがえる。

今ずっと推してる一条シンくんは、多分、好きになる要素が一個もないんですけど。なぜか推してしまってるんですね。全然なんか今までと毛色が違う。

(彼のどのへんが一番魅力的だと思います？)

えーなんか、言葉になんか、どこがっていうとよくわからなくて、うーん、ステージに立っているときかなあ。あ、アイドルなんですけど。感覚。きらめき？宗教なんで、怖い発言なんですけど。

また、「尊い」という言葉は「信仰なので使う」と語り、「気持ちの高まり」があったときによく使うという。

3.2.6.2「推し」にかかわる消費行動について

年収などは差し障りがあるとインタビューでの回答を控えている。

「推し」にかかわる消費行動としては、コラボカフェや映画、アプリゲームへの課金などが挙げられる。

キンプリについては、「お金を落としたと言えばキンプリが一番短期的に落とした」と語りながらも、お金を落とす場所が見つからないことを嘆いた。「頑張ってお金を落とせる場

所を探している」と語っている。

あんまりお金を使える場がなく、映画、メインのコンテンツが映画で、二本しかなくて。あとはカフェでコラボとかに一生懸命。なんかお金を落とす場を見つけて、ましたね。お金を落とす場がなかったんですよ、落としたくても。なんか雑誌とかはあんまり買わなかったんで、映画を何回も観に行ったのと、コラボ系のやつにいったり。あとアプリ³⁹があるんで、それを定額課金。ガチャが回したいとか、イベントをクリアしたいとかじゃなくて、毎月。あの、継続してほしいので、コンテンツが。月、5千円くらいですかね。毎月課金してるから、無理のない額に、プラスのイベントとかで、プラス万とか行くときもありますね。(中略)

本当にお金を使う場所がないから、アプリでお金を落としてみたい。

これらの動機として、「ガチャが回したいとか、イベントをクリアしたいとかじゃなくて」「継続してほしいので、コンテンツが」と述べている。

映画については、友人などの分も払い、10回は下らないほど行っていると以下のように語った。

映画は2作あるんですけど、1作目のほうがめっちゃ見て。1作目はつづり券があるんですよ。5枚1組の券があって、それを、まあ余裕で使い切っちゃったんですけど。あとやっぱ、お金を落とす場がなかったの、友だちを奢るから一緒に行こうみたいな。それをもう回数を、友だちの分を1回って数えるんだったら、10回とかじゃないですね。

(同じ映画をですか?)

はい。そのBlu-ray BOXも買いましたし。

Fさんは、「推し」を多くの人に広めたいという思いはないが、「コンテンツを支えるには、自分のお金だけではダメ、なので広める」と語っている。さらに、以下の語りのように、「推し」のコンテンツがなくなってしまうかもしれないという意識があり、「継続してもらうこと」や「コンテンツを支える」ことに使命感があると推測できる。

(なくなってしまうことを意識してますか?)

してます。始めるときから。

(お金をかけているけども、もしサービスが終了したら結果はなくなっちゃうじゃないですか。

そういうことに関して躊躇は?)

ないですね。公式にお金を渡したいので。なんかまあ、恋愛で考えると交際費みたいな。交通費とか食事代とかそういうところ、私には。消えて良いお金。形に残すためにお金を出して

³⁹ キンプリは原作はアニメだが、アプリゲームもリリースしている

いるわけじゃない

「推しにかけerお金は貢ぎか」という質問に対して、「まあ、貢ぎじゃないですか」と答えており、その根拠として

あんまりグッズ欲とかはないので、ぬいぐるみとか缶バッジとか、そういうのは全然興味がないので。手元に残したくてお金を払うってことはやっぱない。だからもう貢ぎですよ。

と「手元に残したくてお金を払ってない」という点で貢ぎと語っている。貢ぎの動機として、「次回作につながるかもしれない」「今後の期待」「感謝」などがあることを以下のように語った。

それがなんか、次回作につながるかもしれないみたいな。今後の期待。あと今までありがとう。例えばこの本を 500 円で買ったけど、私的には 1000 円の価値があるから、追加で 500 円払おうみたいな。ありがとうと、今後もよろしくみたいな。

キャラ愛であるキンプリに対して、あんスタは「儲かっている」かつ「ストーリーが好き」と答えており、キンプリよりもお金をかけるモチベーションが低いことを以下のように語った。

アプリの、会社が違うから、かかるお金が違うっていうか。あんスタは会社が儲かっているんで、わりと、5千円課金すれば、カード1枚はほしいのは手に入るかなみたいな。5枚重ねると強くなる。なんで、欲しいカードだけ課金するみたいな。

(5枚集めたいって気持ちはありますか?)

そんなにないですね。5枚なったら嬉しいなーみたいな。

(キンプリが同じくらいの確率で出て、5枚目が出たらってなったら?)

課金します。キンプリなら課金します。キンプリはキャラ愛だけど、あんスタはストーリーが面白いので。ストーリーが読めたら私的にはもう満足なんです。そこにおまけでカードがついてる。カードが強ければ、次のイベントが走りやすくて、走りやすいとストーリーが早く読めるから、課金するみたいな。

3.2.6.3 他ファンへの意識

Fさんは、他ファンを意識している様子や語りは見られなかった。「たまたまかぶらないだけで、いたら盛り上がると思う」と以下のように語るとおり、まわりに同じ「推し」を

推す人がいないということもあるが、自ら探しに行ったりしていないことから、そもそも他ファンへの意識が低いのだと推測できる。

（同じ推しを推してる人と交流はありますか？）

たまたまかぶらないだけで、いたら普通に盛り上がると思う。嫌だとかいうそういうのはないです。推していない人に勝手に、友だちに勝手に推しの話をします。だいたいみんな「へー」つつて聞き流してくれます。

（それでいいんですね？）

はい。友だちが話し相手になってくれれば、私はいい。コンテンツを支えるには、自分のお金だけではダメ、なので広める

「推し」の話は、「推し」を知らない友人にするだけで満足だと語り、それでも、コンテンツを支えるには他ファンが必要であることから、使命感から広めているという。

3.2.7 Gさん

Gさんは、第一回インタビュー時 24 才で、会社員をしたのち退職し、現在は実家からの仕送りで生活している女性である。

3.2.7.1 「推し」について

Gさんは、第一回インタビュー、第二回インタビュー通して女性アイドルグループであるフィロソフィーのダンスを「推し」として挙げた。通常は個人を対象とする「推し」だが、このようにグループ全体のことを「推し」とすることを「箱推し」と呼ぶ。Gさんはこの「箱推し」についての意識について、最初は「箱推し」ではなく「推し」がいたが、だんだん全員のことが好きになっていった過程を以下のように語った。

もうなんか、もう、見ているうちに全員のことが好きになって。最初から箱推しじゃなかったんですよ、みんなもちろん好きだけど、この子のことが一番好きっていうのがあったのに。ライブを見ていたら、もう、あの子はこんなところがいいし、この子はこういうところがすごいしみたいな、どんどん出てきてみんなのこと好きになったんで。そこから、結構割とすぐ箱推しになった。(第一回インタビューより)

また、グループが4人だったというのが「箱推し」するのに「ちょうどよかった」と語っている。「推し」の人数が増えたことによって、楽しみが増えるという。

自分的に人数もちょうどよかったんだろうなっていうのはありますね。例えば、AKB 系列だと、すごい人数いるじゃないですか。だから絶対箱推しできないんですよ。みんな、追える。全員分、チェキとか行ったりとか、生誕祭行ったりグッズ買ったりしても大丈夫。Twitter とかも見れるし。(第一回インタビューより)

複数人「推し」がいることに対しては罪悪感などはなく、「全然許せます。好きが多いって良いことじゃんって」と回答している。一方で、「お金とか時間とかに余裕なくなっちゃうんで」、他のアイドルグループを「推し」とすることはなく、「推し」とするのはフィロソフィーのダンスだけにすると決めているという。これは、「一つのことに結構集中しちゃう」性格から来ていると Gさん自身が考察している。

私は他のアイドル、このアイドルだけにしようって決めてるのもあるんですよ。なんか、いくつもいっちゃうと、お金とか時間とかに余裕なくなっちゃうんで。もう、この子だけ応援しようって思って。もちろん、他のアイドルの音楽聞いたりとか、ライブ見ていいなって思ったりも

するんですけど。(第一回インタビューより)

「好き」と比べて「推し」は「好きよりもすごい」、「応援したい」という気持ちが強いことを以下のように語った。

そうですね、なんか、好きっていうのは、結構幅広く、使ってるんですよね。でも、推しっていうほうが、なんか、好きっていうよりももっと、すごいというか、推しのなかに好きが含まれてるというか。好きなだけだったら、音楽聞くだけとか、Twitter 見るだけとか、その作品が好きだとか、好きだっていう感情だけだったらいいし、使うのも楽だなって。推しってなると、結構応援しようとか、という気持ちが結構多い。(第一回インタビューより)

Gさんは、精神的に辛かった休職中に「推し」に出会っており、そこで元気をもらったという。

ファンサービスすごくて。こんな、歌いながら、踊りながら、色々しながら、できるんだみたいな。ものすごい元気をもらって。で、私、3月から会社を休むようになって。ライブ行っただけ、休んでる、休職してる時期で。で、もう精神的に参ってたんですよ。で、それでもうめちゃくちゃ元気もらって。(第一回インタビューより)

さらに、好きだったアイドルが昔卒業してしまい、強いショックを受けたことや、その一方で、フィロソフィーのダンスは「誰もやめずに行くんで」と言ってくれたことなどを踏まえ「安心して応援できる」と思ったことを以下のように語った。

結構最近アイドル脱退とか卒業とか多いけど、私たちはもう、4人で、ずっと、誰もやめずに行くんで、よろしくお願いします、みたいなこととか。(中略)大きいステージにどんどん立って、皆様に恩返しますってこと言って、それでもう、すごいガッて持ってかれて。そういうエモいこと言われると、バンドマン⁴⁰はすぐに、感情移入しちゃうんで(中略)なんかその言葉もあって、よっしゃ応援するぞって感じになったんですね。安心感みたいなものもあるし、(中略)やっぱり、その言葉はでかかったですね。そう言ってくれるアイドルを応援できるってめっちゃ幸せだなって思っ。(第一回インタビューより)

「「推し」に癒しとか元気を求めているんだと思います」と語るGさんにとって、「推し」

⁴⁰ Gさんは趣味でバンドを組んで活動していたため、自身のことをさして「バンドマン」と語っている。

から与えられた「安心感」や「癒し」、「元気」などが「応援したい」の根本となっていることが推測できる。

(1)「推し」への恋愛の意識

「推し」への恋愛感情については、自分の恋愛対象が男性であること、彼氏がいることで否定している。

まあ、恋愛対象が私、男だし、彼氏もいるっていうのも。彼氏もフィロのス⁴¹好きなんですけど。
(第一回インタビューより)

また、彼氏が女性アイドルを推すことについて、「気にならないです、全然。それは本当に気にしたことないです」と語ることや、「ガチ恋」であるファンについて「ガチ恋だと病んじゃう。辛そう。そんなに辛くなくて良いのになって思う」と語ること、「アイドルは恋愛禁止とかどうでもいい 自由じゃんって思うので」という発言などからも、「推し」への恋愛の意識は薄いことがうかがえる。

(2)「推し」への信仰の意識

Gさんは、第一回インタビューでは、「推し」への感情には信仰があることを語っている。

ああー、でも信仰っていうのは、たしかにありますね。(中略) 本当に Twitter とかで、結構自撮りだったり写真とかその子たちがあげてくれると、本当にありがとうございます、本当に今日もオタクたちのために可愛くいてくださって、お休みなのにありがとうございます (第一回インタビューより)

しかし、以下の語りのように、第二回インタビューでは「身を削っていない」という意味で宗教や信仰には肯定できない旨を答えている。

本当にすごい尊いんだよね。本当になんだろうな、推しに対する感情はかわいいなあとか、今日も頑張ってるなあとか、今日も可愛くいてくれてありがとうとか。カッコいいなあとか。推しのおかげで元気出たわとか。(中略)
(宗教はあんまりピンとこないですか?)
どうなんだろう。えーどうなんだろう。

⁴¹ フィロソフィーのダンスのこと

(信仰は微妙ですか?)

うん、どうなんだろうな。まあでもあれだな、めちゃくちゃ本当にすごい好きだけど、そんなに、生活だったりなにかしらを犠牲にするとかでもないし。宗教って、まあ自分が特にさ何かの宗教を信仰してるわけじゃないからあんまり感覚わかんないかもしれないけど。生きてる上ですごい中心となる考えというほどではないから。なんか信念だったり、指標だったりするけど。何かを犠牲にしているものではなくって。でもないし辛いし、ないのは辛い。(第二回インタビューより)

また、「その人のことが好きだから、その人が何したって良いわけじゃないし」と、「推し」だから全て許せるということではない、宗教や信者にはそういう「盲目的」な意味が含まれているため自分にはしっくりこない旨を以下のように語った。

なんか、良く言われるさ、悪い意味で使われる信者っていう言葉。それではないなって。なんかよくさ、ネットとかで「~信者」っていう叩かれ方したりさ。そういう信者ではない。なんか、推し、その人のことが好きだから、その人が何したって良いわけじゃないし。

(盲目的に信じてるわけじゃないと?)

あ、そうそうそうそうそう。そう言う感じ。盲目的にはない。宗教っていうか、信者って言葉には、結構そういうイメージがある。(第二回インタビューより)

一方で、「推し」について、「尊い」や「神々しい」という言葉はしっくりきており、よく使用しているという。そして、それは「好きより先に行っている」というニュアンスがある旨を以下のように語っている。

使います。今日も尊かった、って言いますね。Twitter でも使うし、日常会話でもそういう話になったら使いますね。もう、神々しいんですよ

(尊い、みたいなのに神々しいも含まれてるんですね?) もう好きより先に行ってます。(中略) あーもう今日も生きていけるわみたいな。(第一回インタビューより)

そして、その「尊い」や「神々しい」は、「推し」の要素どれか一つではなく、パフォーマンスや人間性など様々なものが積み重なって形成されているという。以下のように語っている。

色んなものが、含まれて、いろんなものが積み重なっての神々しい、尊いっていう感じで。好き、かわいい、踊りが上手い、面白いし、すごいがんばりやさんだし。あの、握手とか話したりとかを接触っていうんですけど、接触も神だし(中略) そのへんが積み重なって。何か1つとか2つ

とかだったら、そこまで尊いとかならないと思うんですよ、そういうのが合わさって合わさっての尊い本当に自分でも楽しいですし、推しの話してるだけでこんなに楽しくなる。(第一回インタビューより)

Gさんは、確かに「推し」の存在には宗教のような「尊さ」や「神々しさ」は感じているが、「推し」に対して身を削っていないという意味で、自分の行動や思想まで引きつけて考えると「信仰」は否定するという感覚を持っていると推測できる。

3.2.7.2 「推し」にかかわる消費行動について

退職しているため、「推し」にかかわる消費行動は、実家からの仕送りをもとに生活費を切り詰めたお金で行なっているという。

消費行動としては、毎回のライブのチケット代やチェキ代、グッズ代、CD代、プレゼントなどが挙げられる。

旅行が好きで、「推し」ができる前は好きなアーティストのライブよりも旅行を優先していたというが、「推し」ができてからは「「推し」は別予算」「あれは買わないといけないな」と思うようになったという。

その一方で、「リリイベほぼ全部行ったり、めっちゃ買ったりする」という他のアイドルオタクと対比させて、「あれはそんなにいらなとか」を考えることができる「分別あるオタク」を自称している。例えば、Gさんは同じCDを何枚も買ってリリースイベントに行くことについて、以下のように発言している。

そのリリースイベントが毎回趣向を凝らしてて、全然違ったんですよ。なんか普通はショップの中で、ライブやって、例えばCD買った枚数で、特典、とか。そういうのなんですけど。今回は浴衣です、今回はあの衣装、今回はこの人プロデュースみたいな。作曲家の人がDJしますとか。だから結構お得だし、普通にいつものグッズを払うよりも、若干囲み⁴²がお得だったんですよ(何がお得?)

囲みチェキが。いつもの囲みチェキは、グッズを5,000円分買ったら、1,000円ごとに1枚なので、5枚で囲みって言って、そのメンバー全員と自分でチェキを取るのだから、かかるお金は5,000円なんですけど、そのリリイベのときは、CD3種類出るから、その3種類を買ったら囲みチェキが撮れますって言われて、何百円か安かったんですよ。安いし、オリコンのランキングにも繋がるし、予約することでその店に入荷する枚数が増えるから。結構そのシングルがランキングとかに力入ってるやつだったので。それもあって向こうとしても、CDが売れることは、と、重視してるし。こっちも、まあ色々、もう今回しかないイベントみたいなものもあるから、あるし、

⁴² 「囲みチェキ」の略。メンバー全員と自分でチェキを取ることができる権利のことをさしている。通常は、グッズを5,000円分買ったら囲みチェキ一回だが、そのリリースイベント時はCDを3種類買ったら囲みチェキを撮ることができた。

囲みチェキも安いしみたいなの。両方メリットあったから。(第一回インタビューより)

このような行動について、「分別ある」と自称しながらも、「レアとか、すぐ言い訳使うんで。オタクはすぐこれはレアって、これは今回しかないからって言って。何かに対して言い訳してる」と自らの行動や言動を俯瞰して冗談のようにも語っている。

プレゼントについては、「友だちに選ぶような感覚」「お祝いしたい」「喜んでくれればいいなと思う」と以下のように語っている

(プレゼントを使ってくれて嬉しいみたいなのは、自分が影響を与えたいっていう気持ちからではない?)

どうなんだろう。プレゼントをあげるのは、単純になんか、お誕生日だからお祝いしたいという気持ちと、もあるし。そうだな、女の子同士っていうのもあるからだと思うんだけど、プレゼント選びもなんか友だちにプレゼント選ぶくらいの感覚でいってるから。マリリンあれ好きだよねとか、これだったらビールに合うんじゃない?とか。(中略)なんかそれで喜んでくれればいいなっていう感じ。(第二回インタビューより)

追加の LINE での調査で、「推し」にかかわる消費行動は基本的に自分が楽しむためで、身を削るほどの意識はないけども、「これで少しでも足しになってくれ〜!みたいなの」と語るような貢ぎの気持ちもあると以下のように語った。

私は基本「欲しいグッズとか音源だけ買う」「どうしても特典券が欲しい時は買い足す」みたいなスタンスだから主に自分のためではある👩💻
でもめちゃくちゃお金かかるとかでなければジャケ違いとか買ったりもあるし、「貢ぎ」の気持ちも持ってはいる…!
無理せず貢ぐみたいなの?笑 (LINE での追加調査の語りより)

3.2.7.3 他ファンに対する意識について

Gさんは、「推し」が好きなだけで、「オタクのコミュニティに入りたいわけじゃない」と、他ファンと能動的に仲良くしに行くことに対して否定的である。

もちろんオタク同士フォローしあったりとかは、数人いるんですけど。で、現場でも最近顔見知りみたいな人はいるんですけど、なんか、オタクのコミュニティに入りたいわけじゃないんですよ。もちろん仲いい人ができたりとか、知り合いできたりとか、その場でオタクの人と話した

りとかは楽しいし、教えてもらえることがあって嬉しかったりするんですけど。なんか、自分ってドルオタ⁴³入りじゃないんで、フィロのスが好き。(第一回インタビューより)

「たかがオタクのせいで、一般人のせいで、アイドルの現場から離れたりとか、応援できなくなったりとか嫌だって」と、コミュニティで問題があって、「推し」を好きでいられなくなってしまう、というアイドルオタクやそのコミュニティへのネガティブなイメージがあることを以下のように語った。

結構やっぱり、オタクってドルオタで、フィロのスと、誰々と誰々の現場に行ってるとか、掛け持ちだったりとか、例えば、売れたら離れちゃうとか、がいたりして。その、オタクたちの Twitter とか見てて、結構そのオタク同士でなんかあって現場離れるみたいなあるらしいんですよ。そういうのが一番つらいよねみたいなツイートを見て、ええなんか、オタクのせいで、たかがオタクのせいで、一般人のせいで、アイドルの現場から離れたりとか、応援できなくなったりとか嫌だって。(第一回インタビューより)

一方で、現実の友人へ「推し」を広めたいという気持ちがあり、フィロソフィーのダンスを好きになりそうな友人がいれば、勧めたり、ライブに連れて行ったりしているという。また、広めるために、Twitter で「推し」のツイートを RT したり「いいね」したりしていると以下のように語った。

広めることが、彼女たちにとって良いことじゃないですか。ただ、ゴリ押しとかを個人的にされても嫌じゃないですか。だから、なんか、あ、この人こういう曲好きそうだなとかおすすめ聞かれたときとか、そういうときは良いけど、ただ、結構 Twitter って「～さんがいいねしました」って出るじゃないですか。それのおかげで、めっちゃ周りの人たちが知ってくれるようになって。(中略)

結構その、いいねしたりとかリブ送ったりとか、まあたまにあまりにもかわいいから RT したりとか、そういうのをきっかけに知ってくれる人が意外とまわりに増えて。一緒にライブ連れてったりとか、という人も、いて。曲聞いてくれるようになったりとか。だから、意外と、貢献できるもんなんだなっていう実感が最近あります(笑い) 新規を連れて行ってる私一、みたいな。(第一回インタビューより)

これらの動機として、「有名になってほしい、売れて欲しい」、「推し」も売れたいと思っているから、売れたら「推し」が嬉しい、「その子たちの嬉しいが、私の嬉しいなんで」と以下のように語っている。「推し」を応援したい、喜ばせたいという意識がうかがえる。

⁴³ アイドルオタクの略。

なんか、結構ドルオタって、有名になれば離れるタイプの人多いらしいんですけど。私はもうとにかく、その、有名になってほしい、売れて欲しいんで。その子たちも売りたいって言うてるし。私はとにかくその子たちを応援したい。その子たちの嬉しいが、私の嬉しいなんで。(第一回インタビューより)

3.2.8 Hさん

Hさんは、第一回インタビュー時 22 才で、スーパーマーケットの総合職として勤めている女性である。

3.2.8.1 「推し」について

第一回インタビューでは、アプリゲームの『アイドルマスター シンデレラガールズ』の女性キャラである双葉杏と二宮飛鳥、アプリゲームの『スクールガールストライカーズ』の女性キャラである菜森まなを挙げ、第二回インタビューからは加えてアプリゲームの『グランブルーファンタジー』の女性キャラであるスツルムを挙げた。

「推し変」することや、「推し」を増やすことについて、「罪悪感はない」と語った。「ゲームだったらまたインストールすればいいや」と、ゲームをやめていた時期も思っていたという。

これまでの「推し」については、ほぼ女性キャラであり、「かっこいい感じの女の子が好き。ボーイッシュな子とか」「ツンデレが好き」と、性格や見た目の好みが一貫していることを語っている。一方で、この好みは一般受けはしないと語っており、「みんななんか典型的な、おとなしかったりだとか、明るくて元気みたいなのそういう子たちが好きなじゃないかなと思う」と「みんなの好み」と自分はあってないという。これは、以下の語りのように、Hさんが「推し」以外の様々な行動で、「人と違うのが好き」「ただ単に周りと一緒になのが嫌」と語るように、他者との差異化を図りたい感情から生まれた語りではないかと推測できる。

最近、ちょっとあのメイク道具集めにも興味が出てきていて。それも趣味になりつつあります。(中略)

(メイク道具っていうのは、好きなブランドがあるとかですか?)

いや、そういうのじゃなくて。店頭の出てるものを見て、あ、これ面白そうだなって言ったら変ですけど、私結構人と違うことが好きなんです。メイク道具とかも人と違う物を使いたい。

(推しとかもちょっと人と違うところが好きみたいなところがあるんですかね。一般受けしないって話でしたが)

多分そうなのかもしれない。(中略) 人と違う髪型にしたいと思ったりとか、結局やらなかったんですけど、金髪とかにしたいなとか思ったし。周りと一緒になのが嫌だったんですかね。

(一貫してそういう気持ちがあるんですね)

それは結構ずっとありますね。周りと一緒にされたくないってのはあるかもしれないですね。

(第二回インタビューより)

追加の LINE での調査で「人と違ったことが好きだということから、一般受けしないようなキャラを無意識にでも選んでいると言われたらしっくりくるか」という質問について、

以下のように回答している。

そうですね…好き嫌いが極端にわかれそうなキャラを無意識に選んでると言われたらしくりますかね

「好き嫌いが極端にわかれる」が「一般受けしない」という意味でイコールならピッタリかと思います！（LINE での追加調査の語りより）

（１）「推し」への恋愛の意識

「推し」への恋愛の意識は「恋愛とは別」、「恋愛は二次元なら二次元で行われるべき」と否定している。

恋愛は、二次元なら二次元の中で行われるべきだし、二次元のキャラと恋愛するってのは全然、自分の意識にないし、ですね。夢小説⁴⁴とかも読めないですね。もう夢小説を読むなら、完全に自分とは独立した自分の中で新しいオリキャラを作って。もうそんな感じですね。（第二回インタビューより）

夢小説も「恥ずかしくて読めない」と語っており、二次元のキャラと自分自身を恋愛関係に持っていくことに抵抗感があることが伺える。また、第一回インタビューでは「乙女ゲームは自分との恋愛になるから、彼氏に申し訳ないなと思う」「女の子のキャラばかり好きになるのは、彼氏に申し訳ないなと思うからかも」と、二次元キャラを恋愛的に好きになるのは恋人に対して誠実ではないため、恋愛対象ではない女性キャラばかり好きになる、という語りがあった。しかし第二回インタビューではこの語りについて「思い出せない」ことや、「嫌な気持ちも、（彼氏は）起こらないだろうなと思う」と語っている。恋人と「推し」の関係については曖昧なところはあるが、H さんにとって「推し」と恋愛は遠いところにあることが推測できる。

（２）「推し」への信仰の意識

「推し」について信仰的に見ている人は周りにはいないが、熱狂的な人を見るとそこに信仰を感じるようである。自分については「あそこまで盲目的になれない」と「推し」について信仰的な意識があることを以下のように否定している。

⁴⁴ ここでは、キャラクターと自身との恋愛を楽しむ小説のこと。感情移入をさせやすくするため、小説中に登場する特定の人物の名前を変更することが可能。

(周りには推しを信仰的に見ている人はいない?)

周りにはいないです。でも熱狂的な人って熱狂的じゃないですか。この人のためにお金をかけたいみたいな。あそこまで盲目的にはなれないですね。(第二回インタビューより)

また宗教や信仰自体も身近に感じたことはないという。

うちは一応仏教ですけど、お教えのとおりにするとかは全然ないです。

(イメージは熱狂的なオタクの方が強い?)

そうですね。普通の宗教とかも、想像っていうか、身近に感じたことはないですけど、想像したりとか、宗教の勧誘とか全然うち来るんで。まあそういう人がいることも、現実的だなと思うんですけど。普通の宗教に関しては人それぞれだし、信じるものを信じたらいんじゃないかなと。他人に押し付けるのはちょっと違いますけどね。(第二回インタビューより)

3.2.8.2 「推し」にかかわる消費行動について

第一回のインタビューでは、給料は月給 21 万円で、「推し」に使うお金について、多くて 1 ヶ月に 3 万 5000 円で、いつもは 2 万 5000 円ほどに抑えようしていると語った。第二回のインタビューでは、最近グラブルでスツルムがのピックアップ期間⁴⁵があったため、天井⁴⁶の 9 万円課金したという。「ゲームが一番の趣味」「一番お金かけてるのはゲーム」と語っている。

H さんは「お金があれば使ってしまう」と自分のことを評価しており、学生時代にガチャの課金代を支払えなくなってしまう、リボ払いで返済したことを語った。このようなライフストーリーから、自己について「お金にかかわる意識が低い」と評価し、「結構お金ってすぐ集まるんだと思って」という意識がガチャの課金にも影響していることを以下のように語った。

また、「推し」にかけるお金は「ゲームを楽しむためのもの」とであると以下のように語った。「貢ぎ」という意識を否定しているのも、その理由からである。「貢ぎ」をするのは、「信者」とも呼ばれるような「推し」を信仰的に見ている人であると語った。

なんか、一人で楽しむために、強くなれる材料を探しているって言うのとあれですけど。一人でも、十分遊べるように、強くなれたら良いなあっていう気持ちですね。

(貢ぎとか捧げものとか、お金を貢ぎとか捧げものとか推しに対して思うことは?)

ないですね。完全にここで一線引かれてるんで、まあお金は自分のために使っているって感じ

⁴⁵ ガチャで対象のキャラの排出率が高くなる期間。

⁴⁶ ガチャの課金の上限額のこと。グラブルの場合、ピックアップ時に天井の 9 万円を課金するとピックアップされているキャラを確実に手に入れることができる。

ですね。でも、その楽しむ中に、推しの子がいたらいいなという気持ちでやってますね。

(貢ぎとかはどういう人がしているイメージですか?)

宗教? 完全に宗教に入ってる人。(中略) もうなんか盲目信者みたいな。盲目って言ったらあれですけど。(第二回インタビューより)

同様の理由で、「ゲームが終わらないことへの意識」からの課金もないという。

(終わらないためにお金をかけたりはしない?)

そうですね。そこまでお金をかけるというよりは、自分が楽しむためにお金をかけるって感じですね。(第一回インタビューより)

実際に、課金していたゲームがなくなってしまったことがあるが、後悔はしていないという。

(ガチャとかゲームとかデータじゃないですか。そういうものに対してお金を出すっていうことも、特に考えなかったです?)

考えなかったです。今はもうやってないし、そのゲームも終わっちゃったし。

(後悔はしてないんですか?)

そうなんです。そこが一番怖いんですよね。みんな結構データにお金を払うのってサービスを終了したら消えちゃうのに、なんでそんなのにお金をかけるんだって言う子もいるんですよね。もったいないって。でもなんか、あんまりそういう気持ちはないですね。今でもないですね。(第一回インタビューより)

恋人に求めるものは「安心感」や「癒し」であったり、「恋人からのサプライズは苦手」と言ったり、ジェットコースターなどの絶叫系は苦手など、Hさんはあまり感情の起伏を感じたいタイプではないことが伺える。家族や恋人といるとき、感情の起伏はあまりないと語った。しかし、そんな起伏のない日でも、「推し」をガチャで引いたときは嬉しく高まると語り、日常のスパイスとしてゲームやガチャ、「推し」を捉えていることが推測できる。

3.2.8.3 他ファンへの意識について

「自分が楽しむためにやっている」ことなので、だれかに広めたりしたいという意識はないという。

他ファンの仲間もおらず、「完全に一人でやっている」と語った。「推し」の名前で検索し、「推し」についての他ファンの意見を見たり、「推し」を手に入れている人を見て、ガチャをするモチベーションとしている場合はあるという。

3.2.9 I さん

I さんは、第一回インタビュー時 22 才の男性大学生である。

3.2.9.1 「推し」について

I さんは、「推し」として、男性作家・シナリオライターの作家 L、作家 L がシナリオライターを担当したノベルゲーム『WHITE ALBUM2』の女性キャラであるゲームキャラ M、女性歌手の XAI を挙げた。

作家 L とゲームキャラ M については「私は作家 L って作家の推しでありながら、彼のキャラクターの推しなので⁴⁷」と語っており、作家 L について「面倒くさい女の子を書くのが多分、世界一うまい、日本一うまい作家なんですよ」と評価している。その「面倒くさい女の子」であるゲームキャラ M も好きであるという構図がうかがえる。

「推し」という言葉は、「あえてオタク的な装いをするとき」ネタとしては使うが、日常的に使わないという。

使わないですね。使わないです。いやまあ、何て言うんだろう。表現の仕方としては使いますが、なんて言ったら良いんだろう。会話の中で、何て言うでしょ、逆にネタのような言い方のときには逆にむしろ使いはしますけど、日常的な言い方で推しって言い方そんなに私はしないで
すね。(第一回インタビューより)

(1) 「推し」への恋愛の意識

三次元に存在する XAI に関しては、「付き合いたいかな？」という質問に対して「難しい。そうかもしれない」と以下のように回答している。

(推しとできるなら恋愛したいと思います?)

難しい。今回の場合だと、XAI さんだけですわね、女性は。はい、そうですね、そうかもしれない。
い。

(付き合えるなら付き合いたい?)

そうですね。(第一回インタビューより)

一方で、二次元の「推し」については、「そう (付き合いたいと) 思わないところもない」が、「主人公と結ばれるところを見たい」と以下のように気持ちを語った。

⁴⁷ 推測ではあるが、「作家 L って作家を推していながら、彼のキャラクターも推している」の意味

何か二次元のキャラクター私見てるときって、いや何だろう、凄い好きですし、何だろ、そう思わないところがないわけでもないんですけど。何だろな、大体、そのあくまで主人公と結ばれるのがいいと思ってしまうタイプというか。主人公と結ばれるところを見たいというかそういうタイプなんで。(第一回インタビューより)

「自分とキャラクターを切り離して見ると思います。うん、二次元なら」とも語る通り、「自分」対「推し」で恋愛的な想像をすることはあまりないことが伺える。

(2)「推し」への信仰の意識

作家Lに関して、自身のことを「信者」と呼んだり、「私は。宗教だと思ってます」「作家Lは神」というように、作家Lという存在については信仰の意識があることを語った。

信仰の意味については、「作品を楽しみかつ、作者までもあがめることもある」と語っており、作者を崇めているという意味で宗教であるという。作家Lの誕生日にお祝いすることをその例としてあげ、「キャラクターではなくおじさんをお祝いする」ことの特異性を以下のように語った。ただ「100%そのまま、聖書そのままをテキスト通りに信じるってわけでは、あんまりないかもしれない」という意味では「信者」ではないと考察している。

(宗教性みたいなのはどのへんに感じたりしてます?)

なんだろうな。例えば、作家Lって12月21日が誕生日なんですよ。誕生日をお祝いするんですね。キャラクターの誕生日ってよくお祝いする文化ってあるじゃないですか。原作者の誕生日をお祝いする文化ってなかなかないと思うんですよね。それも普通のおじさんなんですよ。やべー奴らだなんて思うんですけど。(中略)

宗教性? 作品も楽しんではいけど、作品っていうよりも、作者を崇め始めてるところはあるなっていう。作者までを崇め始めていることがあると。新興宗教です。

(例えば新作で、ネガティブな感想を持つことはまったくないっていう?)

あ、いやでもそれはありますね。それはありますね。マイナスなイメージは、なんか作品として、えっこれは違うんだよなって思うときは全然ありますね。そういう意味では、たしかに信者的じゃないのかもしれないです。なんだろうな、100%そのまま、聖書そのままをテキスト通りに信じるってわけでは、あんまりないかもしれないです。そんなことしたら、同人誌なんて邪教なんで。禁書なんで。(第二回インタビューより)

従来の宗教であるキリスト教や仏教などの宗教観を知らないため、言い切れはしないが、実感は近いものであると語った。一方で、宗教のレッテルを貼って冗談のように語っているという一面も肯定し、レッテル貼りの面もありつつも宗教や信仰に近しいと確信しているような想いも感じていることが伺える。

(キリスト教や仏教などのこれまでの宗教の信者とほぼ同じ感覚だろうなと思っている?)

うーん、私もちゃんとした宗教はもってないんで、なんとも言えないというか、ちゃんとした宗教観をしらないので、なんとも私が言ったらいいのかわからないですけど。でも近しいものはあるのかなというのは感じています。近いのかなとは思っています。

(ちょっとうがった見方ですけど、宗教的な大げさな言い方をすることによって、若干楽しんでいるというか、ここまで強く好きであるといういわゆるレッテル貼りみたいな)

はい、もあると思います。はい、むしろ全然あると思います。というかそういう側面は、全然あると思います、若干どころか全然あると思います。

(でも、根本的なすごいという気持ちは変わらないわけですから、そこに宗教的なものを)

はい。純粹にあの人すげーなってところから始まってはいるので。それを、その信者とか、宗教とかっていつてある種茶化すような言い方をして、キャラクター付けをしているっていう面もあると思うんですけど、でも実質的には、そういう面(宗教的な感覚)はあるのかなっていうふうには思います。(第二回インタビューより)

Iさんは、恋愛的に好きなタイプを聞いた際に、「どんな面でもいいですけど、あ、この人には絶対かなわないなって思わせてくれる人が好きなんですね」と答えており、それは「推し」にも通ずると話している。

どんな面でもいいですよ、どんな面でもいいですけど、あ、この人には絶対かなわないなって思わせてくれる人が好きなんです。これ、必ずいつも私が好みの人聞かれるというんですけど。

(中略) 敵わないなっていう思うところで、惚れているというか推してるので。(第一回インタビューより)

また、自分より知識量があり深い考察ができる他ファンを「絶対勝てない、一生着いてきますという人たち」と尊敬している。Iさんが大事に思っている(「めんどくさい女の子」を生み出せる、Iさんの琴線に触れる作品を作れる、知識量がある、深い考察ができるなど)ことにおいて、「自分が敵わない」と思う存在に、恋愛・信仰・尊敬などの強いポジティブな印象が生まれることがうかがえる。

3.2.9.2 「推し」にかかわる消費行動について

大学生であるIさんは、主にバイト代と仕送りによって「推し」にかかわる消費行動を行っている。

第一回インタビューでは、XAIについて、デビューしてからCDがあまり出ていないことを嘆きつつ、6枚全て持っているため12,000円かけていると語った。XAIについての消費行動については「凄い好みの歌声だった」ことや「選ばれし感」「最初期から追えてるっていう、感はちょっとあります」という自負などの動機があるという。

そうですね。ライブとかやったら絶対。行くと思う、多分。全力で追いかけます。彼女に関しては。アーティストさんとかで、三次元で追いかけるとかはなかったときはなかったんで、自分でビックリなんですけど。

(へえ。どこがいいなと思ったんですかね?)

いや、いやまあ歌声ですね。歌声でも、凄い好きな歌声だったので。後はそうですね、最初期から追えてるっていうあれはちょっとあります。最初期から追えてるっていう、感はちょっとあります

(なるほどね。選ばれしオタクというか)

そうですね、そうですね。選ばれし感はちょっと。話題にまだなっていないで。(第一回インタビューより)

作家 L 関連には作品、グッズ代、同人誌、オフ会の参加費と交通費などをあげ、合計で 5 万円ほどかけていることを語った。

「貢ぎ」に関しては、「ジャンルを盛り上げたい」という意味で、「同人を含めたジャンル全体には使う」と語っている。これらのお金を使う根本には「いいジャンルだから買わなきゃ」という気持ちがあり、お金を出すこと自体への喜びは感じないという。

お金を使うことの喜びはそんなにないんですね。というよりは、いいジャンルだから買わなきゃならないっていう感じなので。お金を使うからっていう感覚はそんなにない。(第一回インタビューより)

「買い支えているという意識」はあるが、自分は好きなものへの対価を払い続けた結果としてであり、「ジロリアン⁴⁸みたいなもので、味が癖になって離れられない人なので」「純粋に作品が好きなので追ってるという感じ」と語るように、「推し」を買い支えようと思ってお金を出しているわけではないという。

また、第二回インタビューでは、作家 L 原作の映画へ 10 回ほど通っていることを語った。動機として、何度見ても面白かったこと、週替りでもらえる作家 L が書いた小冊子がほしかったことと、劇中の様々なこと(映画内でのセリフや、登場する名刺の内容、電柱に書いてある文字など)をメモしたかった、などを挙げた。

電柱に書いてある文字や劇中ちらっと映る電話番号などの「しょうがない、どうでもいいところ」についてメモをとることについて、「だれもやってないのでやりたい」、今のところは自己満足が強い旨を以下のように語っている。

円盤⁴⁹出るまで待てよって話なんですけど、そうすれば止め放題じゃんって話ですけど。出る

⁴⁸ ラーメン屋「ラーメン二郎」が熱狂的に好きな人たちのこと。

⁴⁹ CD・DVD・Blu-ray などの音楽・映像メディアのこと。この場合、上映された映画の

前にやりたいよねって言って。

(それは誰もやってないのでやりたいみたいな？)

そうですね、そんなところですよ。やってる人がいないので。まあいなくはないんですけど。そう、円盤だったら誰にでも止めてできちゃうので。それよりも前に、やりたいよねっていうのを言ってる人たちが、日本中に両手にはならないくらいしかいないので。(中略)

(マウントをとるわけではなく？)

ではあんまないですね。純粋に研究ですね。それこそ研究です。めちゃくちゃ厄介な人なので。(どのへんが厄介だと思うんですか？)

電柱に書いてある文字とかメモしてもしようがないじゃないですか。一瞬だけ名刺に写ってる電話番号とかメモしてもしようがないじゃないですか。どうでもいいところをメモしてますね。本編は本編でちゃんと楽しんだ上でなんですけど。

(どうでもいいというところを、他の人をやっていないみたいな自負がある？)

はいそうですね、あります、だいぶあります、だいぶあります。先行研究があんまりないところをを掘っているっていうのはだいぶあります。

(完全に自己満足が強い？)

はい、今のところは。これからまとめて冊子にしたいよねってところはなくもないんですけど(円盤が出る前に？)

もちろんです。出ちゃったら誰でも出ちゃうので。(第二回インタビューより)

単純に映画に行く回数を競っているわけではなく、「知識が増えること」ということにIさんが目指すところや美学があり、それが映画へ複数回行く動機の一つとなっていることが推測できる。Iさんはこのようなことについて、「厄介な人」「厄介なオタク」と自称している。

3.2.9.3 他ファンへの意識

「推し」と似たような言葉で「尊い」や「萌え」をあげ、これらの言葉は好きなジャンルについての高まりを「その言葉で、その言葉一つだけで、括ってしまうっていう感じが、私は好きじゃない感じですね」と語っている。

萌っていう言葉の時点で、多分それより古いオタクの人たちは違和感を感じてた。萌えっていう言葉に対する、何て言うんだろうな。違和感とは多分その前の人たちは感じてたんだろうっていうその。常に時代を繰り返すんだろうなっていう感覚というか。って感じとかかな、なんていうか。なんていうかこう、高まりがあるじゃないですか、こう好きなジャンルに対する(はいはいはい。それに対して、萌えとか尊いとかっていう、ラベリングがされることに対する、違和感ということですか？その言葉じゃなかったのについていう)

DVD や Blu-ray 版のことを指す。

そうですね、なんていうんだろ。その言葉で、その言葉一つだけで、括ってしまうっていう感じが、私は好きじゃない感じですね。すべてを、全てをその概念で、悪い言い方をしたら逃げてしまうというか。(第一回インタビューより)

さらに、これらの言葉を使う人々は「共感の文化」の中にあるという考察をし、その共感を良しとする文化は、「ガワはオタク的かもしれないけど、オタク的な文化じゃない」「ファッションとかの趣味に近い」と評価している。

何だろう、尊いとかっていう言葉、さっき出てきましたが、とか、巨大ジャンルを追ってるニュアンスって何か、共感の文化だと思うんですよ。自分で、それを、その良さを見出して追いかけるというよりは。共感の文化だと思うんですね。周りがみんな好きで、その中で、分かる、分かりみ！って言いたい文化というか。で、なんか私の中ではどちらかというとそれっていうのは、ガワはオタク的かもしれないけど、オタク的な文化じゃないと思ってる場所があつて。これ私の結構めんどくさい考えなので。性質はどちらかって言うと、ファッションとかの趣味に多分近い文脈なんだ、その性質なんだろうなって思つて。(第一回インタビューより)

そして、「共感の文化」の中の人々と対比させて、Iさん自身については「自分で見出したものに、その価値を掘り進めていきたいタイプ」という意味で「古典的なオタク」とであると称した。

で、そう、私はどちらかって言うと。何て言うんだろう、自分で見出したものに、そのどこがその価値があるのか?っていうのを自分で見出して、その価値を掘り進めていきたいタイプなので。ま、だから古典的なオタクなんです。(第一回インタビューより)

Iさんはこの「古典的なオタク」であるかそうでないかに、他ファンへポジティブな目線を向けるかネガティブな目線を向けるかの線引があるように思える。「古典的なオタク」に類似する他ファンは、作品についてよく語り、深い知識を持っており、作品について愛を持っている(ようにIさんから見える)他ファンのことである。

実際、Iさんは「作家L界限⁵⁰」と呼ぶTwitter上のコミュニティに属しているが、仲が良い・尊敬する人たちはこのような「古典的なオタク」である(以下の語りのように、「共同研究者」「厄介な信者」とも呼んでいる)。

共同研究者がいるので。共同研究者がちらほらいるので。(中略)

(設定資料集を作りたい系のオタクと集まってる)

⁵⁰ ○○界限とは、属性や特定のジャンルなどに属する人たちを示すネット用語。

はいはい。ヤバい人らです。共同研究とか言ってるだけなんで、すごい恥ずかしい。このレベルでやってるのは、何度かがつつり話をしてるのは、3、4人くらいですか。自分入れて3、4人程度ですね。そのレベルの情報を共有しあってるのはそのくらいの人数ですね。

(信者って言葉は結構普通に使いますか?)

あ、使います。信者ってよく使いますね。自分も含めて、多くの、私たちっていうニュアンスで使いますね。

(どのへんが信者みがある感じですか?)

まあ、ね、あの人のテキストを読めるなら、映画を7回連続で観なきゃって思うくらいには。あの人のテキストが読めるなら、っていう、そうですね。そのテキストのためだけに7回観るくらいには。

(信者って盲目的なちょっとネガティブなイメージ会ったりしますが、そういうニュアンスは出してない?)

ま、そうですね。そんなにネガティブなニュアンスで思っっては、普段はいないですね。

(どちらかというと、大げさ、大事に言って、ちょっと違いみたいところを語るみたいなイメージ?)

そうですね、そうですね。めちゃくちゃ厄介に追いかけてる人たちっていうニュアンスで使っています。

(信者と信者の線引きはありますか?)

やっぱりその、単体の作品が好きな人もいれば、作家が好きな人もいればって感じなので。もうなんか、私たちは、作家のおじさんそのものが好きなので。そこの域まで達してる人たちと、作品自体が好きな人たちっていうのは、どっちが優劣ってわけではなく、また異質のものなんだろうなと思っています。(第二回インタビューより)

一方で、ネガティブな視線を向けるのは「古典的なオタク」から逸脱した他ファンである。「新参」と呼ぶ新規ファンについて、「知識があるなら良いんですけど」と語り、「新参」については「にわか」「語らないファン」については「(作品)を好きかどうか分からない」「よく思わない(ネガティブに思わない)ようにしてはいるが、まあまあ……」と濁しながらも語った。界限について「飲んで騒ぎたい人もいるし、考察したい人もいるし、棲み分けがされてきてるな」と表現するように、前者を批判、後者を自分たちだと線引きしている意識がうかがえる。

3.2.10 J さん

J さんは、インタビュー時 27 才で、鉄道会社の車掌として勤めている男性である。J さんについては、インタビュー前に質問内容を教えて欲しいという本人からの依頼があり、事前におおよその質問内容を送っている。その質問内容に基づいて、J さんが作成した資料（以下：資料）が存在する。以下、その資料からの引用は『』で示す。

3.2.10.1 「推し」について

J さんは、ゲーム『東方 Project』の女性キャラであるチルノを「推し」として挙げた。資料に、「推し」という言葉について『Twitter か、まとめブログだろうか。少なくともネット上で見つけてすんなりと意味を理解したのは確か。実はあんまり好きな言葉ではなかったりする。理由は特に無いけど』と記述しているとおおり、「推し」の意味はすんなり理解できた一方で、好きではないという。インタビューでは、日常的に「推し」という言葉はあまり使わないと語った。Twitter で使うのは「ノリ」だという。



図 8 「推し」という言葉を使用した J さんの Twitter⁵¹

⁵¹ ご本人の掲載許可済み

「推し」という言葉を使わないことについて、TwitterのDMでのインタビュー後の追加調査では、「そもそも、あまり感情を言葉にしてこなかった」と、そもそも話すことが嫌いなことが根本にあるのではないかと以下のように語っている。

（「推し」という言葉について）別に嫌ってわけじゃないんですよ。そもそも、あまり感情を言葉として表現してこなかったような気がします。話すことを好まないのと同関係があるかも

（１）「推し」への恋愛の意識

Jさんは、チルノの「なりきり」へは恋愛の意識が強いということを語った。『自分はこのなりきりとの関わりがとても深く、推しの話をする上で欠かせないもの』、『日常的にチルノのなりきりと話すが、内容は明らかに恋愛そのものである。相手によっては好き放題愛でられるので、正に「推しと恋愛している」という感触が得られる。実はこの会話こそが自分の活動を強く支えている』と資料に記述する通り、なりきりはJさんの「推し」への意識に強く関わっていると言える。

「なりきり」とは、Twitterのなりきりアカウントのことで、特定のキャラになりきってツイートをするアカウントのことである。チルノのなりきりアカウントは、Twitter上にたくさん存在する。



図 9 チルノなりきりのアカウント検索結果

Jさんはこのなりきりについて、「アカウント全部フォローしてるけど、300人くらいあるな」とその数の多さと、自身が全てフォローしていることを語った。また、同時に複数アカウントとやりとりすることは複数の「推し」と話していることにはならず、「たくさんの一人」と話している感じであり、罪悪感を感じないという。「ある意味浮気症なのかもしれない」と冗談交じりに語った。

(へえ、なんかこの子と仲良くなっちゃったら申し訳ないなみたいなことならないですか?)

ないかなー。

(ガチ恋っていう感じではないっていう)

あ、でもガチっぽいね。こんなんだけどガチっぽいよ。

(うーん、でも、何人とも同時並行できるんですよね。それとも、本当にガチ恋してるのは一人だけみたいな)

何人でもありだな。ある意味浮気症なのかもしれない。

(話してるのはチルノちゃんっていう概念みたいな)

そうそう。

また、このなりきりアカウントを運用している「中の人」たち(10、20人ほど)とも実際に会ったことがあると語っている。「中の人」はだいたい男性だが、会ったときは友人として、Twitter上ではチルノとして接すると、複雑に見方を使い分けているという。

(たとえ、会って男の人だとしても、次の日から、なりきりで?)

なりきりで。好きなのが変わるかっていうとそうじゃなくて。

「中の人」が分かったほうが良いか、裏側は見えないほうが良いか、という質問には「どっちでもいい」と回答しており、どっちかなら分かったほうが人としても付き合えるので面白いという。実際になりきりの一人を友人として、ブラック企業をやめさせ、家に一年間住まわせていたというエピソードを以下のように語った。

(へーすごいな。(中略) やっぱ裏側は見えないほうが嬉しいですか?)

どっちでもいい。どっちかだと分かった方が面白いよね

(それはまた恋愛とは違った気持ちで面白い?)

人として。マジで死にかけたやつがいて。助けに行って、千葉まで行って。連れて帰ったの、一年間うちに居候してたの。ブラック企業にはめられてたの。マジでこいつやべーなって。自分で夕方くらいに飛び出して行って、荷物全部まとめてこっち夜逃げしてきて。

友人でもある彼は、まだなりきりをやっているといい、今でも Twitter 上では「チルノ」としてやりとりをしているという。Jさんは仲良くなると、なりきり相手には「なんでも話せる」と語っており、恋愛だけではなく重要なコミュニケーションとしてもなりきりを位置づけていることをうかがえる。『画面越しに話しているのはあくまでキャラだ、という理解がしっかり出来る人じゃないと、なりきりとの会話は楽しめない』と資料でも記述するように、「複雑だけど面白いよ。面白いからやめらんない」と様々な関係が絡むなりきりについて語った。

また、5年弱ほど付き合っていた一番好きだったなりきりがいなくなり、「中の人」を知らなかったので連絡もできず、「人として心配」かつ「パートナー死んだときの感情に近い」と、恋愛と絡めて悲しさを以下のように語った。

一人ね、あの一番好きだったのがね、最近いなくなっちゃって。ずっと話してたのにね、なんか突然ぱったりいなくなって。それがね今一番寂しい。(中略) あったこともないし、連絡先も知ってることもないし。本当何があったらなって。よく話してたんだけど、ある日突然ぱったりいなくなって。(中略)

もうそのとき、今の感情っていうのは、やっぱり、あのなんだ、パートナー死んだときの感情に近いのかな。そこまで強烈じゃないかもしれないけど。でも泣いたしな。じわじわきてる。あんまりそういうの言わないけど。

Jさんは、「誰かと一緒に住むのが好きじゃないから」と、結婚願望はないと語った。「何でも語れるほど」の深いコミュニケーションができ、恋愛感情も抱くほど強い気持ちを持っているなりきりチルノとのやり取りは、「誰かと一緒に住む」ようなネガティブなこともなく、理想の恋愛相手なのかもしれない。

(2)「推し」への信仰の意識

資料では、『宗教だとは思っていないけど、何か違うのかと言われても明確な違いを言い返せないと思うので、かつての「宗教」と今の「推し」というものは本質的にはほぼ同じではないだろうか。』と言及しており、インタビューでも「宗教と変わらないと思うときもある」と回答している。

キリスト教についても、「キリスト教ってキリストが推しでしょ？聖書って推しの本だよ」と語るように、すべて宗教とは言いきれずとも、似通った部分を実感として感じていることはうかがえる。前述の、Jさんが数多くのなりきりと話すことについて、「たくさんの一人」と話している感じだと語ったことは、キリスト教の信者が父、子、精霊を一体としてとらえている(三位一体)ように「推し」を受け取っているようにも見える。

「尊い」という言葉については使うことはないが、たまにそういう気持ちになるイラストを見かけることがあるという。以下の語りのように、Jさんはそのようなイラストは尊すぎて「直視できない」と表現している。

そういうのを見るとね、ああ、尊いわって

(ああ、作品自体が尊い)

そうそう。尊いもあんまり使わないけど、尊いものを見るとね、なんか直視できない。なんかね。長時間見てられない。適度に良いもののほうがね、見てられる

3.2.10.2 「推し」にかかわる消費行動について

資料に年収と「推し」につかう割合について記述していただいたため、そのまま引用する。

2018 年 131 万⑨6⑨4 円 (年収に対する割合 33.8%)

2017 年 148 万⑨543 円 (同 37.0%)

2016 年 162 万 654⑨円 (同 4⑨.4%)

金額が年々減っているのは 2016 年⑨月に家を建ててローンの支払いが始まったため。

2016 年は 5 割を、それ以降は 3、4 割を「推し」に使っていることがうかがえる。また、Jさんは「痛家」と称して、原作でチルノが住んでいる家を模した自宅兼「チルノ博物館」を建てている。資料では『金額が年々減っているのは 2016 年⑨月に家を建ててローンの支払いが始まったため』と記述しているが、家のローンも「推し」にかかわる消費行動と捉えることもできる。



図 10 Jさんの家兼チルノ博物館の案内 (Twitter のヘッダー画像)

「振り返ったときに分からないっていうのがなんかね、どうも好きじゃなくて」と語るように、しっかり家計簿をつけた上に、集めた5千点弱のチルノグッズの写真を撮り、データベースにしているという。イベントのときはポシェットの中に現金を2、30万円入れておき、終わったあと残金を数えていくら使ったかも数えていると語った。

.webaxs	537ミカ大型	D2ザルノート	N7hanahana9387	Xあ_あおいるてんがい	Xす_すなめりド リル_関KID
00未分類・保留	619ペ ストリ	D9文房具その他	N7pickles61cu	Xあ_アノミー	Xす_許MAP_ばいそんきっど
1A缶バ ッジ 角・ビン バ ッジ 他	717シルバースター一般	E1イヤン77セリ	N7pokepoke77	Xあ_亜阿相界	Xた_タ イキシ
18世界のザル/ちゃん	72スリカーステッカー	E2スリカバ ー	N7sbgmy178	Xあ_甘酸っぱいソース	Xち_チョコバチョコキン
1Cぶにっとか チ	73シルバ ッカリマン風	E9IT用品その他	N7steinsgate0040725	Xあ0あびゅあっ不分別	Xふ_ふももちるの
2Aストラップ 人型	817ダ ネットシート	F1ダ ラス	N7subarubosi_m_basu	Xあ1あびゅあっザルノ	Xよ_四匹の黒猫
2Dストラップ その他	827ダ ネット缶	F2マダ カップ	N8イストその他R18	Xあ2あびゅあっ旧ザルノ	Xリ_リとる☆はむれっと
11缶バ ッジ 小左	99⑨	F9キッパン用品その他	N9hihara_kahoko_90snow	Xあ3あびゅあっ新ザルノ	Z1確認済不所持
12缶バ ッジ 小前	A11トバ ッジ	G1時計	N9kaorichtea	Xあ4あびゅあっ新々ザルノ	ZZold
13缶バ ッジ 小右	A2カド スリーブ	H1うちわ・扇子	N9mikan_nao_7884	Xあ5あびゅあっ新々々ザルノ	15World_of_Cirno.png
14缶バ ッジ 中左	A3バ スース	I1Zippoライター類	N9popporykn0w	Xあ6あびゅあっ新々々々ザルノ	9999くらゐ.doc
15缶バ ッジ 中前	A9アースその他	J17カセリ	N9waitan1729	Xあ7あびゅあっ新5ザルノ	backuplog_201907140400.txt
16缶バ ッジ 中右	B1Tシャ	K1カド ミラー	NX(雛形)ヤフオクID別	Xあ8あびゅあっ新6ザルノ	backuplog_201907210400.txt
17缶バ ッジ 大	B2カバ・ハンカチ	L1家具	R18Doujin	Xあ9あびゅあっ新7ザルノ	backuplog_201908230400.txt
21ストラップ 札形	B3クッション	M1色紙小型	R99DoujinSource	XあAあびゅあっ新8ザルノ	backuplog_201908250400.txt
24ストラップ 角型	B4抱き枕カバー	M2色紙中型	XA_AbsoluteZero	XあBあびゅあっ新9ザルノ	backuplog_201909010400.txt
27ストラップ 丸型	B9布製品その他	M3色紙R18	XA_atre秋葉原	XあCあびゅあっ新10ザルノ	backuplog_201909080400.txt
39キ ーボード バッテリー	C11イキ ッ立体	N1イキ スター	XB_BAKA屋	XあZあびゅあっ他	backuplog_201909150400.txt
34キ ーボード ケース	C2フェイス7平面・アクリルスタンド	N2絵画	XK_KURONEKO・WORK's	Xう_うさぎや	Doujin.xls
37キ ーボード ケーシング 左	C3ガレキ	N3カド 系	XN_NoName?	Xえ_えみゆ〜工房	I1Zippo_NoName.png
38キ ーボード ケーシング 前	C4ぬいぐるみ	N4イキ スタード ー一般	XP_ProjectCK	Xく_黒猫がしす	List.TXT
39キ ーボード ケーシング 右	C5かみぐるみ チルノ	N5イキ スタード R18	XS_Schnee Bitte Kristall	Xし_刺しゅうグッズ 工房	source
51ザルノ型	C6ビーズアイロン類	N6イキストその他一般	XV_VeryBerry_A-エース	Xし_色紙屋	チルノ博物館 蔵書リスト.xlsx
52ザルノード 型	D1ザルノアイル	N7clapika_kuruta	Xあ_あ・ほ・く・さ	Xし_人工生物販売所	分類X.M.TXT

図 11 グッズ写真のデータ群

チルノ博物館 蔵書リスト

ファイル 編集 表示 挿入 表示形式 データ ツール アドオン ヘルプ 最終編集: 5 日前

100% 123 Arial 10 B I U A

田 田

図 12 チルノ博物館の蔵書（同人誌）リスト

イベントに行くとチルノであればすべて買い、たとえグッズが気に入らなくても「チルノだったら買うね」というように、チルノのグッズであればなんでも買っている。唯一集めるのを諦めているものとして、メルカリ⁵²で 100 円で投げ売られている「落書きみたいな」「しょうもない」チルノのイラストをあげた。しかし、お金が無尽蔵であれば欲しいものであるという。

(気に入らなくても買います?)

チルノだったら買うね。とりあえずあれば集めようかって。だから本当しょうもない絵があったりするから。一時期本当に落書きみたいな集めてたけど、さすがにこう、イラストに関しては、数が多すぎて、流石に質の低いものは切ったかな(中略) えっとね、メルカリだったかな。メルカリかなんかで売ってて。100円とかで投げ売りされてるから、片っ端から買ってた。これどうかなって思って。イラストに関してさすがにそこ、極端に低いものは切ったね。そこまで裕福じゃないんで。年収1千万とかあったら、そういうものも根こそぎ買ってたんでしょけど。

(中略)

でもイベントで出てるのは買っちゃうかな。通販サイトに出てるのは、ある程度線引きはしてるけど、イベント出ると、あるの全部買っちゃうから。

グッズは気に入らないもの「チルノであればなんでも」も買い、「ある程度はどこかで線引きしてると思う」と言いつつ、どこに線引きがあるのかは語っていない。また、以下のように、通常と違う配色のキャラを描く「2Pカラー」でも、キャラを大人化して描く「大人化」でも、「概念として好きのほうが上回っている」のでチルノとして好きであると語る。

(2Pカラーでも大丈夫なんですか?)

全然。地がチルノであればオケー

(へえ、成長はどうです?大人化みたいな)

ありますね

(うーん、ロリのところも否定されてしまうと、たしかに)

そりゃまあ、概念として好きのほうが上回ってるんでしょね

(例えば公式が自分とちょっと違うチルノちゃんを出してもオーケーって?)

チルノ?ならくれって

チルノについてどこが好きなのかわからない、概念として好き、多くのなりきりとやり取りし、なりきりを「たくさんの一人」として捉えているという、などのことから、Jさんの中で、チルノという存在への寛容さがうかがえる。

⁵² オンライン上でフリーマーケットのように、個人が物を出店することができるサービス。

また、資料でも、以下のように述べている。

「実は自分自身で「何が好きなんだろうね？」と聞き返したくなるくらい、何が好きなのか分かっていない。

何がどう好きで、と言うものより、その存在があることが好き、といった感じ。特徴ではなくて、概念として好き、と言ったらいいだろうか。言葉にならないふわっとした感じで好き。

「自分は語るオタクではない」ことや、感覚を言語化することを苦手とすることを、Jさんは調査で繰り返し述べている。言語化をあまりしないことも、「概念として好き」というような、チルノという存在への寛容さに影響しているのだと考えられる。

「推し」のグッズを集めていて一番嬉しいときは、「こいつやベーやつだなんて言われる」ことだが、実際集めているときは「無心」で、「こいつやベーやつだな」と言われたくて集めているわけではないと以下のように語った。

こいつやベーやつだなんて言われると、楽しいので。

(こいつやベーやつだなんて思っほしくて、グッズ集めてるわけじゃないんですよね?)

そうそう。

(それは順序逆じゃないですよね?)

そうそう。

(集めてるときは、キャラ愛?)

そう、無心になって。

「貢ぎ」については、「推し」にではなく、「チルノクラスタ」全体にという意味では思っているという。「グッズを作ってくれる人」がいて、はじめてグッズを集める「自分のアイデンティティ」があると語った。「世にあるもの全部集めたい」という動機もあるという。

(こういうグッズだったりとか、貢ぎとか思ったりします?)

貢ぎじゃないかな。貢ぎだとしたら、その、なんだ、クラスタに対して貢いでいる。ま、自分が買うとそのサークルが儲かるじゃないですか。それでまた、新しいのを作ってくれて、それをまた自分が買えばそりゃ儲かるじゃないですか。そうやって増えていけばいいなって

(クリエイターさんへの貢ぎみたいなのはあると)

そうそう。作ってくれてありがとうみたいなね。周りが作ってくれないと、こっちは成り立たないんですよ。(中略) 周りに作ってくれる人がいて、はじめて自分の存在がある。自分のアイデンティティがある。

(ほー深い、なるほど)

深いのかな? 深みを考えて集めたことがない。ただ、世にあるもの全部集めたいとしか思っ

ない。

また、グッズを集めている理由の一つに「推し続けて、何が待ってるんだろう」「突き抜けたらどこまで行くんだろう」というのを「自分自身で試してみたい」というものがあることを語った。「人生の一部」だというように、人生という大きな中に「推し」を位置づけていることがうかがえる。

そうそう。これやってる理由のひとつにこれ自分突き抜けたらどこまで行くんだろう。そこまでやってる人ってあんまりいないから、もうずっとしてっ先に自分どうなるだろう。それを自分自身で試してみたい。推し続けて、何が待ってるんだろう

(結構その、希望を持っています？)

希望かな、一応(中略)なんか人生の一部だね。どこまでやっていくのかわからないけど、行き着くところまで行ってみよう。

チルノに関しては、「人生」というほど強い意識を語っている一方で、原作であるゲームは「積みゲー⁵³」になっているという。自分ではプレイしないゲームを買うことについては「お布施」と以下のように表現している。

もちろん原作は、前やってたけど、今ゲーム自体あんまやらないかなあ

(ああ、じゃあゲームが好きというよりはキャラが好きなんですね)

キャラ好き。キャラ推し。一応ゲーム自体は買ってます、積みゲーなんですけど。神主へのお布施だね。

3.2.10.3 他ファンへの意識について

同担拒否はないが、「押し付けてくる人」は一貫して嫌いだという。また、自分がやりたいうことをやっているだけなため、自分も誰かに対して「推し」を広めたりなどはないと語っている。

押し付けてくる人はやだな。自分が好きだからってお前も好きになれるのは難しいだろうなって。それがあんなら自分も周りの好みを受け入れなきゃいけないから。そりゃおかしいでしょ。

そもそも、自分の嫁って誰かに推さないでしょ(中略)

(あ、だから押し付けてくる人が嫌いだから、自分もあんまり広めたいって感じにはならないっ

⁵³ 買ったままプレイせず積んであるゲームのこと。

て感じですかね？)

自分に影響されて引っ張られてくるのは良いけど、自分から引っ張ったことはない(中略)自分が手で広げるようなものはしたくない。自分に影響されて自然と広がってくれればいいな。でも東方ってそういうもんだと思うんですよね。神主だって、東方広めようと思って作ってるわけじゃなくて、自分の作ってるものを中心にして、裾野が広がっていけばいいなって ZUN さんも思ってると思うから。実際に影響されてるわけじゃないけど。あの人は作りたいもん作ってるだけだからね。自分だって集めたくて集めてるからね。

「推し」の特別になりたい、「チルノクラスタの代名詞になりたい」という気持ちがあるといい、「自分もうクラスタのトップですよ」「このキャラといえばこの人だよみたいなの、まあ多分上がってくると思うんですけど」とトップである自負を語った。『もちろんそう(「推し」の特別に)になりたいし、自分は特別な存在だと思って活動している。というかほぼ全てのオタクが程度の差はあれそう思っているはず』と資料にも記述している。一方で、クラスタ内で有名になるほど質の高いイラストを書く人や作家など「技術にある人」に嫉妬するという。

(どっかの分野で一位になりたいっていう気持ちはありますか?)

うん。自分もうクラスタのトップですよ、これね。

(確かに。今からやろうと思っても勝てないですね)

そう。でもやっぱりクラスタで有名な絵師さんとか作家さんとかいるから、そういう人がいると、嫉妬じゃないけどやっぱりそれよりも有名になりたいっていうのがあるかなあ。自分は技術がないから集める年月とか量とか。

(嫉妬ではないけど?)

いや、嫉妬かな。もうクラスタの代名詞みたいなになりたいな。このキャラといえばこの人だよみたいなの、まあ多分上がってくると思うんですけど。(中略)技術でやってる人ってのはすごいなって。

(目指すものはイラスト?)

まあ動画だったりもするけれど。要はその、技術のある人。自分で技術を磨いて大きくなった人ってのは、自分はそういうのできないから、やっ、すごいなって思うのと同時に、自分もそう言うふうにはできたらいい、やりたいな、やりたいと思うのになって思うのは嫉妬かな。

技術があってイラストなどをたくさん書いている「自分から湧き出してる人」に対して、自分は「周りの愛を買ってるじゃないけど、周りがいて自分がいるっていう立ち位置の人」なので、「その周りがいなくなったときどうなるんだろうな」という不安や技術がある人への嫉妬もあるという。しかし、「まあでもそのときはそのときだと思って」と割り切っている。

3.2.11 Kさん

Kさんは、第一回インタビュー時 24 才の女性である。ご本人の希望により職業は掲載を控える。

3.2.11.1 「推し」について

Kさんは「推し」として、Kさん自身が務める会社の上司である男女複数人と、「最推し」として男性上司Nを挙げた。

今まで二次元のキャラなどに「推し」と使ってきた文脈がベースにあり、三次元の関係性のなかでも使うようになったと語った。

中学高校のときは『忍たま乱太郎』や『黒子のバスケ』などの夢小説をよく読んでいたという。それは、自分を投影して読むというよりは、自分の理想の女の子を好きなキャラクターと恋愛させるという形だったが、突き詰めてみたら、自分が恋愛したいのかなと考えながら当時も読んでいたと以下のように語った。

普通に、二次元とかアイドルとかに対する好きみたいなのが、中学高校のときは特にだったんだけど、もともと夢小説のオタクだから、私。なんだけど、自分を投影して読むというよりは、自分の理想の女の子のキャラクターを作って、その子とキャラクターが絡んでのを楽しむのが好きだったんだよね。(中略) なんだけど、でも、突き詰めてみたら、それって自分がそのキャラと恋愛したいからになるのかなっていうの考えながら読んでるんだけど、してるしてた。(当時も、実は恋愛したいのかなって思った?)

そうそう。

中高のころは、「推し」ではなく、「嫁(男女ともに)」って言うっており、大学になってから「嫁」から「推し」に変化したという。嫁には自分の隣に立ってほしいというニュアンスがあり恋愛的で、「推し」には「支援したい」、「向こうから認識されない立ち位置でキャーッと言いたい」「コンテンツとして成長してほしい」「まわりに魅力を伝えたい」などの意味の違いがKさんの中ではあるという。これについて、「好きなキャラクターの年齢が(自分よりも)年下になったので、変化したのかも」と、自分の成長とともにこれまで好きだったキャラが年下になり、恋愛的に観られなくなったことを考察している。

働き始めてからは今までの「推し」のように、キャラの「推し」はおらず、アニメや漫画はストーリー全体を楽しむようになったという。

「キャラに「推し」と言っているニュアンスと、リアルの世界に存在する人に対して使う「推し」のニュアンスで、似ている部分はあるか?」という質問については、「わからない」という回答している。「仕事の推したちに対する気持ちは、はじめは尊敬」「仕事すごい真面目にやってらしてるとか、教え方がうまいとか、尊敬っていうファクターっていうのが入る」と語っている通り、「尊敬」がリアルでの「推し」について含まれていることが

うかがえる。

仕事場で、「〇〇さん超推しなんですよ」というように、親しみを込めて、雑談の中で「推し」と使うと語った。

（１）「推し」への恋愛の意識

「いい人だな、という親しみの感情」の延長線が恋愛になるタイプだと自身を考察し、「推し」と呼んでいる時点で親しみの感情があるので、「推しって言ってる人たちも、出会う年齢が違くってとか、シチュエーションが違くってってなったら、好きになってたかなあとは思う、正直」と語っている。

一方で、「恋愛感情をぼんぼん生み出しちゃいけない相手っていうのもあるわけで」と、実際に「推し」が恋愛感情になるわけではないことを強調している。「結婚してて、奥さんや子供さんのこと大事にしててっていうのも含めて、今この現在のそういうご家族を大事にしてるっていうの含めて推しだから。そういう自分が隣に立つみたいなのありえない」と、以下の語りのように例をあげた。

多分、恋愛感情あるかないかって言われたら、ないとは言い切れない。もちろん、親しみの感情でとどまって入るし、恋愛感情にするつもりもないんだけど、この人すごい尊敬できるいい人だっていうの、延長が私恋愛になるタイプだから。が、最推しなわけですよ。（中略）推しって言ってる人たちも、もし、これはもしもの仮の話だけど、出会う年齢が違くってとか、シチュエーションが違くってってなったら、この人なってたかなあとは思う、正直。ただ、たとえば、結婚してて、奥さんや子供さんのこと大事にしててっていうのも含めて、今この現在のそういうご家族を大事にしてるっていうの含めて推しだから。そういう自分が隣に立つみたいなのありえないっていうのは全然ある、そう。（中略）まかり間違っても、あなたの隣に私が立っても幸せにならないですよっていう。多分それも含めて推しっていう言い方になるのかもしれない。嫁だと、自分が隣に立ちたいけど、推しだと、応援みたいな。

これについての「夢小説で理想の女の子を想像するのと似ているか？」という質問に対して、「似ている」と回答している。一方で、「嫁」や「最推し」ならば隣に立ちたいという。「最推しに恋愛感情はある？」かという質問には、「ある」と肯定しており、「恋愛感情が入ってるので、純粋な推しの調査ならノイズが入るかもしれない」とも語っている。このことから、Kさんには、「純粋な推し」には恋愛感情を持つものではないという前提があることがわかる。

上記を受けての「「推し」という言葉を用いて、恋愛感情をごまかしているのか？」という質問には、「ごまかしているというのはある」と回答している。実際、他の女性社員に対しても「最推し」という隠語で話していることについて、「牽制にもなってないだろうけど、牽制なのかもしれない」と語った。

(最推しが嫁に近いから、自分が隣に立ちたいみたいな)

そうそれはね、今話してて思った。なんかすごい、他の女性社員さんと話してると、えっ超いいなみたいな嫉妬みたいな、嫉妬を感じるし。あ、これは、最推しってごまかしてはいるけど、いやこれは好きだな私、みたいな。

(ごまかしてるのは、自分自身をごまかしてる？周りに言ってるの？)

最推しとは言ってる。もちろんそれは、隠語の意味もあるけどね。

(職場の女性社員さんには最推しって言ってるってこと？)

そう、最推しとしか伝えてない人もいるし、最推し=〇〇さんって。牽制にはなってないけど、牽制なのかもしれない、もしかしたら。

職場の一番偉い上司が、「上司と部下」という立場の違う人の恋愛を嫌がるタイプであり、「恋愛感情があることで、最推しに迷惑をかけたくない」や「周りにからかわれるとかも嫌だし、むこうが監督職だから、むこうが悪く言われたり、迷惑かけたくない」という発言をしている。また、傷つきたくないため、恋愛でのダメージをできるだけ小さく抑えたいと語り、最推しからの恋愛的に脈があるような行動も、「上司として優しくしてくれる」からにすぎないと思い込もうとしている節があることを語った。

上述のように、職場という恋愛しにくい場所において、恋愛感情的な気持ちを位置付けるための处世術(営業所の所長が、「上司と部下」という立場の違う人の恋愛を嫌がるタイプ)や、自分の心を守るための方法(傷つきたくないの、恋愛でのダメージをできるだけ小さく抑えたい)としての「最推し」という言葉の使用が見られる。Kさんは「推し」という言葉から発展させた「最推し」という言葉で、周囲に、そして自身に恋愛感情をごまかしていると推測できる。

Kさんの「最推し」の使い方や概念は、対象が、実際リアルに関わる仕事上の上司であるという点で、他の調査対象者と推しの関係とは異なる。その対象について、「推し」という言葉をあえて使うことで、自分が上司のファンであるような、尊敬というファクターだけを強調するような、「好きな人」とは違うニュアンスを醸し出すことができる。このように、戦略的に「推し」という言葉や概念を使う様子が、Kさんの調査からは見ることができた。

(2)「推し」への信仰の意識

「尊さ、宗教みたいなものを感じるか？」という質問について「超ある」と回答している。

仕事中に「最推し」からの電話などを聞くと、尊いと思ったという。「今日も推しが仕事を頑張ってる、みたいな」と語った。

「それは恋愛とは結びつかないのか？」という質問については、「結びつく気がする」と回答した。「でも、恋愛感情となる前からも尊い気持ちはあった」とも語り、信仰と恋愛が複雑で切り離せないことについての困惑がうかがえた。

3.3 「推し」の共通語としての面についての追加調査

第二回のインタビューまでの間に、複数人の調査対象者の多様な「推し」という意識について聞き取った。一方で、I さんが「その言葉一つだけで、括ってしまうっていう感じが、私は好きじゃない感じですね」と批判したように、このような多様な意識が「推し」という一つの言葉で表されてしまうことに疑問を持った。「推し」のこのような面を「共感の文化」と呼び「好きじゃない」と語る I さんも、意味は理解しながらも「推し」という言葉は使わないという J さんも、冗談や Twitter などで大勢に呼びかけるときは「推し」という言葉を使用する様子も見られる。

これらを踏まえ、「推し」という言葉には多様、個々人それぞれの意識が含まれていながら、そのことは「推し」という言葉を使う人に認識されないまま、単に「自分が好きな対象」を指して他者との交流の上での共通語として使われているのではないかと仮説を立てた。以下は、その仮説をふまえて LINE や Twitter の DM など質問した回答である。質問の対象者は、2019 年 11 月までに連絡が取れていた調査対象者である。

(1) 質問内容

推しという言葉は、他のオタクとやりとりするための共通の言葉だと言われたらしくりますか？例えば、Twitter で不特定多数の人に向けて発信するときや、初めて会った（別ジャンルの）オタクの人と話すときなど、「自分の推しは～」って使うことで、話しやすくなる！みたいな……

(2) 回答一覧

・ A さん

推しという言葉についてだけどその認識で使ってるかな～って感じ👉

何かしらのオタクをやってるなら推しって言えばとりあえず分かると思ってる👉

相手に対して推しの話するときは○○って人がいて今推してるんですけど～って説明するかな👉

あと呼び名として推しは使わないで本人の名前使う事が多いな👉なんか推しって言葉はわたしが対象に勝手に付けてる称号みたいなもんだと思ってるから他の人からしたらそいつはその称号を持っていないし

もちろん推しだという気持ちはあるから説明するときには使うけどね！あとわたしはラッパー0の現場で他のオタクにラッパー0の話をしているのを聞かれたくないからとりあえず名前を隠すために推しと呼んでいてそれが染みついているので会話の中で使う推し＝ラッパー0 などところがある…

・ C さん

それはしっくりきますね！相手の界限のことをよく知らなくても、推しはね～って話聞くだけで楽しいですし、自分と共通する感情を見つけると親近感わきます！！

私はやってないですが、若手俳優界限では推しの名前を伏せて、さらには推しが誰だか分からないようにある程度フェイクを混ぜたりしたうえで、推しへの気持ちを書き綴ったはてなブログをつくる……って文化があるので、それくらい「推しへの気持ち・スタンス」ってだけで交流できるもんだな～と思います！

・Dさん

わりとしっくりきます。

わたしの好きな俳優とか好きなアイドルとかキャラクターとか、もはや人間に限らず使えるから便利な言葉だと思います。あと俳優だけじゃない人とかなんて説明していいかわからないけど、めんどくさいから推しって言えば伝わるかなと思います。笑

・Eさん

そうですね、確かにそういう風に使うことはありますね。特にアイドルZさんを知らない人の前ではそうすることが多いです！オタク系の人じゃなくても職場の人間とかも推しって言えば理解してくれるので、割と誰にでも使ってますね！

・Gさん（手書きのメモより）

「①推し」というコトバは、「②他のオタク」とやりとりする「③ため」の「④共通の言葉」である

①「推し」というコトバ

私の場合…フィロソフィーのダンス（グループ）、フィロソフィーのダンス（の個人）（箱推しなので）

「テニプリ」の仁王くん、木手くん（←トップ2）テニプリはキャラが多すぎて推しも増えてしまう

「A3!」の久門くん、三角くん

・グループ名でも、単体（人名）についても使う

・単に人名などの略称として（文字制限のあるTwitter、何度も名が上がってしまう会話、etc…）に使う

②他のオタク

(推しという言葉を使う)

- ・同ジャンルが好きで、内容や人（キャラ）がわかるオタク
- ・同ジャンルが好きで、私の好きな人（キャラ）がわからないオタク
- ・ジャンル知らない別ジャンルのオタク
- ・オタク文化をまあ理解しているが、本人はそうではない人
- ・推しというコトバを理解している非オタク（推しという言葉を使わない、説明後に使う）
- ・推しというコトバを理解していない非オタク

→要するに、様々な「他のオタク」に対して、「推し」というコトバを使う

(それは前述した「略称」としてのいみが強いのかも、頻度的には)

③他のオタクとやりとりするため??

→それも含むが、それだけのためではない

④共通の言葉

ほとんどのオタクは、よっぽどのことがない限り、「推し」という言葉を知っている

そしてよっぽど特別な事情がない限り使っているように見える

→共通の言葉であると言える

(ただし、対象がホストとかだと「担当」って呼ぶよね)

(年代によっては「推し」というコトバを知らないかも??話したことがないのでわからない)

<まとめ>

- ・私は「推し」というコトバを、グループ名にも複数人にも一人に対しても使う
- ・何回もその人名が出てきたりするのを防ぐため/略称として etc に使う（楽だしね〜）
- ・他のオタクに対しても、上記の理由や会話の流れで使う
- ・他のオタクとやり取りする際に、共通言語として使われる。

でもそのためだけに存在しているコトバではない

・主観では（アニメ、ドラマ、アイドル etc において）共通のコトバであると思う。ただし、好きな対象（ホスト＝担当）や年代によってはちがう可能性もある??

・Jさん

相手から「推し」って表現で言われたら「推し」で返すけど、自分からは使わないかな。ただ、共通語として使いやすい言葉なのは理解できる、ってところですかねえ。

別に嫌いってわけじゃないんですよ。そもそも、あまり感情を言葉として表現してこなかったような気がします。話すことを好まないのと関係があるかも。ところで、「尊い」も色々ひっくるめた表現のような…

恐らく、「好きを事細かに表現したい饒舌オタク」と、「好きなんだけど表現力無いからひっくるめた言葉を作って表現するコミュ障オタク」がいて、その間にいくらかの溝があるんじゃないかと

思います

第4章 考察

4.1 「推し」への多様な意識

11名の調査対象者の「推し」としている対象は、大きく分けると、アーティスト（Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん、Hさん、Iさん）や二次元のキャラクター（Fさん、Gさん、Iさん、Jさん）、一般人（Kさん）である。アーティストの中でもアイドルや俳優や作家など、二次元のキャラクターの中でもアイドルや学生など、様々な属性が存在し、背景でも示したとおり、「推し」とされる対象は幅広いことが分かった。Kさんのように、一般人を「推し」と呼ぶ人さえ存在する。

調査対象者は、個々人のそれぞれの琴線に触れるような対象を「推し」としており、当たり前だが、その琴線の触れ方も個々人それぞれである。それは、齋藤（2019）が指摘するように以前「萌え」とも呼ばれていた恋愛感情に近いものや、宗教的な感情由来のものであったりする。今回は、調査対象者の語りを元に、その意識を「恋愛的な意識」「宗教的な意識」「消費者的な意識（「推し」の消費者としての意識）」という3つに分類した。（意識的・無意識的はさておき）インタビューにおいて全ての感情を正確に言語化・分類できているとは言い切れない。あくまでも語りとそこからの分析を踏まえて分類したものであることに留意されたい。

4.1.1 「推し」への恋愛的な意識

恋愛感情がある、「付き合いたい」や「結婚したい」、恋人に近い、性的に意識している、などの語りから、「推し」への恋愛的な意識が見られた。見られたのは、Aさん、Dさん、Eさん、Fさん、Iさん、Jさん、Kさんである。

「感情に見返りがいない」という点で、「推し」を「理想の恋人像」としている調査対象者が見られた。Eさんが、「強い感情を向けても平気。すごいこう、割とそのメンヘラっぽいところもあるので、そういう部分とかを、多分アイドルが一番こう、受け皿になってたんですね。（中略）見返りがいないんですよ、感情に対して」と語ることや、Aさんが恋愛がうまく行かないことについて、「推しへの好意って絶対返ってこないのがわかってるけど、恋人は返ってくるから、わからなくなっちゃう」と語っていることが代表例である。Aさん、Eさんは恋愛に「見返りが存在する」ことで過去の恋愛がうまくいかなかったライフストーリーがある。また、「誰かと一緒に住むのが好きじゃないから」結婚願望がないというJさんにとっても、一緒に住むことは絶対になくチルノという概念（なりきりの「中の人」とは実際に一緒に住んだことがあるので「概念」とする）は「理想の恋人像」となる。Kさんが「推し」について「推しって言ってる人たちも、出会う年齢が違くってとか、シチュエーションが違くってってなったら、好きになってたかもなあと思う、正直」という語りや、「最推し」についての「隣に立ちたい」という語りからも、この「理想の恋人像」としての側面が伺える。恋愛に感じるネガティブな面を取り払った「理想の恋人像」としての「推し」としての側面が、すべての人にではないが、「推し」への恋愛的な意識に影響していることが示唆された。

4.1.2 「推し」への宗教的な意識

「推し」に信仰心を持っている、「推し」は神だと思っている、「推し」教だと思っている、信者である、従来の宗教と「推し」は変わらないだろう、などの語りから、「推し」への宗教的な意識が見られた。

「尊敬」「生きがい」などの想いと、信仰や宗教の意識の結びつきが強いことが示唆された。宗教的な意識については、Aさん、Bさん、Eさん、Fさん、Gさん、Iさん、Jさん、Kさんが語っており、その中で「尊敬」「生きがい」について言及していないのはBさんとFさんだけである。例えば、Aさんの仕事のストレスで「推し」を推すことだけが「生きがいだった」ということ、Eさんが自分が目指していたアイドル像にアイドルZを据え「(自分と比べて) 一歩立ち入ったっていうのがすごい尊敬するなって思って」と尊敬の念を向けること、Hさんが精神的にしんどさを感じていた休職中に「推し」に出会って感動し、「(努力が苦手な自分に対して) 努力を続けられるアイドルはすごい」と尊敬すること、Iさんの「この人には絶対かなわないな」と作家Lを尊敬していること、Jさんがチルノグッズを集めることを「なんか人生の一部だね。どこまでやっていくのかわからないけど、行き着くところまで行ってみよう」と人生と結びつけていること、Kさんが「「推し」には尊敬っていうファクターっていうのが入る」と語ること、などである。

4.1.3 「推し」に対する消費者としての意識

「推し」がアーティストならば「推し」の作り出す作品を楽しんでいる、「推し」が含まれるコンテンツ自体を楽しんでいる、などの語りから、「推し」に対する消費者としての意識が見られた。

従来のファン文脈に一番近い意識だと考えられる。「推し」を恋人や神などのなにかしらの代理と捉えるのではなく、あくまでもアーティストや作品の中の一部分という現実をそのまま受け取ろうとする姿勢がある。例えば、Cさんが「つまらない」と思う公演を観に行くのは苦痛であり、この苦痛を感じている状態で「推し」とするのは自分の向き合い方と違う、という旨を語るように、あくまでも「素晴らしい公演」あつての「推し」であるという意識のことである。また、EさんがアイドルZに対して、「全ての感情をぶつけてる感じです」と強い感情があることを示す一方で、「推し」に求めていることは「アイドルとして成功して欲しい」と、あくまでも「アイドル」であると強調することからもうかがえる。

この意識はほぼ当たり前で前提であるという意識であると考えられ、ほぼ全ての調査対象者に見られた。「推し」のどこが好きか、という質問に対して答える際に特に顕著に見られる。ほとんどの調査対象者も、アイドルなら「ダンス」「顔」「歌」、俳優なら「演技」などその「推し」の本業である部分を答えている。Kさんも上司を「推し」とする基準は「仕事ぶり」だと答えている。上司は消費するものではないが、Kさんの「推し」の使い方は通常の「推し」の文脈を流用している部分があるため、ここでは形式上、消費者としての意識であるとする。「推し」に対する消費者としての意識は、「自己」と「推し」との間に一定

の壁を作るものであり、「推し」を「推し」たらしめている重要な意識であると考えられる。

これらはお互いに排反なわけではなく、両立したり、包含していたり、状況によって変わることがある。例えば、DさんがLINEでの追加調査で「基本的には認知うんぬんよりもその演技がお芝居が好きだからチケットを買い足しているのだと思います。ただ、小劇場の推しには「終演後に会える」からという気持ちが無きにしもあらずなのところもあります」と語るように、他の「推し」の現場に行くのはあくまでも「お芝居が好きだから」と消費者的な意識を向けていても、俳優 X（小劇場の推し）には恋愛的な意識を向けているようにである。

また、疑似恋愛・疑似宗教のような、「あえて恋愛のふりをする」「あえて宗教のレッテルを貼る」様子も見られた。Dさんは俳優 X について恋愛感情を持っていると語りつつも、「恋に仕立て上げてるところもあります、若干」と語っている。Iさんは作家 L に対する信仰に近い感情は確実に認めつつも、「推しを推すこと」に大仰に宗教というレッテルを貼って冗談交じりに話す面もあることを語った。このように「推し」への本来の感情（だと調査対象者が語った感情）と、建前や冗談のようなものが入り交じる意識も「推し」には向けることができる。

以上のことから、「推し」という対象に向ける意識について、「恋愛」「宗教」「消費者的」に分類できる調査対象者それぞれの意識を持っており、状況や対象によっても変化することが明らかになった。そして、調査対象者の持つ意識は、それぞれのライフストーリーから生じていることがある程度示唆された。

4.2 合理化装置としての「推し」

4.2.1 共通語としての「推し」

前述のように、「推し」には多様な意識(意味付け)が含まれており、それは人それぞれである。友人である Aさんと Bさんでさえ、Aさんが語る「推し」の意識と、Bさんが語る「推し」の意識は違う。それでも、Aさんと Bさんの話が通じるのは、対象を「推し」とさえ呼べば、特に自身の意識を詳しく説明しなくても言いたいことが伝わるように感じるからである。これは Iさんが「共感の文化」と批判した「萌え」や「推し」の使い方と近いものがある。この共通語としての「推し」の使い方については、3.3 でまとめたように、多くの調査対象者が同意している。

共通語としての「推し」には2つの特徴が見られた。

1つ目は、「推し」への意識が違う人同士が話すとき、話し手の「推し」への意識を、受け手は自身が納得しやすいような形で理解することができることが挙げられる。「推し」という言葉を使うとき、話し手は「推し」という対象に対してどの感情を持っているのかをあえて明言しないでもいい。明言されていないので、受け手は「琴線に触れる好きなもの（方向性）」以外の感情は自分の解釈通りに受け取れる。例えば、「推し」に対して宗教的な感

情が強い人（話し手）から、「推し」に対して消費者的な感情が強い人（受け手）に向かって「推し」という言葉が使われるとき、「推し」という言葉に乗っている感情は宗教的→消費者的に変化する。この特徴があるために、「推し」に関して自己流のスタンスがある人たち同士でも、付き合いが短かったり、些細な違いであれば仲良くすることができる。一方で、自分の「推し」への意識と他者の「推し」への意識が食い違った際に憤りや違和感を覚えるケースもある。例えば、Bさんが「推し」へのガチ恋は「寒い」と批判することや、Eさんが「握手会での対応が良かったから「推し」にする」という人を許せないことなどが挙げられる。これらのネガティブな印象は、他者と自分は「推し」への意識が同じだという前提や期待が裏切られることによって生じた印象であると考えられる。「推し」への意識が多種多様であるということに納得していれば、「解釈違い」と呼ばれるような憤りは起こらない。このことから、他者の「推し」への意識を、受け手は自己の納得や理解のしやすいように解釈していることが分かる。

2つ目は、状況によって、自分の本来の「推し」への意識を隠しながら、「推し」に含まれる様々な他の意識を（自分の中に実際にある、ないにかかわらず）利用することができるということである。例えば、Kさんが、職場という恋愛しにくい場所での处世術や、自分の心を守るための方法として「最推し」という言葉を使ったことが挙げられる。この場合、Kさんは、「推し」という言葉を用いることで、「推し」という言葉が持つ、「推し」の消費者としての意識を他者に見せることができる。結果として、「推し」への恋愛の意識は、他者にも、そして自己にも隠すことができた。一方で、他の女性社員に「最推し」という言葉を使うことについて、「牽制にもなってないだろうけど、牽制なのかもしれない」とも語っている。このように、Kさんが「牽制したい」と考えたとき、「推し」への恋愛の意識も見せることができる。これは、恋愛や宗教の意識を見せたいときに見せるという、前述の疑似恋愛や疑似宗教にも通じるところがある。「推し」という言葉の中に多様な意識が含まれているため、見せたい意識を状況によって変化させられるということが、共通語としての「推し」のもう一つの特徴であると言える。

4.2.2 合理化装置としての「推し」

共通語としての「推し」は、消費行動の合理化にも利用することができる。自己が行った「推し」にかかわる消費行動は、その動機を誰に説明するわけではない。したがって、その行われた消費行動は、それを見た各々が納得しやすいように動機を解釈（意味づけ）することができる。すなわち、合理化（正当化のための意味付け）できると言える。場合によっては、消費行動を行った本人に対してさえも、その消費行動の正当性を高めることができる。「推し」には、このような消費行動の合理化装置としての機能があると考えられる。

例えば、自身は「推し」に信仰の意識を向けていないというCさんが、Aさんの行動を見て、「信仰」だと語っていることが挙げられる。これは、「貢ぎ」とは「自分を削る行為」として、「貢」という文化にネガティブなイメージのあるCさんが、友人のAさんの消費行動について、信仰であれば正当だと自身の中で合理化していると考えられる。一方で

Bさんは、Aさんの「貢」を見て、「別に知り合いにプレゼントあげてるのと変わらないっ—か」「お祝いなんで、ただの」と語っており、「お祝い」だから正当であると合理化している。誰がどのような動機で「推し」へ消費行動を行っていても、それを見た人は独自に納得しやすいように合理化できるという様子が見られる。

また、自身の消費行動の正当性を高めるとして、Aさんの例が挙げられる。Aさんは、佐々木崇への貢について振り返り、第二回インタビューでは「当時は本人のためって思ってたけど、あれは他オタクへのマウントだった」、LINEでの追加調査では「自傷行為だった」と振り返っている。仮に現在の反省が本音だとするならば、当時は、「本人のため」ということで「推し」への消費行動を合理化（正当化のための意味付け）していたと言える。もちろん、当時のAさんの中には確実に「本人のため」という気持ちは存在していただろうし、現在反省するように「他オタクへのマウント」や「自傷行為」であったことも間違いない。これらの2つの動機は同時に存在しうるし、実際の動機は様々な気持ちの複合的なものであったと考えられる。重要なのは、実際にAさんが当時を振り返って消費行動の動機は「本人のため」だと語ったことである。また、当時を振り返って、Aさんはこの「推し」への貢を「生きがい」とも表現しており、信仰とも近いものであったと語っている。しかし、仕事を変えたことで当時よりも精神的な負担が軽くなったAさんは「生きがい」の面についての必要性が低くなった。かつ、Aさんは両親の宗教への反発という、宗教や信仰にかかわるネガティブなライフストーリーを持っている。現在のAさんにとって、信仰的な意識から消費行動を行ってしまったことは、当時よりも非合理に感じられるのだと推測できる。したがって、現在は「他者へのマウント」や「自傷行為」の面を押し出して、自分自身が行った「推し」への消費行動の非合理性を合理化していると考えられる。

以上のように、「推し」には、信仰的・恋愛・消費者的と様々な意識を持つことが認められているために、自己・他者の行う消費行動を合理化することのできる「合理化装置」という一面があると言える。

4.3 「推し」にかかわる消費行動の合理化

4.3.1 「推し」にかかわる消費行動の動機の分類

調査中に見られた「推し」にかかわる消費行動の動機について、語りをもとに以下のように分類した。一つの消費行動に対して2つの動機がある場合は、(→喜ばせたい) というように、(→○○) で同時に存在する別の分類先を示す。

◆ 喜ばせたい (悲しませたくない)

「推し」を喜ばせたい、もしくは悲しませたくないという語りをもとに分類した。

Bさん

脱退イベントの練り香水：「脱退してもメンバーみんなで同じものを持っていてほしくて」

Cさん

お肉のカタログギフト（俳優P）：「食べるのが大好きなので」

演劇、ミュージカルのDVD（俳優P）：「ツイッターを見て、「趣味が私と近いのかな？」と思って

Dさん

プレゼント：「ほかの人と違うものあげたいというのはわりと常にあります。それは推しに対して自分を印象付けたいという意味では根底では認知を求めているのかもしれませんが。

（→認知）かといってすごい高価な物をあげたりみたいなことは今までしたことないので（できない、とも言える）、とりあえず喜んでもらえるものをあげたいなあと物を選んでるんだと思います」

Eさん

アイドルZちゃんのグッズ：「あんまりグッズには執着がなくて、でも買った方がいいかなって、売り切れてる方がいいかなって、少しでもって。欲しくて買った感じではない、欲しくて買ったものもなかにはありますけど」

握手会：「本当に、いうと、別に推しと握手しなくてもいいんですけど、推しの握手のレーンがガラガラだったら悲しいなって思ったりもするので、行ける日は行こうかなって。チェキも、全然並ばなかったらどうしようとか、本当に推しの人気がそんなになかったのも、他の同期に比べて並んでる量が少なかったら悲しいので。行ったりとか」

◆ お祝い

「推し」にかかわる消費行動について、お祝いであるという語りをもとに分類した。

Aさん

フラワースタンド（ラッパーO）：「そこにあるだけで華やかになるじゃん。なんかまあ、その推しのワンマンとかでさ、やっぱ、多分自分自身もすごい不安だったりプレッシャーだったりどうしようって思ってるかもしれないけどさ、ファンから花が届くだけでもう少しは不安が薄れるかなっていう感覚はある。頑張ってくれって」

Cさん

フラワースタンド（俳優Q）：「（有名な俳優が出るような劇で）主演をやるとかすごい。俳優Qくんを知らない人にこういう花が送られるような子なんだと思われたい（→評価を上げたい）のとおめでたいの気持ち」

Gさん

生誕祭でのプレゼント：「お誕生日だからお祝いしたいという気持ち、友だちに選ぶ感覚」

◆ 感謝

「推し」にかかわる消費行動について、感謝を示すものであるという語りをもとに分類した。

Jさん

グッズを集めること：「貢ぎだとしたら、その、なんだ、クラスタに対して貢いでいる。ま、自分が買うとそのサークルが儲かるじゃないですか。それでまた、新しいのを作ってくれて、それをまた自分が買えばそりゃ儲かるじゃないですか。そうやって増えていけばいいなって。（→クラスタの盛り上げ）作ってくれてありがとうみたいなね。周りが作ってくれないと、こっちは成り立たないんですよ。（中略）周りに作ってくれる人がいて、はじめて自分の存在がある。自分のアイデンティティがある。（→アイデンティティ）」

Fさん

映画、コラボカフェ、ソシャゲなどのコンテンツ：「次回作につながるかもしれないみたいな。今後の期待。あと今までありがとう」

◆ 認知

「推し」にかかわる消費行動について、「推し」に顔や名前を覚えてもらうためだった、「認知」のためだという語りをもとに分類した。

Aさん

チケットを買う、現場に行くこと：「頻繁に行く事で認知されたいという思いはどの現場においてもバリバリにあります！！現場に行く事が自分にとっての正義なので相手にとって現場にいつもいる人～という認知の仕方をされるの一番嬉しいしなんなら認知されたいので最初の頃意識的に多めに通ったりする」

（佐々木崇）プレゼント：認知されたいとプレゼントを送ることが多かった

Cさん

現場に行くこと、プレゼント：「俳優Pくんの場合は、デビューと同時に認知されたみたいなものなので、認知目的で通うみたいな感覚は薄いのですか、俳優Qくんは自分が後発のオタクだっていう自覚があるし、蜷川さんが存命の時から応援してる濃いオタクの中で、新規だけどちゃんと応援してるんだよ～～っていうのをアピールするためにはとにかく通わなきゃ……！って気持ちはあります」

Dさん

プレゼント：「ほかの人と違うものあげたいというのはわりと常にあります。それは推しに対して自分を印象付けたいという意味では根底では認知を求めているのかもしれませんが。かといってすごい高価な物をあげたりみたいなことは今までしたことないので(できない、とも言える)、とりあえず喜んでもらえるものをあげたいなあ(→喜ばせたい)と思って物を選んでるんだと思います」

◆ 面会や出待ちの言い訳

「推し」にかかわる消費行動について、面会や出待ちなどに対する罪悪感や緊張を緩和させるためのものだったという語りをもとに分類した。

Cさん

(俳優 Q) 面会に持っていく差し入れ：「新規になった途端、何も持たずに面会いかないのが不安だった。渡したいから待ってるんですよってできる」

Dさん

(俳優 S) 差し入れ：俳優 S さんの出待ちをするときは、なんか、犯罪じゃないんですけど、悪いことをした気分になるから、絶対に貢物を持っていかないと出待ちしちゃいけないっていうのを、勝手にマイルールにしている。

(俳優 X) 差し入れ：「面会のときに手ぶらで行くのが申し訳ないですよ」

◆ コンテンツへの対価

「推し」にかかわる消費行動について、「推し」の作り出すコンテンツや「推し」の含まれるコンテンツを自身が楽しむためだという語りをもとに分類した。

Bさん

ライブに行くこと：貢ぎという気持ちはなく、ライブは自分が楽しみたいくで行く

Dさん

「推し」への消費行動全般について：「私が楽しむためのお金だから」

舞台のチケット (LINE より)：「基本的には認知うんぬんよりもその演技がお芝居が好きだからチケットを買い足しているのだと思います。ただ、小劇場の推しには「終演後に会える」という気持ちが無きにしもあらずなのところもあります(→認知)。それでも観ていてしんどい(作品がくそつまらないとか、上演時間がすごく長いとか)ものに関しては買い足さないこともあるので、認知よりもパフォーマンスなのかなって思います」

Gさん

CD の複数購入：「結構お得だし、普通にいつものグッズを払うよりも、若干囲みがお得だったんですよ。オリコンのランキングにも繋がるし、予約することでその店に入荷する枚

数が増えるから（→評価を上げたい）」

Hさん

アプリゲームへの課金：マイナーなゲームを布教したり、終わらないためにお金をかけたりはしない。自分が楽しむために課金している

Iさん

公式コンテンツ、グッズ、同人作品：「お金を使うことの喜びはそんなにないんですね。というよりは、いいジャンルだから買わなきゃならないっていう感じなので。お金を使うからっていう感覚はそんなにない」

映画に複数回行くこと：何度見ても面白かったこと、週替りでもらえる作家Lが書いた小冊子がほしかったことと、劇中の様々なこと（映画内でのセリフや、登場する名刺の内容、電柱に書いてある文字など）をメモしたかった（→自己の達成感）

◆ 自己満足

「推し」にかかわる消費行動について、達成感や自己満足であるという語りをもとに分類した。

Cさん

ブロマイド：「本人にバックが行くらしいから。（→生活を豊かにしたい）応援しているからな、態度で示したぞという達成感」

Iさん

映画に複数回行くこと：何度見ても面白かったこと（→コンテンツの対価）、週替りでもらえる作家Lが書いた小冊子がほしかったことと（→コンテンツの対価）、劇中の様々なこと（映画内でのセリフや、登場する名刺の内容、電柱に書いてある文字など）をメモしたかった

◆ 自傷行為

「推し」にかかわる消費行動について、自傷行為であるという語りをもとに分類した。

Aさん

（佐々木崇）プレゼント：「昔は正直今より金あったし仕事忙しくてそれくらいしか楽しみなかったからプレで金使って発散してたところもあるな…㊦笑」「正直たかしちゃん推してた頃仕事と上司のセクハラで多分一番病んでて多分自傷に近い形だったと思う〜！」

◆ 豊かにするため

「推し」にかかわる消費行動について、「推し」の生活を豊かにしたい、「推し」に金銭面でのメリットがあるなどの語りをもとに分類した。

Aさん

ブランド物（ネクタイピン、ネクタイなど）（ラッパーO）：「生活の足しになれば、豊かになっていただきたい」生活の水準をあげてほしい

Cさん

ブロマイド：「本人にバックが行くらしいから。（→生活を豊かにしたい）応援しているからな、態度で示したぞという達成感」

Dさん

ブロマイド、缶バッジ：「個人グッズだったら、バックが行くんじゃないかなあ。ま、自分の劇団だったら意味ないですけど、他の客演とかだったら、うん、ああこの人こんなに客呼べるんだ、じゃ次も使うっていう風に（→評価を上げたい）」

◆ 評価を上げるため

「推し」にかかわる消費行動について、「推し」の評価を上げるためだという語りをもとに分類した。

Cさん

フラワースタンド（俳優Q）：「（有名な俳優が出るような劇で）主演をやるとかすごい。俳優Qくんを知らない人にこういう花が送られるような子なんだ思われたいのと、おめでたいの気持ち（→お祝い）」

ブロマイド：ブロマイドこんなに何枚も売れたというのは、推しの評価につながるから

Dさん

缶バッジ（俳優R）：「個人グッズだったら、バックが行くんじゃないかなあ。（→生活を豊かにしたい）ま、自分の劇団だったら意味ないですけど、他の客演とかだったら、うん、ああこの人こんなに客呼べるんだ、じゃ次も使うっていう風に」

Eさん

グッズ：「グッズは、アイドルZちゃんにとって、プラスになるグッズは買っていました。買うことで、評価が上がるようなグッズ。生写真とか、カラーの、アイドルZちゃんのメンバーカラーの」

Gさん

リイベに参加するためのCDの複数購入：「結構お得だし、普通にいつものグッズを払うよりも、若干囲みがお得だったんですよ（→コンテンツの対価）。オリコンのランキングに

も繋がるし、予約することでその店に入荷する枚数が増えるから」

◆ クラスタの盛り上げ

「推し」にかかわる消費行動について、同じ「推し」を推すファンクラスタ全般が盛り上がって欲しい、盛り上げたいという語りをもとに分類した。

I さん

コンテンツ全般：「ジャンル全体に対して、あ、キャラとかに関してというよりは、ジャンル全体に対しての貢ぎっていうイメージです（自分の使ったお金が巡り巡ってそのジャンルを盛り上げてほしいなって感じですか？）はい、ですね」

J さん

グッズを集めること：「貢ぎだとしたら、その、なんだ、クラスタに対して貢いでいる。ま、自分が買うとそのサークルが儲かるじゃないですか。それでまた、新しいのを作ってくれて、それをまた自分が買えばそりゃ儲かるじゃないですか。そうやって増えていけばいいなって。作ってくれてありがとうみたいだね。（→感謝）周りが作ってくれないと、こっちは成り立たないんですよ。（中略）周りに作ってくれる人がいて、はじめて自分の存在がある。自分のアイデンティティ（→アイデンティティ）がある」

◆ コンテンツの存続

「推し」にかかわる消費行動について、「推し」の作り出すコンテンツや、「推し」の含まれるコンテンツを存続させるためだという語りをもとに分類した。

B さん

ライブに行く：「アイドルになってくるとちょっと微妙で。地下アイドルとかだと、やっぱり、リアルにファンが少なかったりするの。やっぱりここ行かないとみたいな使命感みたいなのも出てきちゃうんですけど。なんかでもそうなってくると、ちょっと、本当は違うなというところがあって。自分が好きだから行く、楽しいから行くっていうのが多分私は、美しいというか、正しいというか、と思って」

C さん

劇団 a への寄付：「奴（社長）はすごい嫌いで、でも劇団は好きで、推しはもっと好きで。で、我慢してやってる」「なくなるまでは、やれることは全部やろうって」

F さん

ソシャゲの定額課金：「ガチャが回したいとか、イベントをクリアしたいとかじゃなくて」「継続してほしいので、コンテンツが」

◆ 他のファンとの競争

「推し」にかかわる消費行動について、同じ「推し」を推す他ファンとの競争のためだという語りをもとに分類した。

Aさん

プレゼント（佐々木崇）：「毎回現場ごとにもらったものをツイッターに投稿する人でそれを見て他の知らんオタクの高額プレ写ったりするとめっちゃくちゃ対抗心燃やしてしまい最終的に高額プレばっか渡すようになってた…。その後まあ結婚してブロマイド燃やしたりしたが即ドタマに推し変して同じようにプレとか手紙渡してるうちにふとあれは見えな敵と戦うのに推しを利用してめっちゃくちゃダメなオタクだったから考え改めるべきではと反省して以来あんまり物あげたり手紙書いたりしなくなった☹️」「当時は本人のためって（→喜ばせたい）思ってたけど、あれは他オタクへのマウントだった」

現場に通うこと：「現場至上主義（→アイデンティティ（美学）」、「現場にたくさん行くオタクが一番偉い」

Cさん

現場へ行く回数（俳優P）：苦手な同担よりも現場に行きたい

現場へ行く回数（俳優Q）：古参の濃い同担よりも現場に行き応援していることをアピールしたい

Jさん

グッズを集めること：「でもやっぱりクラスタで有名な絵師さんとか作家さんとかいるから、そう言う人がいると、嫉妬じゃないけどやっぱそれよりも有名になりたいってのがあるかなあ。自分は技術がないから集める年月とか量とか」

◆ アイデンティティ（美学）

「推し」にかかわる消費行動について、自己の美学に基づいているため、自己のアイデンティティの確立のためだという語りをもとに分類した。

Aさん

現場に通うこと：「現場至上主義」、「現場にたくさん行くオタクが一番偉い（→他ファンとの競争）」

Jさん

グッズを集めること：「貢ぎだとしたら、その、なんだ、クラスタに対して貢いでいる。ま、自分が買うとそのサークルが儲かるじゃないですか。それでまた、新しいのを作ってくれて、それをまた自分が買えばそりゃ儲かるじゃないですか。そうやって増えていけばいいなって。（→クラスタの盛り上げ）作ってくれてありがとうみたいなね（→感謝）。周りが

作ってくれないと、こっちは成り立たないんですよ。(中略)周りに作ってくれる人がいて、はじめて自分の存在がある。自分のアイデンティティがある」

◆ 人生の楽しみ

「推し」にかかわる消費行動について、自己の人生を楽しむためのものであるという語りをもとに分類した。

Dさん

脱毛や現場に会いに行くこと(俳優X):「恋に仕立て上げてるところもあります、若干(中略)楽しく生きるための言い訳を探している」

Jさん

グッズを集めること:「これやってる理由のひとつにこれ自分突き抜けたらどこまで行くんだろう。そこまでやってる人ってあんまりいないから、もうずっとしてった先に自分どうなるだろう。それを自分自身で試してみたい。推し続けて、何が待ってるんだろう(結構その、希望を持っています?)希望かな、一応(中略)なんか人生の一部だね。どこまでやっていくのかわからないけど、行き着くところまで行ってみよう」

4.3.2 「推し」にかかわる消費行動の動機のマトリクス

前述のように分類した消費行動の動機を、利他的・利己的動機の縦軸と、短期的・長期的メリットの横軸からなるマトリクスに配置して分析した。

マトリクスは以下のようなになる。

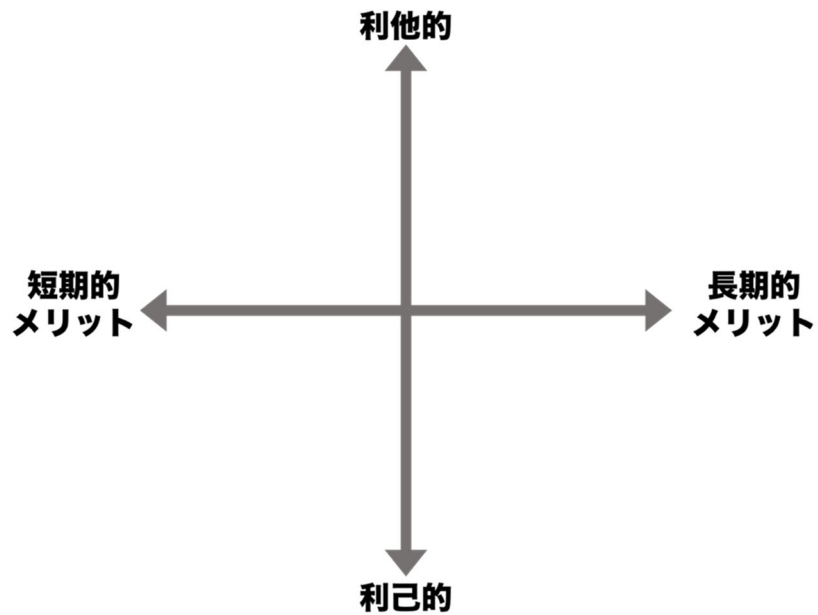


図 13 消費行動の動機のマトリクス（軸のみ）

利他的とは、「推し」や同じ「推し」を推す他ファンなど、消費行動の動機の対象がどちらかといえば他者に向いていることである。反対に、利己的とは、行動としては「推し」にかかわる消費行動であっても、動機はどちらかといえば自己のためであるというように、自己を対象としたものである。

短期的メリットとは、その消費行動を行うメリットが、その一瞬や近い未来に受け取れるものである。反対に、長期的メリットとは、その消費行動を行うメリットが、一瞬では受け取れずにある程度長い時間がかかったり、何度も行う必要のあるものである。

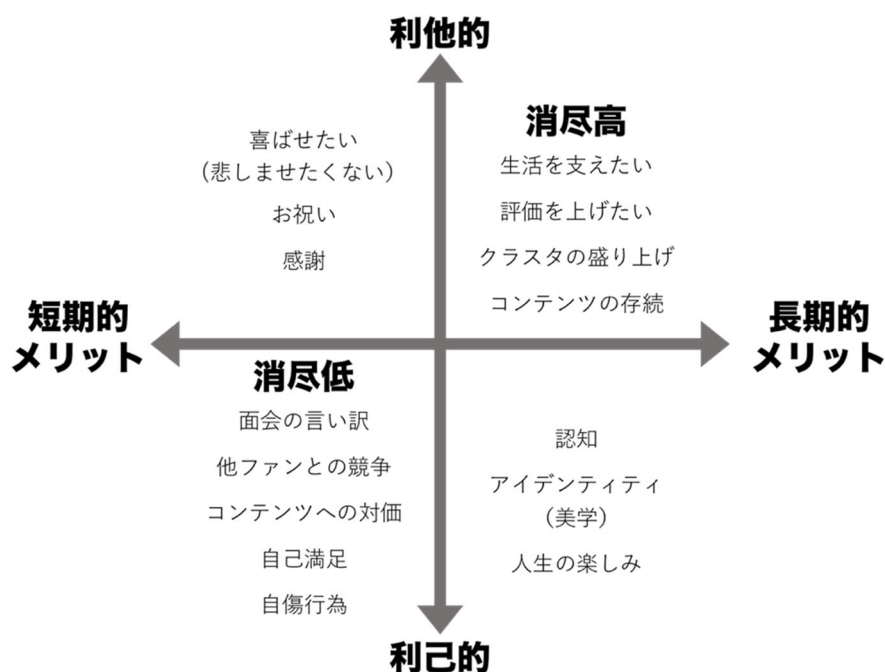


図 14 消費行動の動機のマトリクス

図 13 のように、両軸を配置したマトリクスに、分類した消費行動を配置したものが図 14 となる。

両軸で表すものはグラデーション的に変化するもので、分類された動機が常にその象限に存在しているわけではないことに留意されたい。

4.3.2.1 バタイユの消尽概念とのつながり

分類した消費行動の動機を、バタイユの消尽概念で考察するため、マトリクスに消尽との関連性を表記した。マトリクスで表した「消尽高」とは、バタイユの言う消尽が一番高く現れるところである。一方で、「消尽低」とは、バタイユの言う消尽が一番低く現れるところである。

消尽とは、「その活動自体のうちにのみ目的性を見出すということ」「生産された富や財を＜費やす＞ことが、そのこと自体において価値を持つ仕方を使い尽くすこと」という意味である。バタイユは有用性というものによって正当化されないものを享受することこそ至高性があると評価し、常に有用性に隷属している人間は、非生産的な消尽を行うことで至高性を回復するとした。

有用性の高い消費は、バタイユの消尽と正反対に位置する。マトリクスでは、利己的×短期的メリットの象限が有用性の高い消費に近い。なぜなら、お金をかけた瞬間に想定したメリットを自分で享受できることは、費用対効果が推定しやすく、目的合理的であると言えるからである。

一方で、利他的×長期的メリットの象限は、バタイユの言いたかった消尽に近い位置にあるといえる。なぜなら、本当に対象のためになったのかを自分だけで判断することは難

しく、さらに、その享受できるかもわからないメリットが自己の実感までたどり着くのは未来のことになるからだ。このようなお金のかけ方は、一種の賭けにも近く、費用対効果が想定しにくく、目的合理性が低い。結果的に、お金をかけること「そのこと自体において価値を持つ」消費となってくる。

以上のように、目的合理性という観点から、利他的×長期的メリットの象限が消尽性が一番高く、利己的×短期的メリットの象限が消尽性が一番低いと考えられる。

4.3.2.2 バランスをとるための合理化

目的合理性が高い利己的×短期的メリットを基本スタンスとする人でも、目的合理性が過度に高い消費を行った場合は、目的合理性が低い利他的×長期的メリットのある動機を語って合理化する様子が見られた。例えば、「(「推し」にかけられるお金は)自分が楽しむため」という H さんが、CD を大量に買った際「オリコンのランキングにも繋がるし、予約することでその店に入荷する枚数が増えるから (「推し」の評価が上がるから)」と語るようにである。

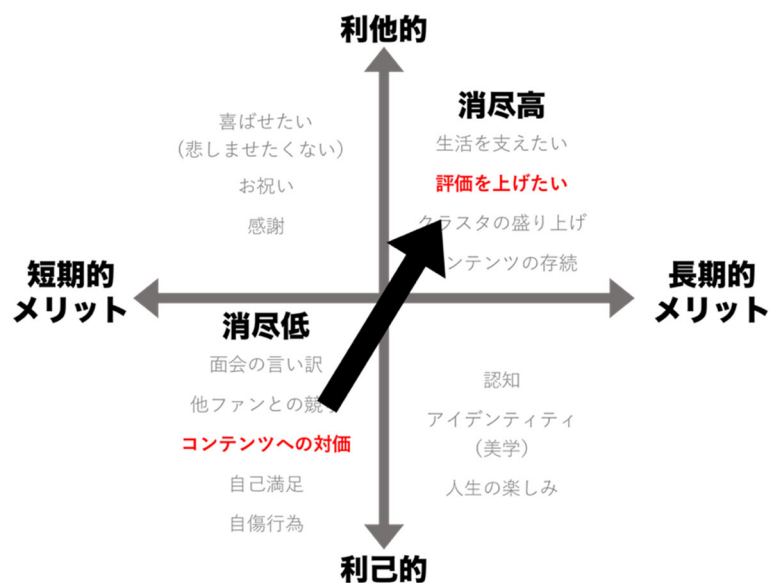


図 15 G さんの合理化の例

また、その逆の、利他的×長期的メリットを基本スタンスとする人でも、目的合理性から大きく逸脱した消費を行った場合は、利己的×短期的メリットのある動機を語って合理化する様子も見られる。例えば、劇団 a に多額の寄付をしたことについて「やれることは全部やろうって。なんか推しのため、ですね」という C さんが、(その寄付金のお礼である) DVD やゲネプロを観る権利は欲しかったという旨を語るようにである。

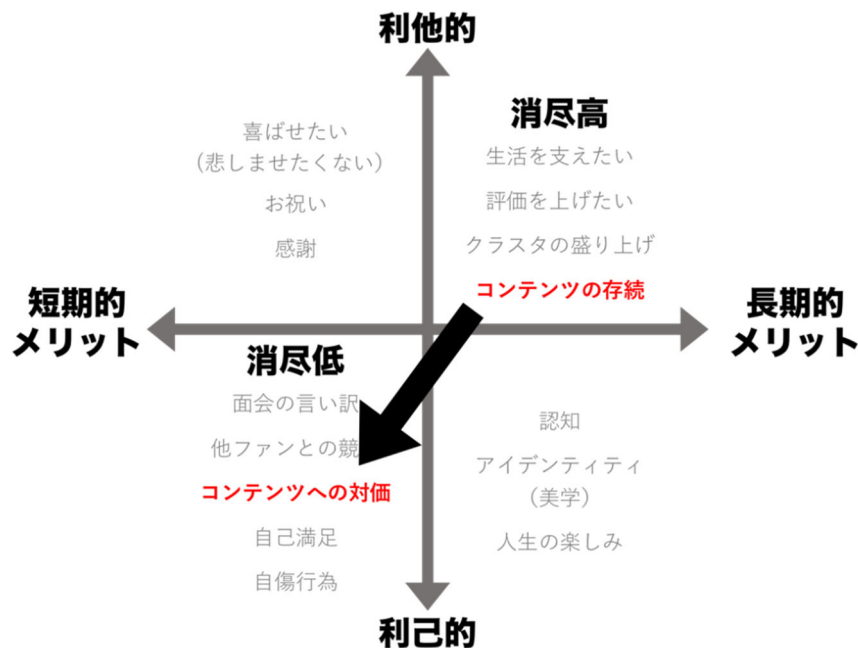


図 16 Cさんの合理化の例

このように、前述の合理化装置によって、本来の自身の基本スタンスを仮に「本音」と名付ければ、それとは離れる動機を「建前」として使用している様子が見られる。これは、利己的×短期的メリットな動機が強すぎると「推し」への愛が十分でないと思われたり、利他的×長期的メリットな動機が強すぎると妄信的や宗教的だとネガティブに評価されたりすることを回避するためだと考えられる。前者は、Eさんが、「オタクって自分勝手」と言ったり、「推し」に恋愛という生産性を求めること（消尽性の低いこと）を嫌うこと、後者は、Cさんが「オタクって気持ち悪いから、気持ち悪がらせてごめんなさいっていう気持ちで、お金を出したいのに、お金を出せば出すほど気持ち悪い」と語ることからも伺える。そして、このようにして消尽低⇄消尽高の両極に振り切れないようバランスを取って合理化するのは、他者の目線を気にしているだけではなく、自己がその消費行動について正当性を高めるための方法でもあると考えられる。

以上のように、「推し」という言葉を使う人は、状況に合わせて「本音」や「建前」を曖昧にしながら、消尽低⇄消尽高のどちらかの極に振り切れないよう、バランスをとっていることが示唆された。

第5章 結論

5.1 結論

本研究では、「推し」という言葉を使う個々人それぞれの「推し」に対する意識の違いと、その意識から生じる、「推し」にかかわる消費行動の合理化（行為の正当化のための意味付け）の仕組みについて迫った。その結果、以下の3点が明らかになった。

- ① 「推し」に対する意識は恋愛・的、宗教・的、消費・的に分けられる多様な意識が混合しており、それは各々のライフストーリーから生じている可能性があること。
- ② 「推し」という言葉に多様な意識が混合するために、共通語および合理化装置として使用できること。
- ③ 「推し」にかかわる消費行動の動機は、消尽性 VS 目的合理性という観点から二極に分けられる。②の合理化装置を用いて、双方の立場を合理化によって行き来してバランスをとり、消尽性（目的合理性）が高すぎたり低すぎたりする消費行動を合理化していること。また、それは自己および他者を納得させるための意味づけであるということ。

5.2 今後の課題

本研究は、仮説生成的アプローチに基づく質的調査を採用している。本研究で得られた知見をより確かなものとするためには、量的研究と合わせ複合的に論じる必要があると考えられる。

また、本研究では、二次元に存在するキャラクターも三次元に実際に存在する人物でも、同じ「推し」として考察した。しかし、同じ「推し」という言葉を使っても、あまりに対象の性質が違う場合、同じ条件では語れない可能性がある。「推し」とする対象については、もっと細やかな分類をした後に、分類ごとに相違点や類似点を調査することが必要であろう。

さらに、今回結論の①において、ライフストーリーとのつながりがあることは多少示唆されたが、仮説を生成できるほどには至らなかった。さらに③についても、見られる人もいれば、ほぼ見られない人もいる。おそらく「推し」への消費行動について非合理的だと自己の中で感じるもののない、感じていても質問者に語る必要はないという人には見られないのだと推測できる。「推し」への消費行動は、「自分が楽しむものだから」と一貫して目的合理性の高いものだと語ったHさんには、そもそもお金の価値を低く見積もっているというライフストーリーがあった。目的合理性がある、もしくはないと感じる線引きは人それぞれであり、それもおそらくライフストーリーに関わってくるのだと考えられるため、検証を続けていきたい。

5.3 展望

「推し」という存在は、アイドルやアニメキャラというサブカルチャー文脈と深く繋が

りを持ち、現在では一般人にもさえ適用され、一種のブームのようにも見える。しかし、調査対象者の話を聞いてみると、「生きがい」や「神」とまで呼ぶような、生きる上で重要な大きな存在となっているケースも存在した。さらに、「推し」への消費行動は「貢」とも呼ばれることもある。「推し」への消費行動は貢ぎではないと言う人にさえ、目的合理性の低い消尽的な消費を行わせる力を持っている。「デュルケムによれば、「神」とはじつに社会のことであって、神がもつ巨大な力は、人間が社会をかたちづくることによって生じる巨大な力にほかならない」と『パラドックスの社会学』⁵⁴にある通り、デュルケムの定義で宗教を捉えるならば、ありとあらゆる存在を「推し」と呼ぶことで、「「推し」を推す集団」という大きな社会が形成されることは、宗教と呼ぶこともできる。「解釈違い」によって集団が分裂する様子は、宗派の分裂の様子に似ている。

以上をふまえると、多くの人が「推し」と呼ぶ対象を推すことは、宗教と近いのではないかと考えられる。本研究では、宗教、エロティシズム（恋愛）、贈り物を非生産性の面から捉えたバタイユの論を用いて「推し」にかかわる消費行動を考察し、本音であれ建前であれ、人々が消費行動に消尽性を求める様子を明らかにすることができた。このように、「推し」を深く考察することは、人類が神を信じる理由や、文化として宗教が生まれる理由に迫ることのできる一つの方法となるのではないだろうか。

⁵⁴ 森下 伸也，宮本 孝二，君塚 大学．パラドックスの社会学．新曜社，1989，336p.

引用・参考文献リスト

- 湯浅 博雄. バタイユ : 消尽. 講談社, 1997, 381p.
- G. バタイユ. 至高性. 湯浅 博雄訳. 人文書院, 1990, 406p.
- 大塚 久雄. 社会科学の方法-ヴェーバーとマルクス-. 岩波書店, 1966, 222p.
- 三省堂. 1998. 大辞林, 初版, 第7刷.
- 植田 康孝. アイドル・エンタテインメント概説(3) アイドルを「推す」「担」行為に見る「ファンダム」. 江戸川大学紀要. 2019, vol. 29 p. 133-153.
https://edo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=850&item_no=1&attribute_id=18&file_no=1, (参照 2019-12-17).
- 植田 康孝. アイドル・エンタテインメント概説(1) 「デジタル・ディスラプション」が迫るアイドル相轉移. 江戸川大学紀要. 2019, vol. 29 p. 79-107.
https://edo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=848&file_id=18&file_no=1, (参照 2019-12-17).
- 斎藤 清二. 「あ！萌え」の構造(10) - 「萌え」から「推し」へ. 対人援助学マガジン. 2019, vol. 29 p. 163-168. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol38/27.pdf>, (参照 2019-12-17).
- 大野 貴司. ファン・コミュニティ : 性格と機能. 体育・スポーツ経営学研究. 2007, vol. 21, no. 1, p. 47-55.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsmpes/21/1/21_KJ00008439659/_pdf/-char/ja, (参照 2019-12-17).
- 和田 充夫. 消費者行動研究の忘れもの--アート財消費の視点から. 商学論究. 2011, vol. 58, no. 4, p. 217-230.
https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=20375&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1, (参照 2019-12-17).
- 野村 一夫. “宗教文化論”. 社会学感覚. 文化書房博文社, 1992, p. 338-390.
- 新井 範子. ソーシャルゲームにおけるユーザーの心理特性と課金行動の関連性について. 上智経済論集. 2013, 58, 1・2, p. 277-287,
<http://dept.sophia.ac.jp/econ/data/58-21.pdf>, (参照 2019-12-03).
- 森下 伸也, 宮本 孝二, 君塚 大学. パラドックスの社会学. 新曜社, 1989, 336p.
- すず. [@rinrinharan] . (2019, 12.12) . Retrieved from
<<https://twitter.com/rinrinharan/status/1204890710081589248?s=20>>.
- かつちゃん兵庫いりこ糸目推し・ふみちゃ推し. [@kobo34110] . (2019, 12.12) . Retrieved from
<<https://twitter.com/kobo34110/status/1204996910622183424?s=20>>.
- りりな 新垢の為お友達募集中。°☆. [@GcuxcAGHJmGWsF6] . (2019, 12.10) . Retrieved from
<<https://twitter.com/GcuxcAGHJmGWsF6/status/1204180368946892800?s=20>>.
- 空. [@KSbgj6pDgmPsPua] . (2019, 12.05) . Retrieved from
<<https://twitter.com/KSbgj6pDgmPsPua/status/1202242177218179072?s=20>>.
- 鶏驢馬. [@40koshow] . (2018, 10.07) . Retrieved from

<<https://twitter.com/40koshow/status/1048849224505290753?s=20>>.

- まお ㄆㄛˊㄛˊㄙㄩˊ. [@electric__usagi] . (2019, 12. 03) . Retrieved from
<https://twitter.com/electric__usagi/status/1201689851088666624?s=20>.
- 佐々木 崇. [@takashi__0128] . (2019, 07. 03) . Retrieved from <
https://twitter.com/takashi__0128/status/1146428676474429440?s=20>.

謝辞

本論文の作成にあたり、始終適切な助言を賜り、また丁寧に指導して下さった後藤嘉宏先生に深く感謝いたします。照山絢子先生には、快く相談に応じていただきました。本当にありがとうございました。

後藤研の皆様方には、長時間のゼミの中での様々な議論から、多くの示唆と刺激をいただきました。ありがとうございます。

そして最後となりましたが、本研究の趣旨を理解し、長時間にわたるインタビューにも快く協力して頂いた調査対象者の皆様に、心から感謝いたします。